

東アジアの平和のために
日韓の若者は何ができるか

2012年度

第8回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター
お茶の水女子大学グローバル文化学環
同徳女子大学校外国語学部日本語科



韓国の国楽体験（7月25日、同徳女子大）



日韓民族衣装体験（7月25日、同徳女子大）



東海の海で（7月27日、雪嶽山合宿所）



グループ発表会（7月28日、雪嶽山合宿所）



38度線を背景に（7月29日、統一展望台）



合宿所を出発（7月30日、雪嶽山合宿所）

目次

第8回日韓大学生国際交流セミナー概要	1
森山新（お茶の水女子大学）	
講演	
今こそ過去を越えグローバル人とならん！	6
森山新（お茶の水女子大学）	
グループ研究	
トップダウン・ボトムアップで捉える日韓関係	8
日韓の歴史教育の比較	15
「慰安婦」問題の解決に向けて～日韓両立場から考える～	20
女性意識についての日韓比較	37
個人レポート【お茶の水女子大学】	48
個人レポート【同徳女子大学校】	74
総評	
第8回日韓大学生国際交流セミナーを終えて	96
金智英（お茶の水女子大学大学院生）	
今こそ、交流の力を	98
金榮敏（同徳女子大学校）	
グローバルな人材育成のための実践の場として	99
森山新（お茶の水女子大学）	
特別寄稿	
グローバル時代の第二言語教育・異文化理解教育	101
森山新（お茶の水女子大学）	
編集後記	111

第 8 回日韓大学生国際交流セミナー概要

森山新（お茶の水女子大学）

日時 2012 年 7 月 24 日～31 日

場所 同徳女子大学校（韓国）

主催 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環
同徳女子大学校日本語科

今回が第 8 回となる日韓大学生国際交流セミナーは本学の 25 名の学生と教員 1 名、TA の大学院生 1 名が参加し実施された。グローバルな視点に立ち、日韓両国の学生が言語・文化の壁を乗り越えつつ両国の間に横たわる未解決な問題について、挑戦的に討論を行うものである。

今回は TV 会議システムと Facebook、スカイプを導入、4 月から事前の遠隔交流が行われた。グループ別のテーマ設定とグループ分け、実習本間地などのスケジュールの打ち合わせ、事前討論などが TV 会議システムを用いて行われた。

1. 日程表

7 月 24 日	11:30	成田国際空港集合、OZ103 便で仁川国際空港へ
	15:30	仁川国際空港着、バスにて仁寺洞へ
	17:30	仁寺洞着、韓定食の食堂で歓迎会
	20:00	解散、ホームステイ先へ（ホームステイ）
7 月 25 日	10:00	開講式 挨拶 金榮敏（同徳女子大）、森山新（本学） オリエンテーション 同徳女子大日本語学科教員紹介 盧英姫、奥山洋子、石井、澤田、 総長挨拶 金永来総長 基調講演 李徳奉「グローバル時代における Gender Identity」 森山新「今こそ過去を越えグローバル人とならん！」
	13:00	同徳女子大博物館、美術館見学
	14:30	韓国文化体験 国楽（成均館大大同楽会） 念仏、けしの花、ヴォルフ川のメロディー、キャノン 日韓伝統衣装体験
	17:00	ソウル実習ミーティング (ホームステイ)

7月26日		テーマ別グループ別ソウル実習 (ホームステイ)
7月27日	10:00	同徳女子大集合、合宿へ出発
	14:00	雪嶽山合宿所到着
	19:00	グループ別発表準備 (合宿所泊)
7月28日	9:00	グループ別発表準備
	14:00	発表会
	18:30	韓日料理体験 (合宿所泊)
7月29日	9:30	雪嶽山登山
	15:00	統一展望台・6.25体験展示館見学
	20:30	送別会 (合宿所泊)
7月30日	9:00	合宿所出発、ソウルへ (ホテル泊)
7月31日	12:00	チェックアウト、貸切バスにて仁川国際空港へ
	15:00	OZ106便にて帰国の途へ
	18:00	解散

2. 参加者

2.1 本学学生 (25名)

学籍番号	氏 名	所 属	学年
1210273	毛利 文香	言語文化学科	1年
1210280	山本 梨紗	言語文化学科	1年
1110109	石川 しほみ	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
1110115	岩田 明子	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
1110146	永田 祥	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
1110160	矢萩 まりこ	人文科学科 (グローバル文化学環)	2年
1110218	遠藤 美里	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
1110230	小林 詩織	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
1110238	高橋 梨紗	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
1110255	林 沙樹	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
1110261	藤田 佳那	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年
1110264	船木 円香	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2年

1110267	馬淵 茉衣	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2 年
1110268	丸山 栞	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2 年
1110270	三谷 菜穂美	言語文化学科 (グローバル文化学環)	2 年
1110427	鈴木 羊子	人間社会科学科 (グローバル文化学環)	2 年
1010119	齊藤 成美	人文科学科 (グローバル文化学環)	3 年
1010209	岩淵 麻里亜	言語文化学科 (仏文)	3 年
1010235	志田 雅美	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3 年
1010237	寫本 真澄	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3 年
1010250	陳 海茵	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3 年
1010263	林 千恵	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3 年
1010278	溝部 久江	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3 年
1010286	渡邊 真梨	言語文化学科 (グローバル文化学環)	3 年
1012403	齋藤 芽依	人間社会科学科 (グローバル文化学環)	3 年

2.2 同徳女子大学生 (24 名)

氏 名	所 属	学年
하예진 (ハ・ェジ`ン)	日本語科	4 年
강혜진 (カン・ヘジ`ン)	日本語科	4 年
정예진 (ジョン・ィェジ`ン)	日本語科	2 年
박지원 (パク・ジ`ウオン)	日本語科	2 年
최솔아 (チェ・ソラ)	日本語科	2 年
유영지 (ユ・ヨンジ`)	日本語科	2 年
정민정 (ジョン・ミンジ`ョン)	日本語科	1 年
배운영 (ヘ`・ユンヨン)	日本語科	3 年
이수현 (ィ・スヒョ`ン)	日本語科	3 年
전언현 (ジョン・オンヒョ`ン)	日本語科	3 年
김유리 (キム・ユリ)	食品栄養学科	2 年
김유정 (キム・ユジ`ョン)	日本語科	2 年
이소영 (ィ・ソヨン)	日本語科	3 年
이예주 (ィ・ェジ`ュ)	日本語科	3 年
임이슬 (ィム・ィスル)	日本語科	3 年
최예지 (チェ・ィェジ`)	日本語科	3 年
도수진 (ト・スジ`ン)	日本語科	3 年
김진아 (キム・ジンア)	日本語科	1 年
임연정 (ィム・ヨンジ`ョン)	応用化学科	4 年

이소희 (イ・ソヒ)	日本語科	3 年
김국진 (キム・グッチン)	日本語科	3 年
이송희 (イ・ソンヒ)	日本語科	3 年
이윤지 (イ・ユンジ)	日本語科	1 年
전예원 (チョン・イエウォン)	日本語科	1 年

2.3 スタッフ

氏名	所属	職位
森山 新	お茶の水女子大学	教授
金 榮敏 (キム・ヨンミン)	同徳女子大学校	副教授
金 智英 (キム・ジヨン)	お茶の水女子大学	大学院生 (TA)

2.4 ホームステイ先 (20 名)

本学学生			同徳女子大学生	
名 前	所 属	学年	名前	所属
齊藤 成美	グローバル文化学環	3 年	하예진 (ハ・イエジン)	日本語科
永田 祥	グローバル文化学環	2 年	정예진 (ジ・ョン・イエジン)	日本語科
馬淵 茉衣	グローバル文化学環	2 年	박지원 (パ・ク・チウォン)	日本語科
藤田 佳那	グローバル文化学環	2 年	강혜진 (カン・ヘジン)	日本語科
志田 雅美	グローバル文化学環	3 年		
林 沙樹	グローバル文化学環	2 年	김성희 (キム・ソンヒ)	助手
林 千恵	グローバル文化学環	3 年	배윤영 (ベ・ユンヨン)	日本語科
矢萩 まりこ	グローバル文化学環	2 年		
岩田 明子	グローバル文化学環	2 年	김유정 (キム・ユジヨン)	日本語科
岩淵 麻里亜	言語文化学科 (仏文)	3 年	김윤진 (キム・ユンジョン)	日本語科院生
陳 海茵	グローバル文化学環	3 年		
渡邊 真梨	グローバル文化学環	3 年	이혜성 (イ・ヘソン)	日本語科
寫本 真澄	グローバル文化学環	3 年	남종숙 (ナム・ジヨンスク)	日本語科
鈴木 羊子	グローバル文化学環	2 年	임이슬 (イム・イスル)	日本語科
溝部 久江	グローバル文化学環	3 年	손자영 (ソン・ジヤヨン)	日本語科
遠藤 美里	グローバル文化学環	2 年	최예지 (チェ・イエジ)	日本語科
石川 しほみ	グローバル文化学環	2 年	성유나 (ソン・ユナ)	日本語科助手
高橋 梨紗	グローバル文化学環	2 年		
三谷 菜穂美	グローバル文化学環	2 年	이현지 (イ・ヒョンジ)	経営学科
齋藤 芽依	グローバル文化学環	3 年	이소희 (イ・ソヒ)	日本語科

丸山 栞	グローバル文化学環	2 年	이경은 (イ・キョンウン)	日本語科
小林 詩織	グローバル文化学環	2 年	박슬기 (パク・スルギ)	日本語科
船木 円香	グローバル文化学環	2 年		
毛利 文香	言語文化学科	1 年	이윤지 (イ・ユンジ)	日本語科
山本 梨紗	言語文化学科	1 年	손혜경 (ソン・ヘギョン)	日本語科

今こそ過去を越えグローバル人とならん！

森山新（お茶の水女子大学）

このセミナーも早いもので、8 回目を迎える。日韓セミナーが会を重ねる中で思い起こすのはかつての朝鮮通信使である。実は朝鮮通信使は江戸時代以前からあったそうだが、豊臣秀吉が当時の朝鮮を侵略し、中断した。秀吉の朝鮮侵略で両国の関係は最悪になった。

その後江戸幕府を開いた徳川家康は両国関係を改善すべく、朝鮮に使者を遣わし、朝鮮通信使は再開した。通信使は国を挙げて迎えられ、その回数は 10 数回にわたった。

明治に入り、両国関係は再び悪化、日清、日露戦争を経て、1910 年ついに日本は韓国を植民地化してしまった。そして悲しくつらい時代を経て、1945 年、韓国はついに解放の日を迎える。これを韓国では「光復節（クァンボクチョル）」と呼んでいる。

しかし、両国関係の修復には時間を要した。1965 年に日韓国交正常化が実現しても、両国関係はよくならなかった。それはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられよう。第一にドイツのように政権が交代せず、過去に対する正当な謝罪と清算が行われなかった点を挙げることができる。第二に「徳川家康」のように関係改善のために努力する人物が現れなかったことも原因であろう。であるとすれば、私たち若者が両国の関係を変える先頭に立ち、両国の関係を変えるべきであろう。

では具体的にどうしたらいいか。まず私たちの心がグローバル化することである。確かにグローバル化には正の部分と負の部分とがある。しかし「心のグローバル化」は正、つまり絶対に必要なことである。

今までの国際関係は国益優先が大前提であった。しかしそれでは限界があると気づき始めた世界各国は徐々にグローバルな視野に立ち始めて問題解決に取り組み始めた。最近の地球温暖化や東日本大震災復興への取り組みなどがそれである。しかし依然、その背後には「自国の利益」が見え隠れしている。言うならば、まだ心のグローバル化ができていないということである。でも若者なら、自国の利益を越え、それができると信じている。

心のグローバル化を果たすためには、第一に、相手の立場に立って物事を見つめること、第二に一段上の視点に立って物事を見つめることが重要である。日韓関係を兄弟関係にたとえてみたい。歴史的に考えれば韓国が兄で日本が弟であろう。これまで韓国は兄貴のメンツを立てたがるお兄さんであり、日本は兄貴を兄貴とも思わない生意気な弟であった。これで兄弟関係が仲良くなるはずはない。

この兄弟の対立を越えるにはどうしたらよいか。それぞれが相手の立場に立つことが重要であろう。またそれを可能にするためには、親の立場に立つことが重要である。親から見ればどちらも愛する息子であり、対立が起きたのにはどちらにも非があることが見える。

かつて同徳女子大の総長が本学を訪れた際に、「韓国は寛大さ、日本は謙虚さを」と語られたことがある。心のグローバル化はまさにこれを意味する。

最近「文化相対主義」という言葉が叫ばれる。自文化中心主義に対する言葉で、多文化共生には必要な考え方とされている。しかし人間はそれぞれある文化の中で育ち、そのプロセスの中で、自然と自文化に愛着を持つようになった。これは自然な適応である。しかし、その一方で、異文化には愛着を持ちにくくなってしまう。また異文化を自文化の尺度で計ってしまうことになる。その結果、何で兄貴はこうなんだ、または何で弟はこうなんだ、ということになる。相手の立場に立ち、親の立場に立つことが必要になる。

これを可能にするためには何が必要であろうか。愛情であろう。兄弟や親の愛がこれを可能にしてくれる。「文化相対主義」も頭で「全ての文化にはそれぞれ価値がある」と考えるだけでは限界がある。ややもすれば無関心で終わることもあるからである。

ではどうしたら愛がめばえるであろうか。人は愛し合うと、全てがよく見え、欠点が見えなくなる。だから異文化に接する場合にも、相手の理解できない部分はひとまず置いて、まずは、相手が持っていて、自分にはない、すばらしい面を探そう。そしてそれを尊敬し、学ぼう。そこに愛着が生まれ、尊敬が生まれる。互いに相手のよいところを探してみよう。日韓はお互い、自分にはないよいところをたくさん持っている。

「心のグローバル化」により、我々が過去を克服できたとすれば、今まで対立に費やしてきた思いと力を日韓、東アジア、そして世界の共生のために用いよう。そうすれば両国の悲しい過去を越えるだけでなく、共生のグローバル社会を築く第一歩となるであろう。

東アジアでは未だ東アジア共同体、または東アジア連合の影すら見られないが、ヨーロッパは既に国を越え欧州共同体を経て、欧州連合（EU）を構築、共生の道を歩み出している。その背景には2度にわたる世界大戦の悲しい経験がある。そこで叫ばれているのが「複言語・複文化主義」である。これはこれまでの国単位の発想を地域単位へと一段階高めようという試みである点で評価できる。また、この考えはこれまで国や民族に帰着されがちであった言語や文化を個へと帰そうとするものである。グローバル時代の我々はもはや言語や文化といったものを、国を単位に見るべきではなく、個の中に内在し、それらが統合されて個の言語と文化を形成していると考えるべきである。例えば私自身の中には、日本で育んだ言語と文化だけでなく、韓国で生活する中で身につけた言語と文化とが息づいている。個に息づいた言語と文化が多様であればあるほど、それは他の個とつながる可能性となり、共生力となる。こうなればこれまで国力が背景となり、対等になりにくかった個々の言語・文化はより対等なものとして各個人の中に息づくことになる。また単言語・単文化から複言語・複文化への転換は独善性、排他性からの脱却にもつながる。この複言語・複文化主義は東アジアの共生にも様々な示唆を示してくれる。

今回のセミナーはこれまでの国の視点を越え、グローバル人とならんとするものである。このセミナーが、国連決議より、日韓首脳会談より、六か国協議よりも歴史的な一歩となることを信じたい。

トップダウン・ボトムアップで捉える日韓関係

お茶の水女子大学 齊藤成美 志田雅美 林沙樹 藤田佳那 馬淵茉衣 永田祥
同徳女子大学校 ハ・イエジン ジョン・イエジン パク・チウオン チェ・ソラ
ユ・ヨンジ・ジョン ミンジョン

1. 研究の動機と目的

生きているなかで、文化の違いや価値観の違いによるコンフリクトを抱える場面はそう少くはない。ましてやグローバル化する社会の中で様々な国籍や背景をもった人々が行き交う時代に身をおく今の世代などは、よりこの「違い」を身にしみて感じる機会が多いかもしれない。ただ、この「違い」による対人関係における対立を低減することができれば、それは個々人の円滑かつ良い人間関係を形成し、ひいてはこの世界を平和に導く1つの道となるのではないだろうか。「違うから」といって歩み寄らないことは、あまりに勿体なくて寂しいことであるし、「違い」を理解して、そうした違いが生じることは国籍や文化に関わらず個々が違う人間なのだから当然だと受け容れて接することができれば、悲しい諍いも少しは減って、より良い友好関係を築くことができるかもしれない。

そこで私たちのグループは今回のセミナーにおいて、日韓両国における価値観や文化の違いをのりこえるにはどうすればよいのか、多くの人々にとって最も大きな、国際情勢をはじめとする様々な情報を得る手段であり、人々の心証の善し悪しにも大きな影響を与えうるメディアなどの「報道」と、他国との関わり合いにおいてもっとも大きな「違い」のひとつである一方で、互いをより理解する為の手段ともなりうる「言語」の2つの観点から調査することにした。

今回の実習の目的とは、「互いの文化を知り、理解し、友好関係を深める」ことである。そのテーマのもと、韓国の中の日本/日本の中の韓国を知るために、私たちは言語教育と報道を中心に調査し、議論することに決めた。

言語教育は、互いの文化交流の基礎、受け皿のような存在であると考ええる。なぜなら、言語教育の場合は、自分と習得言語を使用している社会との関係性を考える機会となるからである。また、互いの文化の多様性・複雑性を理解するための重要なツールとして用いることができる。学習者は何を考え、何のために言語を習得しようとしているかという点も、私たちが関心を持ったテーマである。

報道は第4の権力と言われ、国民の価値観の形成に大きな影響を与えている。日韓友好の懸け橋にも、二国間の不和にもつながる重要な要素であると考ええる。例えば、韓国で作成されたロケットミサイルの打ち上げ映像では、技術提供した日本の国旗が画像修整され消えていたし、日本では韓流ブームが起こっているが、正しい韓国像が浸透しているようには思えない。また、政府の意向と深く関わっているために自文化利益主義に陥りやすい可能性が高い。だからこそ、あるべき報道の姿を考えることが真の日韓交流となると考え、チームテーマとして定めた。

2. 事前調査

2.1 日本側

セミナーの事前調査は報道、言語グループ別に行った。両グループともに公的SNSなどにおけるアンケートとその集計を中心に韓国側と共に行い、報道グループは過去の日韓における報道の違いを示す具体例となるニュースなどについて調べた。

報道グループのアンケート対象は10～20代の男女37人、言語グループのアンケートは韓国語学習者を中心に33人を対象とした。

報道グループのアンケート内容は以下の通りである。

① あなたの韓国に対するイメージはどのようなものですか？

	全くそう思わない	あまりそう思わない	わからない	時々そう思う	非常にそう思う
先進国である					
おしゃれである					
ライバルである					
分化が全く違う					
価値観が似ている					
豊かである					
ドラマが有名					
「私」より「公」である					
景気が良い					

- ② その他韓国に対するイメージを自由におかきください
 ③ 韓国に関するニュースをよく見聞きますか？
 ④ 韓国のメディアを見たことがありますか？（ニュース、ドラマ、新聞、音楽など）
 ⑤ メディアは中立、公平だと思いますか？
 ⑥ 質問⑤の理由をお答えください（ ）
 ⑦ もし「情報のゆがみ」をメディアから感じたことがありましたら、実体験を踏まえてお書きください（全7問、尚年回答者の年齢、性別情報含む）

次に、言語グループのアンケート内容は以下の通りである。

- ① 日常において韓国語に触れる機会はあるか
 ② それはどのような場所か
 ③ 見かけたときどのように感じるか
 ④ 韓国語話者との交流はあるか
 ⑤ それはどのような相手か
 ⑥ 今までに韓国語を勉強したことがあるか
 ⑦ 勉強したきっかけは何か
 ⑧ 勉強の方法は
 ⑨ 勉強を始めたときの周囲の反応は
 ⑩ どの程度韓国語ができるようになりたいか
 ⑪ 勉強していく上で難しいと感じたことは
 ⑫ 簡単だと感じたことは
 ⑬ 韓国語ができて得したことはあるか
 ⑭ それはどんなことか
 ⑮ 反対に損したことはあるか
 ⑯ それはどんなことか
 ⑰ 韓国語を勉強していて韓国に対する印象は変わったか
 ⑱ 今後韓国語を勉強したいと考えているか
 ⑲ 最後に知っている韓国語があれば、できるだけ沢山記入してください（全19問）

また、過去の日韓における報道の違いを示す具体例となるニュースは、衛星ロケットの話題や同文面のニュースの原稿の改変、

(例：韓国 KBS の報道『日本による植民地支配後はじめての・・・』

日本 NHK の報道『戦後はじめての・・・』)

などを挙げることができるが、こうした事例からは同じニュースでも心証が全く変わってくる報道の仕方、マスコミ側による刷り込みのようなものが確かに存在しているということがわかるだろう。

また国をまたがった違いにも気づき、冷静に物事を捉えるには、やはりより多くの情報媒体から情報を得ることが必要であり、その際に「言語」が大きな役目を果たすことになるのでは、という関連性にも気づいた。

2.2 韓国側

報道グループ、言語グループともに、日本側と同内容のアンケートを韓国人に向けて行い、また言語が各国にどんなイメージを与えるかについて実際街に出て調査した。モノマート、カケハシへの訪問について(1)(2)に分けて以下に示す。

(1)モノマート

モノマートはソウル市東部二村洞に位置するスーパーである。私たちは東部二村洞に日本人が多く住んでいて、そこに日本式スーパーがあると聞き、体験のためそこを訪ねた。そこで私たちは日本で売られている商品を直接見たり、買ったりすることができた。当然ながら商品広告もあり、日本の食品広告のコピーも見られたが、韓国とは違って視覚的なことにこだわるより、商品の説明を丁寧に書いた形式だったのが印象的だった。店は大きくはないが、日本風のスーパーを韓国の中で体験できたことにその意味があると思う。



写真 1.モノマート訪問の様子①



写真 2.モノマート訪問の様子②

(2)カケハシ

インターネットで行ったアンケートとともに、もう少し具体的なボトムアップの資料を集めるため、カケハシという韓日交流カフェでインタビューをした。カケハシは韓日間交流増進と親善のために各種の集まりと交流会などが開かれる「オフラインカフェ」である。カフェのオーナーに了解を取り、カフェを訪れた韓国と日本の人々にインターネットで行ったア

ンケートにもう少し具体的な質問を付け加えたアンケートを配って、その答えに基づいてインタビューをした。付け加えた質問には、具体的に各国の言語の勉強を始めるようになったきっかけと、初めて接したメディア、そのメディアを通じて勉強しながら変化した各国のイメージを聞いた。そして、実際にその国の人に会った時、心遣いをした経験があるかどうかなども聞いた。

答えが様々なので発表には直接使わなかったが、多くの日本人が韓国や韓国人に対して元気だ、生き生きとしたというイメージを新たに持つようになったという結果が出た。また、韓国語を勉強しながら実際に韓国の人に会い、互いの差を認識して心遣いをしたという答えも見られた。

一方、韓国の人は日本や日本人に対して多様な日本の文化に興味を感じたという結果が出た。日本人に会った時、いろいろな心遣いをし、特に本音と建前の差を意識したと答えた。

インタビューに協力してくれた人は初めて会った人たちだったが、日本と韓国、両国に関連しているという理由で喜んでインタビューに答えてくれた。インターネットで行ったアンケートにはない、多様で具体的な返事を取れる良い経験だった。

このようなインタビューを通じて、私たちが考えた日韓の人々のボトムアップの交流が実現する姿を見られた気がした。

3. 韓国での野外実習

セミナー3日目の7月26日、グループ別野外実習として、ソウル市内にある「JAPAN FOUNDATION(国際交流基金)ソウル日本文化センター」を訪問した。国際交流基金とは、国際文化交流事業の実施によって、日本と諸外国との国際相互理解を増進させ、良好な国際環境、対外関係の構築および維持を行っていくことを目的として設立された独立行政法人で、日本の文化を世界に発信する専門機関としては日本で唯一のものである。具体的には、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流といった3つのフィールドに渡って事業を展開している。

ソウル日本文化センターは国際交流基金の19番目の海外事務所である。今回の訪問では、事務所長の本田修さんに1時間ほど講義をしていただいた後、センター内にある文化情報室を見学させていただいた。

本田さんには、日韓の文化交流というテーマでお話を伺い、主に出版物やテレビ、音楽などの大衆文化を通した両国の交流について、現在の状況を知ることができた。韓国における出版物の1割近くが日本の出版の翻訳であるというデータや、日本に輸出される韓国のテレビ番組が年間8000本以上に及ぶという事実から、日韓の大衆文化の相互交流が深いことがよくわかった。日本と韓国は文化の面で相互の需要を補い合う関係にあり、これからは共通

の文化市場、一つの経済圏として協力していくべきだという話が印象的であった。また、日本と韓国の社会には少子高齢化や社会格差等の共通の課題があることから、解決のヒントを



写真 3. 日本映画上映会のチラシ



写真 4. センターの看板の前での集合写真

得るパートナーとして信頼関係を気付いていくべきであるという話もあった。地域連携による競争の時代である 21 世紀において、民主主義、市場経済といった基本的価値観を共有する日韓の関係は東アジア地域連携のコアとなるはずだという話も非常に印象に残っている。

文化情報室には日本の文化や日本語に関する文献資料が豊富に用意されていた。最新の雑誌等も閲覧可能になっていた。17 歳以上であればだれでも会員登録ができ、会員は文献を借りることができる。絵本などが置かれた子供向けのコーナーはつい最近オープンしたばかりだそうで、日本に興味のある幅広い年代の方々に日本文化を紹介、発信する場となっていた。

4. 調査結果

実習先の「国際交流基金 ソウル日本文化センター」による日韓国民の意識調査(2008)をみると、日本に親しみを感じている韓国人は 37%、感じない韓国人は 62%であり、韓国に親しみを感じている日本人は 51%、感じない日本人は 41%だった。一方、私たちが行った互いの言語を勉強している大学生を中心に行ったアンケートでは、日本に対する印象が良いと答えた韓国人は 72%、悪いと感じた韓国人は 17%、特に何もない、と感じた人は 11%であり、韓国に対する印象が良いと答えた日本人は 77%、悪いと答えた人は 4%、特に何も思わない人は 19%であった(対象者は SNS を使用し、私たちの知り合いを中心に行ったために、意図的ではないが大学生が中心となった)。

しかし、この結果から言語を勉強している人は互いの国に対して良い印象を持っている傾向があると言える。また、言語学習者はその国に対し良い印象を持ち続けているという結果があり、互いの言語ができたことで得たことがあるか、という問いに対して、韓国人の 80%、日本人の 67%が「はい」と答え、中には、「ビジネスの手段として日本語を勉強したが、そのことによって日本への印象が良くなった」と答える人もいた。

また、報道班によるアンケートでは、日本のことをよく思わない理由として「歴史について話した時に、日本人の価値観が違ったことに失望した」という意見があった。歴史に対する日本と韓国それぞれの価値観としては、韓国人が「過去があってこそ今」と考え、今を形成する土台である過去を重要視するのに対し、日本人が「過去は過去」とし、今やこれからのことを重要視する傾向があると言われている。

以上の調査から、価値観の違いによる互いの悪い印象も、一度互いの価値観を考える機会を持つことができれば、相互理解につながることを期待できることが分かる。

5. 考察

5.1 日本側

報道と言語の二つの観点から私たちのテーマである「韓国の中の日本／日本の中の韓国」について考えてきたが、今回のセミナーほど私たちの主張を裏付けるものはない。なぜならば、このセミナーそのものが私たちの結論の一つである言語・交流でのボトムアップを実行しているからである。次世代として今後の日韓関係調整に関わる二国の学生が話し合い、交流すること。こうした草の根のつながりこそが未来の両国の関係を支えるものとなる。

私たちがこのセミナーを通して学んだことは沢山ある。まず、私たちが渡航前にメディアや書物、授業などで見聞きしていたことは実際に現地を訪れてみると違うことがあるということだ。例えば、韓国人は自己主張が強い、気が強いなどと耳にしていたため、発表準備の際に話がまとまらずに口論になるのではないかと危惧していたが、



写真 5. 日韓学生の話し合いの様子

そのような事態は起きなかったし、彼女達の性格がそのようだと感じたことはなかった。むしろ協調的で謙虚であると感じたほどである。もちろん個人差はあるだろうが、日本人から見た韓国人の国民性イメージがステレオタイプ化し、全韓国人がそうであると潜在的に刷り込まれていた気がした。それから、家庭や学校で受けてきた教育や考え方が違うこともセミナーを通して改めて気づかされた点である。世間でも問題になっている「竹島/独島」や「日本海/東海」といった領土/領海の領有・呼称問題がその代表例である。こういった問題について深く話し合ったわけではないが、ふと会話に出た時にその違いを強く認識した。どちらの呼び方が正しいとは言えないため、それぞれが学んできたように呼ぶのが自然だが、その単語を口に出す時にその呼び方が当然だとは考えないように心がけたいと感じた。これは未解決の問題であり、どちらかが勝手に終止符を打ってはいけないのである。今回のセミナーではこういった問題を話し合うまでには至らなかったが、近い未来こうした問題について両国の学生が意見を交わす機会が生まれることを願っている。

以上の経験から言えることは、直接的な交流なしには真に互いを知ることはできないということである。交流してみなければ両者のステレオタイプは崩せないし、何か誤解や偏見があったとしたらそれを打開していくのは人と人との直接的なつながりである。これが、私たちが日韓の協力体制を築く一要素として交流を重視する大きな理由である。また、交流というボトムアップは情報の受け止め方にも影響を及ぼしうる。私たちが発表に向けて議論していくうちに互いの価値観の背景を理解していったように、偏った報道等によって作られた表面的な価値観やそれに伴う感情だけに目を向けるのではなく、その背景について考えて納得すること、自身の視野の拡大につなげることが交流を通して可能になる。そして交流で得た理解を今度は自らが情報元として発信していくことが大切である。私たちが体験したことは誇張されていない、紛れもない事実である。そういった生の声を伝えていくことが日韓の歩み寄りの一歩となるだろう。

5.2 韓国側

地理的に近い韓国と日本。この二つの国は距離が近い分、中世から長い間様々な交流を行ってきた。だが近代に至っては摩擦もあり、その結果、現代では両国国民の間で色々と複雑な感情が渦巻いてしまい、様々な問題がきれいに解決されず、互いに誤解している部分も相当あるのではないかと思う。両国が理解を深める事業の一環として、このセミナーを通じて国際交流の意味を確認することになったのである。

このセミナーを通じて感じたことは色々あるが、まずは意見を出す流れに若干の違いを感じた。私たちはセミナーの前に Facebook や LINE などでも意見を話し合っていた。韓国ではよく何かを決める時、多数が賛成する方へ一気に進めていくが、日本側は互いの話を全部聞く方向に進むようだった。日本側の学生とは初めての討論だった分、意見がちゃんとまとまっているのかとも思った。ここで、「日本の人々はやはり優しい」、「配慮心が強い」などが思い浮かんだ。これらは韓国に広まっている日本人に対しての印象だが、「自分の意見をよく表に出さない」という偏見もそれなりに皆が思っていることである。しかし、日本側のみんなは、必要な時に自分の意見を出すことに迷いはなく、ただ配慮があるのみだった。第二に生活の部分である。期間は3泊4日で短いし、対象もゲストスチューデント一人だけだったので速断と一般化をするつもりではないが、私たちは前もって先生から生活面での注意点をいろいろと聴いていたので、韓国での生活を説明しながらも少しの不安はあった。日本のアニメやドラマは韓国のマニアたちに結構広まっているが、韓国のドラマや映画はここ最近マスコミによってそのブームが注目され始めたばかりである。そのため、日本人は韓国の文化に接する機会があまり多くなく、西洋文化以外には不慣れかもしれないと考えていたが、その誤解もすぐに消えた。日本側のみんなは違いをすぐ受け入れてここでの方式で行動してくれたのだ。

近いと言っても明らかに距離が離れている分、両国はメディアなどの媒体を通じて互いのことを知るようになるのが一般的だが、マスコミによってろ過される可能性がある。その観

点が互いに対して良いものであろうと悪いものであろうと、影響を受けるのは避けられない事実だ。その過程で誤解も生まれるし、ステレオタイプにもなる。今回のセミナーではまだ深いところまでは接近していかなかったが、直接会って少しの、または多くの違いを再認識し、誤解が解けた部分もあるので、この交流はとても肯定的な効果があったと思う。まだ両国の間で解くべき問題は残っているが、私たちがこの交流を通じて互いをもっと分かりあえたように、こういう往来が増えていく時、様々な問題を一緒に解決していけるだろう。

<参考文献>

国際交流基金 HP

<http://www.jpf.go.jp/j/>

国際交流基金ソウル日本文化センターHP

<http://www.jpf.or.kr/japanese/index.html>

毎日新聞 2009年1月4日 (ソウル日本文化センターでいただいた資料)

日韓の歴史教育の比較

お茶の水女子大学 林千恵 陳海茵 渡邊真梨 畠本真澄 岩渕麻里亜 岩田明子
矢萩まりこ
同徳女子大学校 ペ・ユンヨン キム・ユリ イ・スヒョン チョン・オンヒョン
キム・ユジョン

1. 研究の動機と目的

日韓の間には、特定の歴史的事象に対して認識の差がある。これは、日韓の間に限らないことではあるが、竹島問題は特に両国の間で異なった認識があり、一体真実は何なのか、という疑問から始まり、どうして異なった認識が生まれてしまったのかについて議論の焦点が移っていった。両国民の認識の違いは、そもそもその教育に原因がある、という意見が多く、教育を見直すことで両国の平和の構築、さらには東アジアの平和にもつながるのではないか、という考えを以って歴史教育の比較を行うこととした。

2. 事前調査

「歴史教育」というテーマが幅広いため、まず両国の主張の食い違いが多い、近現代の歴史に絞って、その中でも私たちが習った高校の歴史教科書やニュース、新聞などでよく触れられているいくつかの歴史的事象のなかから竹島/独島問題を選んだ。特定の歴史的事象を選んだ理由は、具体例として何かひとつ挙げたほうが、教科書記述の違いや認識の違いを示す際にわかりやすいと考えたことだ。

2.1 日本側

日韓で歴史的事実の教科書記述を比較するために、日本側はグループのメンバーが一番多く高校時代に使用していた、「日本史B」（山川出版）を参考にした。竹島/独島に関して記述されている部分を調べた。

また、実際学校で使われている教科書は、政府のふるいにかけられたものなので、日本で使われている教科書はどういう意図と流れで作成されたのかについて調査した。その際に「最良の教科書を求めて（つなん出版）」と「教科書の思想—日本と韓国の近代史—」（すずさわ書店）との2つの文献を参考にした。またお茶の水女子大学の人文社会科教育コースの教授にもインタビューをして意見を求めた。他に竹島/独島について公平に記述されている「世界史B」（山川出版）や逆に、竹島/独島が明らかに日本の領土だと主張する「世界史の教科書」（扶桑社、つくる会）にも目を通した。

また、実習の場が韓国であったため、日本側は事前に日本で高校の歴史の先生にインタビューを敢行し、韓国での実習に臨んだ。内容は、

①学習指導要領に沿って授業を行っているか

②中立的な立場で歴史の授業を行っているか

③歴史的なめぐり（領土問題など）は、歴史教育の影響を受けていると思うか
といった質問を用意し、行った。スケジュールの関係からか、回答はメールでの回答となった。（回答は4. に記述）

2.2 韓国側

竹島/独島問題を扱うと決まってからは、その問題がどう教えられているのか、教育の実態を調べるために、高校の歴史教科書で独島について記述している部分を抜粋してまとめた。（国家が出す国史、一般の出版社が出す大韓教科書、金星教科書から抜粋。三冊とも高校で使用した教科書。）

続いて、現在の歴史教育の問題、正しい教育とその必要性、教育の重要性を調べるため、国会図書館、東北亜歴史財団、独島研究所両国で歴史的な事実、両国の領土主張とその根拠、歴史歪曲の背景、原因、影響、さらに韓国教育課程評価院で教科書検定過程について調べた。教育は政府によって国家的に利益を得る方向で行われるため、歴史的な事実だけではなく国家の政治的な状況や教科書検定のように歪曲が発生する可能性がある部分も調べた。

3. 韓国での野外実習

高校訪問。メンバーの1人であるキム・ユリさんの母校、弘益大学校付属高校の歴史の先生にインタビューをしに行った。質問内容は、

- ① 歴史教育はこれまでどのような歩みをしてきたのか
 - ② 国際社会でもめている歴史に対して、もし事実を歪めているようなことがあるなら、今の教科書の記述を変えるべきか。
 - ③ ②の状況になった時、かつ教科書の記述が変わらないものとした時、学校の先生はどのようにして授業をするのか。
 - ④ 今の歴史教育に対して感じる問題点はありますか。あるとすれば、どのように変えていくべきだと考えますか。
- (回答は4. に記述)

4. 調査結果

4.1 インタビューの回答（日本側）

- ① 学習指導要領を読んで授業に取り組んでいる。(中には読まないで授業にのぞむ先生もいるそう。)
- ② 授業は中立的に行っている。授業は学問を教える場なので、常に中立に立つことが求められる。また、学校で授業をする際には、多数の生徒を相手にし、その中にはおじいさんが旧軍人である人もいれば、外国籍の人もいるため、生徒のメンタル面への影響を考えても、中立的な立場からの授業が必要である。
- ③ 歴史認識の差は日韓の間だけに生じているものではなく、また国家間、民族間だけに生じるものでもありません。個人の間にも生じるものですが、歴史的なめごとは歴史学の本質に由来するものなので、当然のことだと思っている。また、歴史認識の差は学校における歴史教育が大きく影響していると考えている。

4.2 インタビューの回答（韓国側）

- ① 韓国では受験が非常に重要視されているので、授業も必然的に受験に向けたものになってしまい、中立的な立場で授業をするようには心がけているが、どうしても受験に有利な授業になってしまいがちである。また、様々な教材（映像や経験者の話など）を使用して授業を行いたくても、受験を考慮すると時間が足りずにできずにいる。
- ② 教科書については、国がつくっており、国の意向が教科書記述に反映されるため、現場はそれに従うしかないと考えている。
- ③ ②で回答した通り、現場の教師は国の指導に従うほかにと思うが、授業を行うなかで、口頭でより事実に近いことを生徒に伝えることはすると思う。
- ④ 両国が正しい事実を教えなければいけないのに、現時点で日本の扶桑社の教科書のように事実でないことを伝えていることもあるので、問題点があるとしたら、そういったことだと思う。両国がきちんと事実を伝えていくことが必要である。



弘益大学校付属高校でのインタビューの様子



インタビュー後の先生との集合写真

4.3 教科書（記述）の違い

竹島/独島問題が記載されている教科書およびその記述に関する比較結果は以下の通りである。

<韓国側>

「国史・歴史」の教科書に記載されている。分量は日本に比べて多い。内容としては、主に①第二次日韓条約を当時の日本総理大臣に無理やり調印させられたこと、②韓国の高宗皇帝が条約を無効だと宣言した以上、日帝は独島を不法に占拠したこと、が主である。実際に記述されている内容としては、「日本は日露戦争の中に独島を不法的に自国の領土に編入したし、今日までも多くの日本人が独島を自国領土と主張している。一部日本政治家たちがまるで年例行事のように独島の領有権を主張する妄言を言うかと言えば、教科書でまで独島を「竹島」に表示して自国領土であることのように歪曲している。」（(株)大韓教科書）や「日帝は、米国とは桂タフト密約、イギリスとは第2次英日米同盟を結んだ後、露日戦争で勝利すると、ロシアとポーツマス条約を締結し、国際社会から韓半島への排他的支配権を承認された。そして一方的に乙巳条約を発表して大韓帝国の外交権を奪い、統監府を設置して保護国とした。独島は歴史的・事実的にも国際法上の大韓帝国を継承した私たちの領土である。」（教育人的資源部 国史編纂委員会 国政の書籍編纂委員会）といった趣旨の記述が見られた。

<日本側>

現行版(07、08年度版)の高校教科書で、竹島を記述している教科書は、「地理B」が50%、「地理A」が44%、「政治・経済」41%、「現代社会」30%、「日本史A」13%、「日本史B」8%である。このように、日本では竹島問題はどちらかというと「地理」や「経済水域」の問題として教科書で取り上げられている。高校地理の場合、学習指導要領の「解説」の記述では、「北方領土など我が国が当面する領土問題や経済水域の問題にも着目させ、北方領土については我が国が正当に主張している立場に基づいて的確に扱う。」となっている。北方領土が日本の固有の領土ということを必ず教科書に取り上げなければならなかった流れで、多くの出版社がそのついでとして竹島のことも記載し始めるようになった。このほかにも、竹島を記述する教科書が増加した理由としては、文科省の検定制度や島根県による働きかけや右翼組織・右翼政治家の圧力などがあげられる。

教科書の記述について、

竹島は「日本固有の領土」、「日本の領土」…11/28種

「島根県に属する竹島」…3種

「韓国が不法に占拠」、「韓国が占拠」…2種

} 50%の教科書が
「日本の領土」と記述。

5. 考察

5.1 日本側

国際法に乗っ取ると、第二次日韓条約・サンフランシスコ平和条約などにおいて竹島は確かに日本の領土とされているが、韓国側と共同して検証を進めてくうちに、国際社会におけるあらゆる条約や法律、取り決めはその当時のパワーポリティクスが必ず大きく影響していて、弱者はいつも搾取にあつてきたことに気付くことができた。

領土問題は例え過去のことに起因しているとはいえ、現在の政局や外交、民族感情操作の切り札としても利用されているので、その分解決が難しい。

しかし、教育は、国家や政権を握っている権力者の見解、それが時には国民の多数の見解と一致していることがありうるとしても、それを子どもたちに教える任務ではない。教育は権力者の見解についても批判できる力をもつ主権者を育てることが基本的な任務である。(石川 2011) したがって、政府の見解を一方的に結論だけ押し付けるような教育は両国の市民の心の溝を深くするだけである。これからは、私たち若者が歴史を傍観することを辞め、自主的批判的精神にもとづいて自分たちの手で自分たちの歴史を客観的に見つめなおし、また自分たち自身もまた今まさに歴史を創っているのだという自覚をもつことが重要ではないかと考えた。自国の歴史を知る際に当然、他者との協働や適切な意見交換をすることが大事になってくるが、このセミナーのように二国間の若者が一緒に調査し、意見をぶつけ合える場がもっと増えていけばいいと思った。こうして草の根の交流が将来的には市民の手による東アジアの平和構築に貢献できることを期待している。

参考文献:「竹島/独島の平和的な解決をめざして」(つなん出版)

5.2 韓国側

韓国と日本は地理的には距離に近いが、心の距離は遠くてなかなかその距離を縮めるのが難しい。その理由の中で一番大きい比重を占めるのが歴史だが、加害者と被害者の関係というお互いに敏感な事に対して加害者である日本側が、先にこのテーマを提案してきてすごく驚いた。歴史教育の問題を認識し、それを解決しようとする両国側の趣旨は良かったが、やはりお互いが受けてきた教育によって思考に違いがあり、問題へのアプローチの仕方や問題を見つめる視点の差があった。これは私達が解決しようとする問題を直接感じるきっかけになったと同時に、教育の影響力と正しい教育の重要性を感じることができた。しかし、それとともに現実的な難しさも感じた。なぜなら、教育は政府によって行われるもので政治的な意図が教育方針に反映されるからだ。

もっと良い歴史教育の方法を考えたが、そもそも社会の認識の変化や政府の協力が必要な部分が多かった。しかしこれは現実的に難しい事なので、理想的なことだけでなく我々の立場で現実的にできることを考えるべきであると感じた。また、私達から真実を明らかにする努力や周りの人たちにそれを教える、知らせようとする方法など、皆が思うだけで行動に移さない態度を変える方法を考えるべきであるとも感じた。今はこうしたことが、歴史教育を変えるには影響力が少ないと思うかもしれないが、こういう小さい事から変えていって問題の改善の基盤を作らないとこの問題は解決せずに韓日関係をもっと悪化させると思う。

韓国側は被害者だから真実を明らかにしようとする気持ちが強くて基本的に皆が歴史に興味があり、いろんな歴史的な知識を持っていたが、日本側は歴史より教育にポイントを置きたい人が多くて最初からちょっと意見の違いがあった。歴史に関して話した時に、日本側のメンバーだけではなく日本の若者たちは日本が犯した悪いことに対してあまり認識していないところと、現在の両国のもめごとに関心なところは韓国側とは対照的で驚いた。いくらか敏感な国際的な問題を話合ったが歴史的事実に関して様々な違いがあって独島・竹島問題は簡単に解決できる問題ではないと思った。しかし、このセミナー期間中、政府や特定のメディアの意見ではなく一般の人の意見を聞くことができたし、素直な意見交換ができていい機会を得ることができたことは確かだ。お互いの異なる意見とか考えを合わせるのは難しく大変だったが、国境を越える交流ができて本当に貴重な経験だった。

<参考文献>

- 石井進他 11 名 (2007) 『日本史 B』、山川出版社
俵義文 (2008) 『最良の『教科書』を求めて』、つなん出版
君島和彦 (1996) 『教科書の思想—日本と韓国の近代史—』、すずさわ書店
佐藤次高他 (2007) 『世界史 B』、山川出版
君島和彦 (1998) 『世界史の教科書』、扶桑社
俵義文 (2010) 『竹島/独島の平和的な解決をめざして』、子どもと教科書全国ネット 21、つなん出版
キムハンゴン他 5 名 (2003) 『韓国近現代史』、金星出版社
ハンチョルホ他 5 名 (2009) 『韓国 近現代史』、大韓教科書
国史編纂委員会 (2008) 『国史』 国政図書籍編纂委員会 教育人的資源部

「慰安婦」問題の解決に向けて

～日韓両立場から考える～

お茶の水女子大学 石川しほみ 遠藤美里 鈴木羊子 高橋梨紗 溝部久江 三谷菜穂美
同徳女子大学校 イ・ソヨン イ・イェジュ イム・イスル ト・スジン
チェ・イェジ キム・ジンア

1. 研究の動機と目的

1.1 日本側

これまで私たちは「慰安婦」問題について、ほとんど何も知らなかった。しかし、同じ女性として無視できない問題であると感じたのと同時に、詳しく知りたいと思った。大変難しく、重いテーマだと思うが、韓国の学生との話し合いの中で、より双方が納得できるような解決策を模索したいと思う。

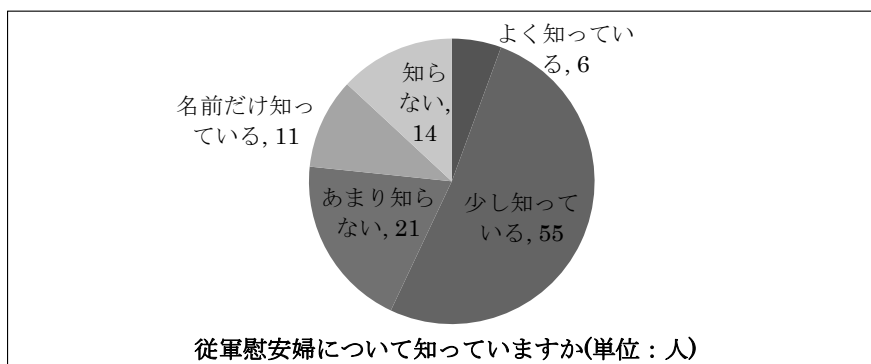
1.2 韓国側

「慰安婦」問題を知るきっかけとなったのは、イ・スンヨン（女優）が「慰安婦」をコンセプトとしたヌード写真のモデルとなり、韓国で話題になったことや、高校の授業で慰安婦問題について学んだこと等である。また、これまでは知識も乏しく、「慰安婦」の話題は反日感情を生み出すだけであった。しかし、その度に関心があるような振りをしている自分たちは、偽善者なのではないかという思いもあった。そこで、このセミナーを通じて、両国の子孫として私たちができる解決策を日本の学生たちと考えたいと思う。

2. 日韓の「慰安婦」に関する意識調査

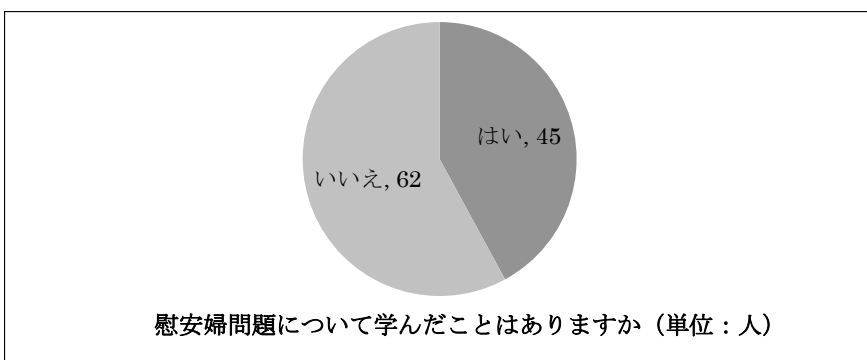
2.1 日本側

今回 2012 年 6 月 17 日～2012 年 7 月 18 日の期間で、男性 29 人女性 78 人のべ 107 人を対象とした、「慰安婦」問題に関する意識調査(アンケート)を行った。

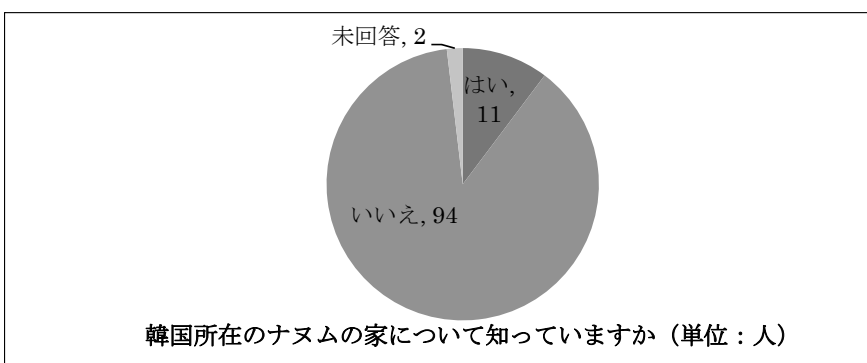


よく知っている	6 (6%)
少し知っている	55 (51%)
あまり知らない	21 (20%)
名前だけ知っている	11 (10%)

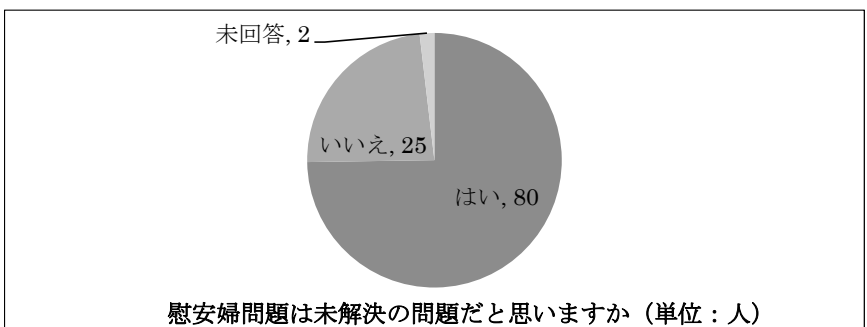
知らない	14 (13%)
------	----------



はい	45 (42%)
いいえ	62 (58%)



はい	11 (10%)
いいえ	94 (88%)
未回答	2 (2%)



はい	80 (75%)
いいえ	25 (23%)

未回答	2 (2%)
-----	--------

日本側の結果としては、「慰安婦」や「慰安婦」問題について知っているという人、学んだことがある人は少ないものの、未解決の問題であると意識している人が多いということが窺える。

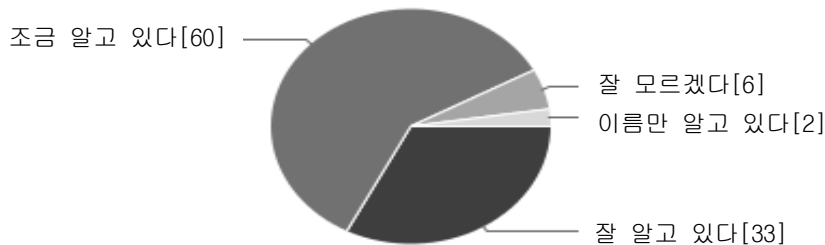
少数派ではあるものの、「慰安婦」問題が解決したと考える人の意見としては…

- ・日韓基本条約で解決済み (20 代男性)
 - ・戦争中のことをいまさら言うのは意味がない (20 代男性)
 - ・韓国は日本を批判する道具として慰安婦問題を引き出しているのでは？ (20 代男性)
- というものがある。

2.2 韓国側

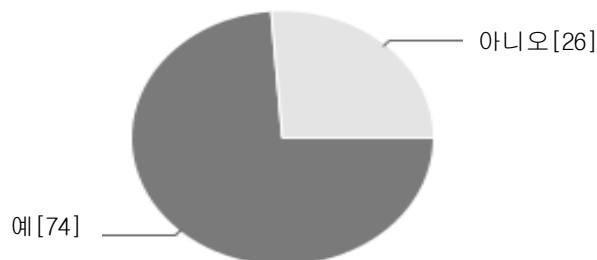
今回 2012 年 6 月 24 日～2012 年 7 月 18 日の期間で、男性 53 人女性 74 人のべ 127 人を対象とした、「慰安婦」問題に関する意識調査(アンケート)を行った(質問内容は日本側と同じである)。

『従軍慰安婦について知っていますか(単位：人)』



잘 알고 있다	(よく知っている)	33%
조금 알고 있다	(少し知っている)	60%
잘 모르겠다	(よく知らない)	6%
이름만 알고 있다	(名前だけ知っている)	2%

『慰安婦問題について学んだことはありますか(単位：人)』



예	(はい)	74%
아니오	(いいえ)	26%

『東京所在の「女たちの戦争と平和資料館」について知っていますか(単位：人)』



알고 있다 (知っている)	4%
모른다 (知らない)	96%

『慰安婦問題は未解決の問題だと思いますか(単位：人)』



예 (はい)	96%
아니오 (いいえ)	4%

韓国側の結果としては、日本側よりも「慰安婦」や「慰安婦」問題を知っている人が多い。また学んだことがある人というのも日本側では半数を超えなかったが、韓国側は半数以上が学んだことがあると答えている。両国共通としていえるのが、「慰安婦」問題を未解決の問題だと思っている人が過半数を超えているということである。

アンケートで出てきた意見としては...

- 일본군 성노예로 불러야 한다고 생각합니다.
(日本軍性奴隷と呼ぶべきだと考えています。)
 - 저도 그렇지만 젊은 사람들은 위안부 문제가 있음을 알지만 자세히는 알지 못합니다. 좀 더 관심을 갖고 도움을 줄 수 있는 계기가 있었으면 좋겠습니다.
(私もそうだが、若者たちは慰安婦問題が存在すること自体は知っているが、詳しくは知りません。もっと関心を持って手伝える契機が出来たらいいと思います。)
 - 우리나라 정부측에서 좀 더 적극적인 자세로 대응해야 할 필요가 있다고 생각합니다
(韓国の政府側からのもっと積極的な対応が必要だと思います。)
- というものがある。

3. 「慰安婦」について

3.1 「慰安婦」問題の事実

「慰安婦」の存在の事実は公文書の発見や、世界に残っている日本軍の慰安所から明らかであり、また元兵士も「初めは絶対行くまいと思っていた。しかし、どうせ死ぬなら、人並みに女遊びもして死のう。という気持ちから慰安所に行くようになった」(「沈黙と証言」よ

り)と慰安所の存在を証言している。

3.2 名称

慰安婦は主に「挺身隊」「日本軍「慰安婦」「従軍「慰安婦」の三つの名称で知られている。「挺身隊」は戦時中、男性労働力が不足のために構成された勤労奉仕団体のことであり、男性の性の相手をした慰安婦とは根本的に違うものである。「日本軍「慰安婦」と「従軍「慰安婦」 という呼び名が世間には浸透しているようだが、そもそも「慰安婦」という呼び名が正しいのか、という問題がある。「慰安」とは心を安らかにするという意味であるが、慰安婦であった女性たちに「慰安」という意識があったのであろうか。こういった問題から、「慰安婦」と書かれるときには「 」 (かぎかっこ) がつけられ、また今日では「性奴隷 sexual slavery」という言葉が使われることも少なくない。

3.3 「慰安婦」が存在した過程

戦時中、兵士たちはいつ死ぬかわからないという状況におり、不平不満も溜まっていた。彼らはそのストレスを発散させるために現地の女性・子供に性暴力をふるうようになっていった。無差別に行われる性暴力は軍隊に性病を広める結果となり、それは大事な戦力の低下を意味することとなった。もちろんそれは、問題視され、政府は兵士の性行為を管理して、性病の防止を図ったのである。その性病防止策が、慰安所の設置であった。慰安所に連れてこられる女性は主に性病をもっていないとされる初潮前の女性であった。

3.4 慰安所について

慰安所は、民家などの比較的大きな建物が利用されていた。また、慰安所という名前ではなく軍人倶楽部など、他にも様々な名前で存在していた。屋根と電気がある慰安所は待遇が良い方で、ジャングルの中で大きな葉をシートにしたような、慰安所(と言えるのか否か)もあったのである。慰安所の各部屋には下半身を消毒するための桶があったが、その桶の中身は消毒液の原液であった。性暴力を受け、動けなくなっている女性たちに、慰安所の主人がその消毒液の原液を下半身にそのままかけることもあったようだ。また当時、彼女たちには、韓国名・日本名の他に慰安婦名が与えられており、名札が壁にかけられていた。



写真 1: 再現された慰安所の部屋



写真 2: 名札がかけられた壁

3.5 元兵士の証言

元兵士の中には「日曜外出できるとき、70～80 人が並んで班長からコンドーム(サック)を 2, 3 つ渡されて慰安所に走った」「1 人のところに 10～15 人の兵士が並び、『早くやれ！ 早くしろ！』とせかす。仰向けになって半病人のように動けもしない韓国女性には、休む暇もなく屈辱を受け、気の毒でした」(「沈黙と証言」より)と証言するものもいた。これらのことから、被害女性が 1 日に何人もの相手をしたことと、女性への配慮が無かったことがうかがえる。



写真 3: 当時使われたサック(コンドーム)



写真 4: 慰安所で列を作る兵士たち

3.6 戦争が終わったあと

戦争が終わってすぐは事実を隠すために、様々な方法で証拠隠滅を図った。「慰安婦」を銃殺、野放しにしたり、慰安所ごと爆破することもあった。また置き去りにされた「慰安婦」は何年も各地をさまよった。家族に死亡届を出されていた女性や、「慰安婦」だったということがわかってしまい縁を切られてしまった女性もいた。このようなこともあるので、今でも自分が「慰安婦」であったということを打ち明けることのできない女性たちもいる。ゆえに、正確な「慰安婦」の人数はわからないままである。また、当時のひどい扱いにより現在病気で苦しんでいる女性たちもいる。当時から現在にかけて、今でも彼女たちの苦しみはずっと続いているのである。

4. 「慰安婦」がなぜ問題になっているのか

では、なぜ「慰安婦」が問題になっているのだろうか。

一つ目に、女性達を集める方法が、基本的に詐欺・誘拐・拉致など、強制的なものであったことが挙げられる。例えば、戦争中、貧しく家族を養わなければいけない少女達に「工場で働き手を募集している」という噂を流し、慰安所につれて来られるケースもあったという。慰安所に集められた後も、動員された女性達への処遇は非人道的なものであった。少女達に軍票支給はなく、不潔なところで一日に何十人もの兵士の相手をさせられるため、性病にかかることが多かったが、十分な治療をされることはなかった。治療をしたとしても、早く「慰安婦」として働かせるための極端な治療であった。例えば、淋病になると、606 という殺虫剤の原液を治療された。また、梅毒になると、下着に水銀を塗って対処した。このお陰で、ナヌムの家に住んでいらっしゃるハルモニ達はほとんど、下半身水銀中毒症にかかっている。今でも、ガンや髪が抜ける、歩けなくなるなどの後遺症に悩まされているという。

さらに、幼い少女を主に動員していたというのも問題となっている。これは、純潔な少女が性病にかかっている可能性は低い、と判断したためである。また、兵士が性病にかかってしまうと、兵力が落ちてしまうため、慰安所ではサック(コンドーム)をつけなければ性行為をしてはいけなかった。

また、慰安所での性暴力だけでなく、命を脅かす暴力(刀で斬りつける)をする兵士もいた。

5. 「慰安婦」問題が解決できない理由

ハルモニ達は水曜集会で7つの要求を訴えている。それが以下の7つである。

- (1) 日本政府は日本軍慰安婦の事実を認めよ
- (2) これに対して公式謝罪せよ
- (3) 蛮行の全貌を明らかにせよ
- (4) 犠牲者達の為に慰霊碑を建てよ
- (5) 生存者や遺族に対して賠償せよ

- (6)このような過去が繰り返されないために、歴史教育の現場でのこの事実を教え続けよ
(7)責任者を処罰せよ

これに対する日本側の対応を見てみよう。まず 1991 年に防衛庁図書館から公文書が発見されたことを受けて 1993 年に河野官房長官が談話の中で慰安婦の存在を一部認める発言をした。1995 年には「女性のためのアジア平和国民基金」（民間基金）を設立したが、2006 年、安倍首相（当時）が慰安婦問題における国家・軍隊の関与を否定した。

また(6)にまつわる教科書の記述であるが、1997 年の時点では東京書籍、大阪書籍、帝国書院のそれぞれで「慰安婦」「従軍慰安婦」「強制連行」「耐えがたい苦しみ」といった記述があったが、2002 年の時点では、帝国書院に「慰安施設に送られた女性」にまつわる補償問題の記述を除くすべての記述が削除され、またそれ以降の改訂は行われていない。

まず最近の独島／竹島問題を受けて持ちあがった政治家の発言を見ても、日本は国家として慰安婦問題を認めようという姿勢はないようである。それは「証拠が残っていないから事実を確認できない」という発言からも窺える。また、「民間基金を設立しているにも関わらず、なぜまだ賠償問題を取り上げるのか」といった考えの政治家もいるだろう。だが実際にはハルモニ達は「民間」基金であるため、多くの被害者が受け取りを拒否している。

6. 解決にむけて

6.1 活動紹介

① 韓国：ナヌムの家

ナヌムの家とは「分かち合い」の家という意味で、自然溢れる環境のなかでハルモニたちが静かに共同生活を送っている。歴史館が併設されており、「慰安婦」問題に関する説明や資料、ハルモニたちの訴えが展示されている。また、下のようなハルモニたちが描いた絵も展示されている。このように多くの人々に「慰安婦」問題について知ってもらう活動を行っている。



写真 5:ハルモニが描いた絵



写真 6:ハルモニが描いた絵

② 日本：アクティブ・ミュージアム 女たちの戦争と平和資料館

西早稲田にあるこのミュージアムは日本で初めて戦時性暴力を取り扱った資料館である。パネル展示の他、イベントの開催や調査などを行うことで、多くの人々が戦時性暴力に向き合い、これからの社会をどう構築していくか考える手掛かりになるような活動をしている。完全に民間の手で運営されていることも特徴である。



写真 7: 女たちの戦争と平和資料館

6.2 ナヌムの家を訪れたそれぞれの思い



写真 8: ハルモニたちとチンダルレチーム (ナヌムの家)

7月26日、韓国での野外実習の日に私たちは、1日かけて京畿道廣州市にあるナヌムの家を訪問した。(ナヌムの家とは元日本軍「慰安婦」であるハルモニたちが共同生活をし、余生を静かに過ごしている民間施設のことである) 私たちはそこで歴史資料館の見学をし、実際にハルモニに会い言葉を交わした。以下は私たちが、ナヌムの家を訪れ感じ思ったこと、そしてセミナーを通じて感じたことである。

①石川しほみ

今回、野外実習でナヌムの家を訪問して、資料館を見学して、ハルモニと実際に会って話をするというとても貴重な体験をした。資料館では慰安婦の実態を学んだが、それは自分の想像以上に残酷なものであった。ハルモニが日本を恨んでもおかしくない、そう感じたすぐ後に、ハルモニとお話をする機会をいただいた。正直不安がとても大きかった。「日本人嫌がられないかな、嫌悪の目で見られたりしないのかな」「どんな風に接していけばいいのだろう」そんな考えが私の頭の中をぐるぐるまわっていた。しかしそんな不安はハルモニに会ってすぐに消えてしまったのである。私たちが何を話していいかわからないでいると、ハルモニから話しかけてくれたのだ。今回お話したハルモニは日本語が達者で、会話もすべて日本語であった。慰安婦であったときのお話を聞くことはできなかったが、日本の歌と一緒に歌ったり、とても和やかな時間であった。また、彼女は日本各地を転々としていたため、私たちの出身地をきくと懐かしそうに思い出している姿が印象的であった。こうして普通に話していると、陽気なおばあさんと思えなくて、ハルモニたちが今の私たちと同じ歳くらいのとき死にたくなる思いをしてきたこと忘れてしまいがちであった。日本(人)を憎んでも

おかしくない立場にいる人たちが、日本(人)を受け入れてくれて、懐かしく思ってくれている、それが嬉しかった。直接関係ないとしても、許された気がした。ハルモニたちの思いを汲んで、慰安婦問題が円満解決し、日韓の関係がよくなることを強く願った瞬間であった。

②遠藤美里

初めに見学させて頂いた資料館では、衝撃的な展示内容の数々に驚かされた。私は何度も、当時の生々しい記録や証言から目をそらしたくなった。このような内容の資料館は、「慰安婦」問題に対して大勢の人が無関心、あるいは懐疑的な今の日本に作ることは難しいと感じるので、大変貴重な体験をさせて頂いたと思う。しかしまた一方で、資料館を案内して下さった係の女性の方が日本人であったことは驚きであった。学生で学ぶ機会を与えられた私たち以外にも、この問題と向き合っている日本人がいるという事実は、大変心強く感じられた。

ハルモニと会う頃には、私はとても緊張していた。先ほどの資料館で、日本人がいかにしてハルモニ達の青春を奪ったかを目の当たりにし、加害者側としての罪悪感が強くなっていたため、余計にハルモニにどう接していいのかわからなくなっていた。しかし、ハルモニたちは日本人も韓国人も関係なく、同じようにあたたかく迎え入れてくれたので安心した。こんなに穏やかなハルモニ達が、今も歴史と政府と戦っているのかと思うと違和感を覚えるほどである。限られた時間を、恨みや憎しみの時間にせず、ハルモニたち自身の心の安らぎと平和のために過ごそうとしているように私には感じられた。そして生き証人が少なくなってしまう今、「慰安婦」問題を日本は考え直さなければいけない時期にきているのだと、強く実感した。

③鈴木羊子

ナナムの家では資料館で「慰安婦」問題について説明をしていただき、その後ハルモニたちにお会いすることができた。お会いするとき、私はとても緊張した。青春時代に日本、日本人から惨い仕打ちを受け、肉体的にも精神的にも深く大きな傷を負ったハルモニたちが私たち日本人を恨んでいない訳がない。どういう反応をされるか、とても不安だった。しかし、実際にハルモニたちにお会いすると彼女たちは大変穏やかな雰囲気私たちを迎えてくれた。日本に長く住んでいらしたハルモニはとても流暢な日本語で楽しいお話をしてくださったり、日本の歌を詠ってくれたりした。もう一人のハルモニもゆったりとリラックスした様子でお話をしていた。その様子に私はとても困惑した。この方たちは日本、日本人が憎らしくないのか、私たちはおぞましいものではないのか、と。

「慰安婦」問題はいまだ日本ではなかなか取り扱われず、多くの日本人が正しく理解していない。しかし、解決のためにはまず日本人がこの問題を知り、考えを巡らすこと必要である。私たち日本人がセミナーを機会としてこの問題について考え、実際にナナムの家を訪れたことは大きな意味があったと考える。

私個人にとってもナナムの家訪問は大変貴重な経験であった。実際にハルモニたちにお会いして、ハルモニたちが高齢になり亡くなっている方も多い今、「慰安婦」問題解決に向けて何をすべきなのかという観点で考えるきっかけを与えてくれた。ハルモニたちがこれからの人生を心穏やかに過ごすことを願っている。

④高橋梨紗

私は韓国に行く前は、慰安婦問題に興味はあったものの、戦争下でおこったことをなぜ今でも引きずっているのか、昔のことだと考えてしまっていた。しかし、ナナムの家に行って、資料を見たり、ハルモニ達のお話を聞いたりして、その考えはとても恥ずかしいものであったのだと実感した。

中でも一番衝撃的であったのは、慰安婦の方が性暴力を受けていた部屋(の再現)に入ったことである。暗く、狭い部屋であった。その部屋の中で、少女達が受けた性暴力の話、消毒液の原液を下半身にかけられたこと、など今まで自分が知らなかった話を聞いた。「もし

自分がそんなことをされたら…」と思うと気持ちが悪くなった。慰安婦が受けた暴力を、完全に想像することは出来ない。しかし、同じ女性として、慰安婦が受けた暴力の悲惨さを感じて、その悲惨さを伝えていかなければならないのではないだろうか。

資料館を見た後に、ハルモニ達のお話を聞いた。彼女達は、「日本を恨んではいない」と言っていた。私は、自分が直接ハルモニ達に危害を加えたわけではないけれど、日本人として罪悪感があったので、ほっとした。そして、ハルモニ達の心の大きさに感謝した。憎しみの連鎖をこれ以上続けないためにも、慰安婦問題は解決されるべき問題なのではないだろうか。

⑤溝部久江

帰国後、独島／竹島問題の影響もあり、慰安婦問題が日本のメディアでも取り上げられていた。それを見て私が感じたのは、日本の政治家達は、慰安婦や被害者の立場に寄り添おう、理解し合おうという立場を全く持っていないのではないかということだ。政治的な立場上、協調体制を取ることができないのかもしれない。自分勝手に慰安婦問題について無知であるかのような発言（「慰安婦がいたという証拠などない」や、「日本軍は関わっていなかった」などといった発言など）をする政治家達も、真に無知であるのか、政治的立場上の発言なのか、どちらかも私には分からなかった。少なくとも、多くの慰安婦問題について学ぶ機会を持たない日本国民は、そのような政治家達の意見を鵜呑みにし、真実だと捉えてしまうと思う。それはとても恐ろしいことだ。

韓国・日本という二項対立が生まれ、お互いのグループが、自分が所属するグループが全面的に正しいと捉えているようでは、解決される問題も決して解決されることはないだろう。幸いにも、私たちはこの韓日実習によって双方の立場からの視点でこの慰安婦問題を学ぶことができた。実際に被害を受けたハルモニの言葉を聞き、聞いた上で自分は感じるか、考えるかをまとめることができた。これが最大の収穫であるように思う。メディアの情報に左右されず、遠くの世界にいる誰かの立場に心だけでも寄り添ってみる。理解できないと感じるのなら、その問題の背景を、向こうの立場にたって考えてみる。そういった柔軟な心を持つ事が私たち若者には必要なのではないだろうか。

⑥三谷菜穂美

「慰安婦」問題について調べ、その事実を知れば知るほど、「日本人」である私が責められている気持ちになった。そしてその後ろめたい気持ちになるのを避け、「慰安婦」問題に素直に目を向けることができなかった。実習でナヌムの家へ行くことが決まったときも、日本人である私を見てハルモニたちはどんな気持ちを抱くのだろうと、不安でいっぱいだった。

しかし、ハルモニたちは私たち日本人を本当に温かく迎えてくれた。歌をうたったり、勉強の話をしたり、おばあさんと気軽に世間話をしているような楽しい時間を過ごした。私たちの訪問を心から喜んでくれたハルモニたちの笑顔を見て、私は救われた気持ちになった。また、ナヌムの家でボランティアとして活動されている日本人の方々にもお会いすることができ、同じ日本人が真っ向から「慰安婦」問題と向き合っている姿を見て勇気付けられた。

「慰安婦」問題を韓国・日本の問題、責める・責められるという捉え方で考えるのではなく、「慰安婦」問題に関心を持ち続けることこそ、私たちができる唯一で最大のことである。

今回、「慰安婦」問題について学んできたが、この問題に触れるたびにさまざまな感情を持った。同じ日本人がおこした過ちに対する恥じらい、ハルモニと直接会いお話をできたことで得た心の安らぎ、同じ女性として「慰安婦」が受けた屈辱に対する憤り…一つの研究を通じて得たたくさんのこの思いを、「慰安婦」問題を学んだ私たちが責任を持って伝えていかなければならない。

⑦イ・ソヨン

「ナヌムの家」はソウルからかなり離れているところである。「ナヌムの家」までの移動

する時間が長かったが、みんな疲れた気配もなく、頑張ってくれた。大変な一日になることをわかって「ナナムの家」を実習先に決めたのは、この問題を解決するために私たちができる‘何か’の一つ目だと考えたからである。これはたぶんみんなが一緒だったと思う。

慰安婦問題を知らない韓国人はいない。そしてこの問題について詳しく知っている人も、深い関心を持っている人もほとんどいない。だから私はこの問題をたくさんの若者たちに知らせたい。こういう自分から深く探ってみようとする考えも訪問の動機の一つであった。

ナナムの家にある歴史館には「慰安婦」に関するいろんな資料とハルモニたちの生涯が紹介されている。私が 歴史館でいちばん衝撃的だったのは再現された慰安所である。文書で伝わったこととはまったく違う気持ちであった。その慰安所に入った時、最初にしたのは悲しみであった。自由を奪われ、狭い部屋に閉じ込められる。毎日ベッドで性暴力を受けるのが日常。家族も故郷も懐かしいけど、いつ帰れるかわからない。誰かに向かったの憎しみや怒りは忘れるほどの絶望感であった

歴史館の観覧が終わってから私たちはハルモニにも会うことができた。韓国側のメンバーと話し合ってくださったパク・オクソン(朴玉善)ハルモニの話は今でも忘れられない。

ハルモニたちは、日本が嫌いなわけではないとおっしゃっていた。「ナナムの家」で暮らしている他のハルモニもみんな同じ考えも持っているそうだ。それはこういう理由からである。ハルモニたちには時間があまり残っていない。だからこの大切な時間を憎しみや苦しみで過ごしたくはないということであった。そして、「日本が韓国と完全に別の国だとは思っていない。日本も同じ立場でこの問題を考えてほしい。そうすれば、ハルモニたちの謝罪をもとめる気持ちもわかる。」という話であった。ハルモニは話の中で、戦争の当時日本軍が犯したことについては必ず謝罪をもらいたいという確固たる考えをおっしゃった。ハルモニたちは証言をするたび、水曜集会に出るたび、過去の記憶が繰り返されるのであろう。今までこの問題に対して真剣に考えていなかった自分を恥ずかしく感じた。

歴史館で感じたことも、ハルモニから聞いた話も、私が女の子だから余計に共感しやすかったのだと思う。これは、慰安婦問題が女性人権に関わる問題であるから、女性だけが関心をもって、女性だけが努力し続けろという話ではない。むしろ、それは解決に向けての正しい姿勢ではない。今を生きてゆく、そして未来を生きてゆく世代の私たちが、解決の使命を背負わなければならないと思った。

⑧イ・イエジュ

4月から準備して来たセミナーで私たちチンダルレチームは「慰安婦」に関する主題を選択して、野外実習地を京畿道廣州にあるナナム家で決めた。多くのアクセスを経て遂にナナム家に到着した私たちは、まず 30 分間の慰安婦に関してのビデオを見た。その後、日本軍慰安婦歴史館で詳しい説明を通じて痛い傷を持っていらっしゃる慰安婦ハルモニたちの被害状況といろいろ知らなかった歴史的事実を知った。最後には、ハルモニたちに会って話合う時間を持った。

一つも漏らすことができない、私にはすごく貴重な経験の時間であったが、やっぱり「日本軍慰安婦歴史館」の中で入った昔の「慰安所」を再現しておいた場所が一番衝撃であった。私はその中に入った瞬間も、その後しばらくしても何とも説明できないそんな気持ちであったし、解説のボランティアの人の説明がまともに耳に入ってこなかった。その中に入ったその瞬間は頭の思考のスイッチが止められたような感じであった。その中で生活しながら、性暴力をされた慰安婦ハルモニたちを思うと、心の奥から言いようのないほどの怒りがこみ上げた。なぜ、どうしてそんな無惨で一生を苦痛の中で生きていかなければならない、傷になるそんなことをされなければならなかったのか、再び原点に戻って考えていた。考えることだけで終わってはいけなないと知ったが、相変らず慰安婦に関する記事が出ると、日本政府はどうして謝らない、その態度でそのままなのか、同じく韓国の政府はどんな努力をしているのか、各国を恨んでばかりいる未熟な考えだけをしているようなので私は反省した。

私たちにはまだ大きい力はないが、各国の意識ある大学生だと思う。セミナーを通じて

「慰安婦」問題について一緒に話し合ったさまざまなお互いの考えの中から微弱ながら日本と韓国の両国が交流をしたことそのものに意義があると思う。私たちがナヌムの家で一緒にいた時間がお互いの記憶の中で忘れないほど意味ある時間になったことを願う。

⑨ イム・イスル

ナヌムの家を訪問する前、私は慰安婦についてよく分からなかった。慰安婦が何なのかは知っていたが、それがなぜ問題で重要な話題になっているのかは詳しく分からなかった。ナヌムの家を事前調査で行ったとき、特別な出会いがあった。日本からナヌムの家を訪問してくださった方たちと出合って話し合う機会ができたのだ。その方たちは私に「あなたはここに何回ぐらい訪問しましたか。」と聞いてきた。その質問に「はじめてです。」と答える自分が本当に恥ずかしかった。その方たちにここを訪問した理由を聞くと、「沖縄のある教会で慰安婦の被害者であったハルモニが講演をした。それをきいて何も知らなかった自分が偽善者ではないかと感じた。で、ナヌムの家を訪問したかった。」と答えてくれた。その話を聞いて私も同じじゃないか、だいたい韓国の国民も同じじゃないかと思った。この問題を詳しく分かっていないのにただ悪口ばかりいうのは間違っている。本当にこの問題を解決したいと思っているのならもっと関心を持つべきだ。当事者でなくても、こんな歴史を持っている国家で住んでいる国民である以上、そして同じ女性としてこの問題を大切に扱ってほしい。

お茶の水女子大学のみんなとナヌムの家を訪れたときにハルモニに会う機会ができた。実際に会ったハルモニは本当にそんなつらい過去があった方なのかと驚くほど明るい顔で私たちを喜んで迎えてくれた。ハルモニは普通のおばあさんみたいであった。そんなハルモニたちに昔のことは聞けなかった。聞くと失礼だと思ったし、聞きたい気持ちもなかった。ただ私を感じたのは、彼女たちは本当に私たちのおばあさんみたいで、今のハルモニの笑顔を守ってあげたいということだけであった。

ハルモニたちに会う前にそのボランティアの方が「ハルモニたちはナヌムの家にきてから安定した生活を過ごしている。水曜集会には毎度参加していらっしゃるが、余生を楽しく過ごすのが彼女たちの最後の望みだ」と言った。彼女の言う通りにハルモニがもう心配しないで楽しく過ごせるよう、水曜集会ももうこれ以上ハルモニたちだけのものではなく、私たちのものになるように、皆の問題になるように努力すべきではないかと思った。

⑩ ト・スジン

今回の韓日交流セミナーで私たちのグループのテーマが「慰安婦」であったので「ナヌムの家」の訪問を推進した。実はセミナーをする前までは慰安婦に対する知識が教科書で学んだのが全部であったし、ナヌムの家がどこにあるかも知らなかった。調査して見るとナヌムの家への行きかたがバスとタクシーに乗らなければならない京畿道(キョンギド)廣州(クワンジュ)市というかなり遠い所に所在していたが、最近、また慰安婦問題が話題になっているし、本や資料を調査することも必要だが直接ハルモニたちと話し合う時間がほしかったので下見したあと、いよいよ 7 月 26 日、ナヌムの家に訪問することができた。

ナヌムの家を初めに見た感想は、思ったよりものすごくきれいで広い建物であることに驚いた。見回しながら立派な施設やよく整理された写真と資料たちにも驚いた。

実際、私たちがどんな関心を持っていなかったその時にもハルモニたちは韓国のどこかで悲しい歴史の証人として、正しい歴史を知らせるために自分たちができる最善の努力をつくっていらっしゃったのだ。だからビデオを見て、歴史館を観覧して、ハルモニたちの話を聞きながら同じ女性として慰安婦問題に対してどんな関心もなく、関心を持ちたくなかった自分自身を深く反省して見るようになった。

これからハルモニたちに対する社会的関心がもう少し高くなってほしいし、私もまだできる仕事が多くはないが新聞記事の翻訳とか掃除など大学生としてできる小さなボランティアでも熱心にしながら慰安婦ハルモニたちをお手伝いしたいという考えをするようになった。

た。

終わりに、一緒にナヌムの家に訪問した日本-韓国の友達と情熱的な説明で多大な力添えをいただいた日本人のボランティアの方に感謝の心を伝えたい。

⑪チェ・イエジ

セミナーが始まって3ヶ月間慰安婦に対する本と論文、新聞などを見ながら勉強して、7月26日ナヌムの家を訪問した。ナヌムの家入ると壁にかかっている額縁が目立った。ハルモニたちの写真とハルモニたちが暮らしてきた生涯に対する説明だった。一人一人の説明を読むと涙がでた。それから慰安婦に関する説明、ハルモニたちの証言、当時の状況、そして今行っている活動などを紹介するビデオを視聴したが、ハルモニたちが証言をなさる度にまたずっと涙が流れ出した。[慰安婦]に対して勉強をする時には想像していなかった大きい苦痛と悲しみが伝わってきたし、また今になって関心を持つようになったことが申し訳なかったからだ。ビデオを見た後、慰安婦歴史博物館で詳しい説明を聞いたが、一番衝撃を受けたことは再現した慰安所だった。一目に見ても良くない環境だったが慰安所の中で一番いい慰安所と担当者が説明してくださった。こんな所で常に多くの軍人たちの前で性暴力を受けて、毎朝壁をたたいて友達の安否を確認する少女の姿が想像されてあまり心が痛かった。私が少女と同じ性別で同じ年なのでもっと悲しかったのかもしれない。博物館を出て、ナヌムの家に住んでいらっしゃるハルモニたちに会うことができた。この時ハルモニがおっしゃった一言がまだ記憶に残る。[日本人を憎むな。すべての人はまったく同じだから。誰かを下に見始めればまた同じ事が起こって解決されない。] 私がハルモニだったら絶対考えられなかった考え。ハルモニのお話を心に深く刻んで、二度とこのような無惨な事が起こらないようにするために、この問題を解決するための努力をしなくてはならないと、強く思った。

⑫キム・ジンア

慰安婦問題についてはこのセミナーに参加する前からずっとニュースとかで聞いていた。しかし、知っていたのはただ今も解決されていないということだけで、正確にどんな部分が問題でどこから直せばいいか全然分からなかったのである。だから私はこのテーマを選んで、私の認識に違っている部分はないか、他の人々はどうか受けとめているのか知りたかった。

調査の前に意識調査を行い、人々がどのくらい関心を持っているのか調べてみた。どのくらいみんな分かっているのだろう、と思ったら 関心は持っていない人も正しい名称さえ知らない人が多かった。授業で初めて知ったのに内容が足りなかったと答えた人も多かった。私も授業で慰安婦問題を聞いたことはあるが、詳しく聞いたことはない。これを見て、教科書の内容にもっと加えて欲しいと思った。

ナヌムの家に着いて最初に見たのはハルモニたちの紹介が書いてある額縁であった。その中でなくなってしまったハルモニの額縁もあった。そこにかかっていた黒いリボンを見て「今を生きる私たちは何もして差し上げなかった…」と複雑な気持ちになった。歴史館に入って慰安所の現場を見ると目眩がした。一つの洗面台と一台のベッド。そして、外から監視するための窓。部屋と呼ぶのがおかしいほどそこは狭い場所であった。そこで私達を案内して下さったボランティアの人によると、そこでは言葉を交わすことさえ禁止されて、壁を叩くことで生死を確認したという。ここがどこかさえないまま過ごした苦しい生活の中、力になった仲間さえなくしてしまったハルモニたちの気持ちを考えると涙が込み上げた。しかし、もっと衝撃だったのは民間人の家を奪って慰安所として使ったということと、女性の調子を成績のように等級を付けたということであった。戦争はどうしてこんなに人を狂わせるのだろう。慰安所になる男性の中には、ハルモニたちが家族のように感じられて、ただ話すだけで時間を過ごした人もいたという。彼も彼女もきっと誰かの大切な家族だったはずである。次の場所へ移動しながら、二度とこんな事態があってはいけないと、再び感じた。

歴史館から出て、ハルモニたちに会える機会があって私たちはハルモニから話を聞いた。

マスコミだけで見てきたハルモニたちは、直接話し合うと私の祖母と話しているようで懐かしい気持ちになった。ハルモニは私達に「憎むだけでは問題が解決されない」と何度もおっしゃった。そして、日本は憎いけど、もう一つの国のようだとおっしゃった。その時、「罪を憎んで人を憎まず」という言葉が浮かんで自分を省みた。私は今まで罪を認めない人たちを憎んでいるのではないか。だから、ハルモニのお言葉をいただいて、これからは誰かを憎むより、まず私から真実を分かってからそれを広く知らせなければならないと思った。



写真 9:説明を聞くチンダルチーム
(ナムムの家)



写真 10:ハルモニたちとの談笑
(ナムムの家)

6.3 日本側の考察

なぜ日韓の「慰安婦」問題は解決されないのだろうか。その要因は複数考えられる。

まず、「慰安婦」問題に対する日韓の認識の違いが挙げられる。例えば水曜集会は毎週行われているにも関わらず、その様子が日本で報道されることは全くない。水曜集会が毎週行われている事実さえ知らない人が大多数である。また、「慰安婦」問題が日本と韓国それぞれの歴史の教科書に記載されている「慰安婦」問題においてもかなりの情報量の違いがある。「慰安婦」問題に対して日本側が何の知識もないこと、それどころか「慰安婦」問題の存在さえ知らないということ、これらが解決へ向けた活動につながらない要因の一つである。

次に、「慰安婦」問題を賠償問題の観点から争っていることも、問題を長期化させている原因となっている。賠償金を目的に虚偽に「慰安婦」を主張する人がいるのではないかと考えるもあり、「慰安婦」問題の事実を認めることに対して日本政府側は慎重な態度をとっている。またハルモニのなかには、すでに亡くなられた方も大勢おられ、亡くなった方への賠償はどうするのか、といった問題もある。そのため、この「慰安婦」問題は平行線のまま解決の見通しが立っていない。

しかし、賠償を論点としているのは両国政府であり、ハルモニたちは賠償金を求めているのではない。自分たちの存在・過去の事実を、日本政府に正式に認めてもらうために闘っているのである。元日本軍兵士の方のなかにも、「慰安婦」に対する行為を認め、悔いている方々がいる。結局のところ、「慰安婦」問題を国レベルで考えてしまうこと自体、解決から遠ざかっているのだ。

そもそも、「慰安婦」問題は賠償する・しないのレベルで済まされる問題なのだろうか。賠償すればそれで解決、という簡単な問題にしてしまえば良いのだろうか。

ハルモニたちが望んでいることは、「慰安婦」を二度と存在させない、そのための解決である。戦争が行われている地域では、今もなお、何万人もの女性が「慰安婦」として不当な性暴力を受け、苦しんでいる。戦争になれば立場の弱い女性が虐げられ、暴力の対象になっているという事実は過去も現在も変わらない。日韓という国の枠組みを越え、慰安婦問題そのものの解決について考えていく必要がある。

そして、解決に向けては、やはり女性の力が不可欠である。「慰安婦」問題は女性の人權

に関わる重大な問題であり、女性の人権をないがしろにしてきた社会が「慰安婦」という存在をつくり出してしまった。私たち自身も戦争が始まればそういった立場におかれる可能性は十分にある。日本・韓国の対立構造の中で「慰安婦」問題を捉えていくだけでは、対立が深まるだけで本質的な解決には繋がっていない。韓国の「慰安婦」問題は自分たちの問題であるという認識を持ち、そしてこの韓国での「慰安婦」問題をきっかけに、世界中の「慰安婦」の問題にも目を向けていかなければならない。

実際に日本においても「慰安婦」問題を女性の問題として捉え、解決に向けて活動が行われている。事前学習のため私たちが訪れた資料館「アクティブ・ミュージアム 女たちの平和と戦争」では、「慰安婦」問題を含め、戦争下での女性への暴力の事実が残されており、資料館の名前にもなっているように、これらの問題を「女たち」の問題として捉え、世界に解決を訴えている。

今、領土問題をめぐって日本と韓国の関係はかなり悪い状態にある。メディアの報道を見ると、すべてが「国」の単位で考えられており、まるですべての日本人とすべての韓国人がお互いを嫌っているかのような錯覚に陥められる。領土問題に何の関係もない日系企業が妨害にあったり、韓国ドラマがいわれもなくバッシングにあったりといった状況を見ると、この錯覚に陥っている人がどれだけ多いか、明らかである。

しかし「日本・韓国それぞれの別の国の人」である前に、私たちは「東アジア」を構成する同じ仲間である。今回の韓日セミナーを通じて得た交流は韓国と日本という二つの別個の枠組みでの交流であったのだろうか。私たちは韓日セミナーに属する同じ仲間、として関係を築いてきたではないか。

交流の輪を広げながら国と国の壁を壊していかなければならない。「慰安婦」問題を「同じ女性の問題」として捉え、世界の女性が団結して解決を訴えることこそ、東アジアの平和につながる第一歩である。

6.4 韓国側の考察

慰安婦問題は既に行った事前調査(アンケート)でよくわかるように、韓国ではこれについて知らない人はほとんどいないと言える。そして多くの韓国人たちはこの問題が取り上げられるたび、怒りを抑えられない。その中では怒りを反日感情まで発展させる人もいる。それならその怒りの対象は誰なのか。韓国の社会でこんなに大勢の人が知っていて、社会的共感を得る問題が解決できない理由は何だろう。

韓国側では、その原因を女性の人権と結びつけてみた。もちろん慰安婦問題が未だに解決できない理由には、敏感な歴史的問題とナショナリズムなどの様々な問題が絡まっているのであろうが、韓国側は、人権に関する問題だということに焦点を当て、解決に向けての方向をもっと積極的に探してみようと考えた。

まず、「女性人権に対する意識が欠けている」という意見が出たが、その前に、慰安婦問題が女性人権に関する問題だということ自体を認識していない現実にも気がついた。これはもうこれ以上慰安婦問題が、国と国では解決できないということに気づき、女性の、民間の力でこそ解決できる問題だと認識した結果である。ただの歴史的な次元でこの問題に注目する場合、国間の対立が続けられるだけで、けっして問題は解決できない。しかし、これを女性の人権に関する問題だと認識すれば、国を超えて誰でもかかわれる問題に転換することができる。慰安婦問題を真の女性人権が侵害された問題だと考えたら、韓国と日本はもちろん、世界各国からもこの問題を焦点化して解決策を模索しようとするであろう。

しかし、現在、いつの間にか他の外交懸案に埋もれ、人権というもっと広い次元の問題に発展することは難しい状況になった。

最近、韓国の政府とマスコミでは慰安婦問題をよく取り出しているが、その内容の核に何があるのか真剣に考えてみた。まず、問題に近づく方法が以前とはすこし違うように感じた。慰安婦問題の解決について人権を強調するようになったのがそれだ。女性の人権というよりは、人権そのものの問題であると政府とマスコミは言っているが、同じ人権を取り上げてい

る点で、それだけでもいいと思った。なぜなら、それは政府も慰安婦問題を歴史の、国間の問題として捉えるのをやめて、これをもっと広い観点から見ることにしたのを意味するからである。そしてこれは問題の深刻性を感じ、なるべく早く解決するための努力の一環であるともみなすこともできる。しかし、このような政府の立場が完璧だとは言えない。まず、人権の侵害された問題だというのは事実だが、この問題を解決するために手を貸すことのできる集団は探しにくい。なぜなら、それにはもっと具体的な範囲が必要だからだ。特定した何かがあればこそ、人は結集しやすいのだ。最初からたくさんの人々が集まって問題を解決しようとするのではない。ごく一部の人々から始め、どんどん広がるものである。そのごく一部の人々が女性の人権に関心がある人々ではないだろうか。彼らが問題を解決するために、色んな分野で活動しながら、一般の人々にも世界にも知らせる。言葉だけではなく、行動も必要であろう。そして、実は政府が人権に関する発言をするずっと前から、こういう活動をしてきた人々がいる。

上に述べたように、慰安婦問題は国を超えて民間の連合が必要となった。超国家連合団体が求められている今、韓国のある市民団体がこういう活動をしている。それが挺身隊問題対策協議会という団体である。私たちも今回セミナーを準備しながらわかったことだった。挺身隊問題対策協議会は、慰安婦問題を世界に知らせる活動を主にしている。この団体は、超国家的連合体と連帯し、慰安婦問題だけではなく、朝鮮が植民地だった時行っただけの問題を解決するために頑張っているようだ。とはいえ、この団体が慰安婦問題だけに集中しているわけではない。何故なら、女性人権団体との連帯より、植民地の清算活動を主にする団体との連帯がもっと多かったからである。それで、慰安婦問題は植民地の清算と同じ次元で取り上げられたり、後回しにしたりするのが多かったようだ。これは最近のように慰安婦問題が持ち出される時の話ではない。今は「慰安婦」という言葉が韓国でも日本でもマスコミでよく見られるようになった。社会全体が注目しているテーマである「慰安婦」が、今はもっとも大事な解決事項になっていると言っても言い過ぎではない。

<参考文献>

- 高柳美知子・岩本正光編著 (2007) 「戦争と性－韓国で「慰安婦」と向き合う－」 かもがわ出版
- 落合道夫・花房俊雄編集 (2010) 「－日本軍「慰安婦」問題－韓国憲法裁判所「決定」を読む」 日本軍「慰安婦」問題解決全国行動
- アクティブ・ミュージアム女たちの戦争と平和資料館発行 (2010) 「証言と沈黙 加害に向き合う元兵士たち」
- DVD (2007) 「オレの心は負けてない－在日朝鮮人「慰安婦」宋神道のたたかい」
- 도시환 (2008) 일본군“위안부” 문제의 현황과 국제인권법적 재조명, 국제법학회논총 제 53 권 통권 제 112 호, 대한국제법학회
- 문소정 (2011) 동아시아 여성평화운동과 일본 여성의 횡단정치학, 사회와 역사 제 89 집 한국사회사학회
- 신영석 (2002) 일본군 ‘위안부’ 문제에 대한 사회적 인식, 역사와 현실 통권 45 호, 한국역사연구회
- 장미화 (2007) 일본의 아시아-태평양 전쟁기 여성동원정책에 관한 연구, 한양대학교 국제학대학원 박사
- 정진성 (2003) 전시 하 여성침해의 보편성과 역사적 특수성:일본군 위안부문제에 대한 국제사회의 인식, 한국 여성학 제 19 권 2 호, 한국여성학회
- 유경 (2003) 일본의 전후역사학에서의 近大女性史:여성운동, 가족, 국민국가 중심으로, 서강대학원 석사 학위논문
- 윤봉석 (2000) 일본의 에로스 문화, 서울:우석
- 이경덕 (1999) 성폭속으로 보는 일본문화, 가람기획
- 하야카와 노리요, 이은주 역 (2009) 동아시아의 국민국가 형성과 젠더(여성표상을

중심으로), 소명출판
히구치 기요유키, 유은경 역 (1995) 일본인의 성, 예문서원

女性意識についての日韓比較

お茶の水女子大学 齋藤芽依 小林詩織 船木円香 丸山栞 毛利文香 山本梨紗
同徳女子大学校 イム・ヨンジョン チョン・イエウオン キム・グックジン
イ・ソヒ イ・ソンヒ イ・ユンジ

1. 研究について

1.1 研究の動機

近年の世界的な経済状況の悪化に伴い、青年の失業が社会問題の1つとなっている。大学進学率が高くなる一方で、大学生の就職率は低下する一方である。私たち大学生はこうした社会情勢を不安に感じている。また「就職」が大学生活の最終目的、人生の多くを左右する状況を憂慮している。

特に私たち女子大生は職業選択において、自分のライフワークバランスやキャリア設計について、男子学生より悩む点が多い。それは結婚や出産や育児において、男性より女性が負担を抱えなければならない社会構造であるからだ。

日韓で話し合いを進める中で、これから社会に出ていく私たちが就職・キャリア設計に対して、このような不安を抱えていることがわかり、「働く女性」をテーマにすることを決めた。

1.2 研究の方法

女性の置かれた社会の実状をつかむため、文献やインターネットサイトで統計資料を集めたうえで、アンケートやインタビュー、施設訪問などを行い、調査を行った。

2. 事前学習・資料編

以下では、資料を用いて行った事前調査の結果をまとめる。資料調査では、働く女性がおかれている現在の状況を主に調べた。法律・憲法に関する側面、女性の社会進出に関する側面、結婚に関する側面、育児に関する側面、社会の意識に関する側面から調べた。

2.1 法律・憲法に関する側面

両国はそれぞれで、法律・憲法の側面から女性のライフワークバランスをどのように捉えているのだろうか。

日本と韓国はそれぞれの憲法で「女性は性別を理由に社会及び雇用において差別を受けない」という内容を明記している。そのための具体的な法律としては「女性発展基本法」（韓国）や「男女雇用機会均等法」（日本）などがある。

また、実践的な政策として韓国では「女性家族部」や「雇用労働部」を設置して女性の再就職支援から両性の平等な人事管理、産休の推進を含む家庭と仕事の両立のための職場環境の改善など様々なサービスを行なっている。

日本でも厚生労働省によってポジティブ・アクションが推進されている。女性＝家事という偏見や差別意識をなくして女性の管理職への道を広げることを目指している。同時に、近年問題視されている少子化対策として育児休暇取得に関する企業のサポートも求められており、旭化成や東芝などの大企業もこうした計画に積極的に取り組んでいる。

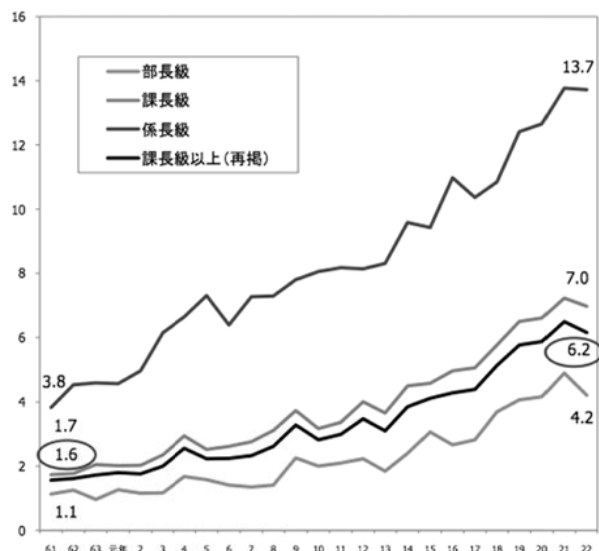
2.2 女性の社会進出に関する側面

女性の社会進出度を把握する上で女性労働者数及び女性管理職者数の推移は重要なデータである。日本の総務省統計局及び韓国の統計庁によると、女性勤労者数は1990年代から2010

年までの間にそれぞれ 6%（日本）、16%（韓国）増加している。また、日本では課長級以上の管理職に就く女性の割合が右肩上がりに伸びている（Figure1 参照）。男女雇用機会均等法が施行（1986 年）されてから女性の社会進出が進んでいることは明らかであり、男女平等の意識が高まっていることのあらわれであると言える。しかし、管理職における男女の割合には未だに大きな差があり、男女平等を具体化させるに至っていないのが現状である。韓国でも男性の臨時（短期）労働者は 2000 年から 2010 年までに約 3%減少した一方で、臨時労働者として働く女性の数は約 3%増加している。

日韓に共通する点として、法律や政策によって女性の社会進出への道は広がっているものの正規雇用・管理職といったあらゆる面で男性との差は大きいままであることが挙げられる。

Figure1 役職別管理職に占める女性割合の推移(企業規模 100 人以上)



資料出所：厚生労働省「賃金構造基本統計調査」

2.3 結婚に関する側面

女性の高学歴化は男性よりも急速に進んでいる。たとえば文部科学省の学校基本調査によれば、1960 年の日本において大学に進学する女子の割合は 2.5%であったのが、2003 年には 34.4%にまで増加している。これに伴い、平均初婚年齢も上がり、晩婚化も進んでいる。厚生労働省の人口動態統計の年間推計によると日本の女性の平均初婚年齢は 1959 年には 24.4 歳だったが、2010 年には 28.8 歳になっている。こうした現象は日韓で共通したものであるが、日本においては特に都会でこの傾向が見られる。

また、結婚しても共働きを選ぶ夫婦が増えており、日韓ともに、現在、共働き世帯数は片働き世帯数を超えている。韓国では特に地方部でこの傾向が強い。統計庁の共働き世帯と中途退職女性の統計集計結果によると、韓国における共働きの世帯は 507 万世帯、片働きの世帯は 491 万世帯で、共働きが片働きを上回っている。内閣府の男女共同参画白書によれば日本でも、1973 年には 600 万世帯だった共働き世帯数が 2011 年には 987 万世帯と 400 万世帯近く増加した一方、片働き世帯は 1100 万世帯から 773 万世帯にまで減少している。

以上のことより、女性が経済的に自立したために結婚する年齢が遅くなったこと、また、結婚してもかつてのように専業主婦になるのではなく、積極的に社会で働いていることがわかった。その理由は、家計の経済的な事情や女性のキャリア志向など、家庭によって異なる

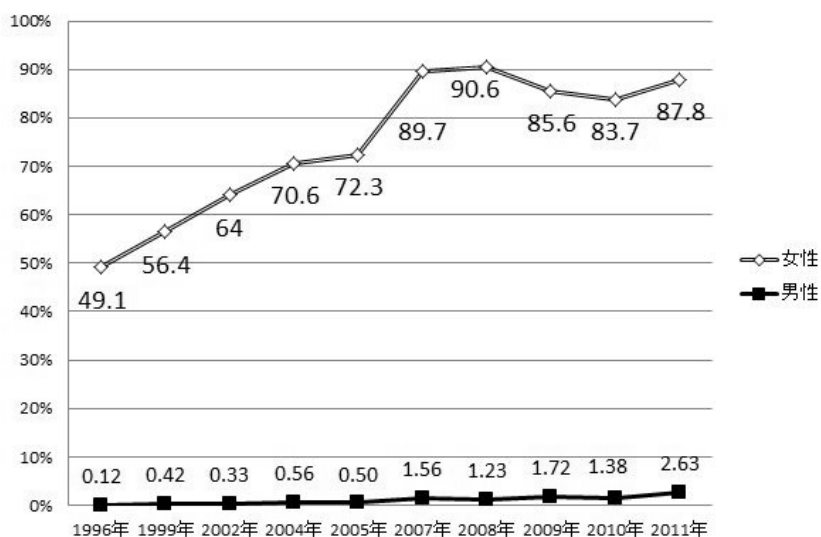
ため一概には言えない。

2.4 育児に関する側面

共働き世帯数が片働き世帯数を超えている状況において、育児の面で必要不可欠な要素として育児休暇が挙げられる。育児休暇取得の現状はどうなっているのだろうか。

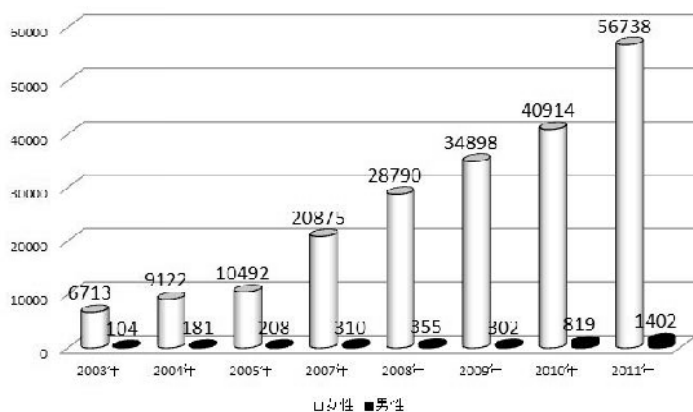
韓国の育児休暇利用者数は、2003年には女性6,713人、男性104人であったが、2011年には女性5万6,738人、男性1,402人になった。日本の育児休暇取得率は、1996年には女性49.1%、男性0.12%であったが、2011年には女性87.8%、男性2.63%にまで上昇した。Figure2.3から日韓どちらも育児休暇取得率・利用者数は増加していることが分かる。一方、韓国では男性は女性の利用者数の約40分の1しか取得しておらず、日本でも男性の取得率は未だに一桁台にとどまっているなど男女の取得状況の差は大きい。この原因として、社会的に男性の育児休暇が認知されていない、また男性自身の育児参加意欲が低い事が考えられる。育児負担が女性に大きくのしかかっており、育児休暇取得について日韓で共通した問題を抱えているといえる。

Figure2 日本の育児休暇取得率



資料出所：厚生労働省「雇用均等基本調査結果」

Figure3 韓国の育児休暇取得率

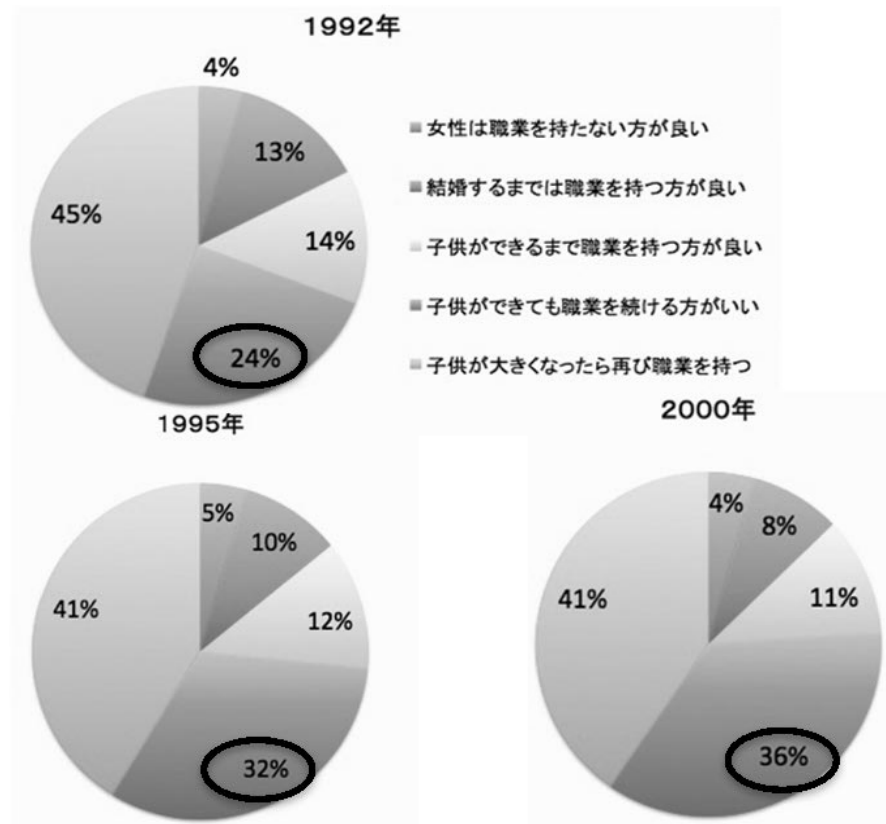


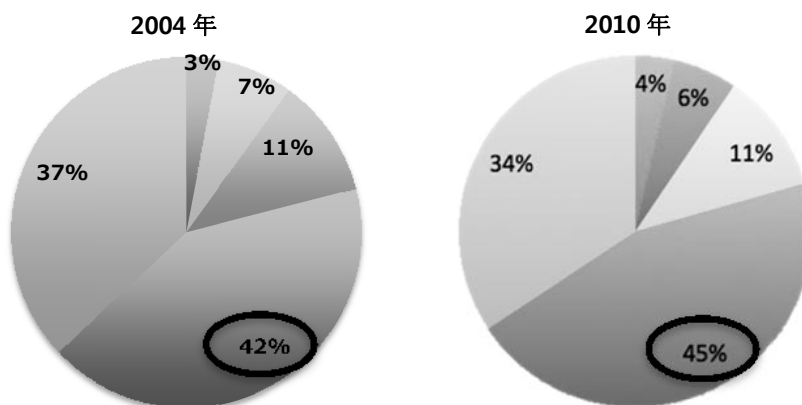
資料出所：女性家族部「2012 統計で見る女性の生」

2.5 社会の意識に関する側面

女性が職業を持つことに対する社会意識は、どのように変化してきたのだろうか。まずは、日本の社会意識の変化をみていく。以下に示したのは1992年から2007年にかけての、女性の就業体系に対する社会意識についてのアンケートのFigure4である。

Figure4 日本における女性の就業体系に関する社会意識の変化





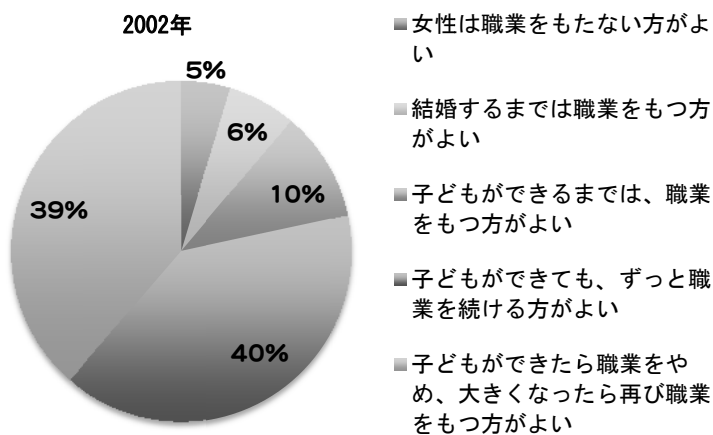
資料出所：内閣府『男女共同参画社会に関する世論調査』

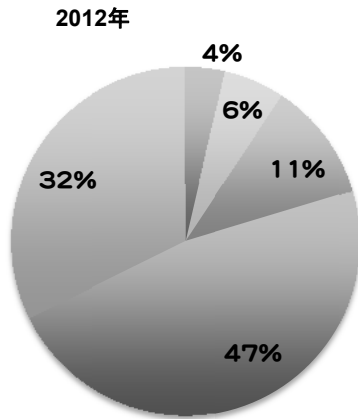
グラフで最も社会意識の変化が顕著にみられるのは「子どもができて職業を続ける方がよい」という円に囲った部分の箇所であり、15年間で24%から45%まで伸びていることが分かる。また他の各項目と合わせて考えても、女性の就業に対する社会意識は全体として肯定的なものとなってきていると言えるであろう。

さて、それではこの女性の就業に対する肯定的な意識は実際の女性の職場環境に結びついているのであろうか。日本では2010年に厚生労働省が男女の平等感について世論調査を行っている。それによると、「男性の方が優遇されている」と回答した人は71.5%「平等」と回答した人は23.2%、「女性の方が優遇されている」と回答した人は3.6%という結果であった。現在さまざまな側面から女性の就労支援が行われているが、まだ「平等だ」と答えられるだけの環境には程遠いことがうかがえる。

次に、韓国での社会意識はどのように変化しているのだろうか。女性が職業を持つことに對する意識から考えてみたい。下記は上記と同じアンケート項目のアンケートの回答のグラフである。

Figure5 韓国における女性の就業体系に関する社会意識の変化





資料出所：内閣府『男女共同参画社会に関する国際比較調査』

10 年前の調査結果と比較してみると、日本と同じく、女性の就業に対して肯定的である人が増えてきているということが分かる。

更にこの肯定的意識変化が実際の職場環境につながっているか考えたい。韓国のインターネットサイト「就業 portal 人」で会社員を対象に結婚が職場生活に及ぶ影響に関するアンケートを実施した結果、男性の約 8 割が結婚は有益だと回答した一方、女性の約 6 割は障害になると回答した。女性の場合「職場で既婚者に対する思いやりがない」を選んだ人は 40.1% であり、職場自体の問題も女性の社会進出の障害要因になっていることが確認できる。

このように、日本と韓国ではどちらにおいても女性の就業に関しての社会意識は肯定的なものに変化しているが、実際の職場環境はそれに応じたものとなっていないというのが現状であると言えるであろう。

3. 事前学習・インタビュー

子を持ちながら働く女性に対する社会のサポート体制は、かつてに比べれば整ってきたものの、企業などでは女性が家庭と仕事を両立することが依然として難しいという状況があるのではないだろうか。彼女たちの置かれた実状を知るために、就学前の子どもを持ちながら仕事を続けている母親たちに紙媒体でインタビューを実施し、その生の声を聞いた。

質問内容は以下の通りである。

- ①子育てに専念する選択肢もありますが、なぜ仕事を続けようと思いましたか
- ②妊娠・出産・復職にあたってどのようなサポートを勤め先から受けましたか。またそれをどう思いましたか
- ③あなたの職場では、働いている人たちが「ワークライフバランス」をとれていると思いますか。また、結婚して子どもを持ち、産休や育休を取得しても復職後 昇進ができる環境だと思いますか
- ④ワークライフバランスを実現するために、保育園はどういう役割を果たしていますか、また役立っている点や改善点がありますか
- ⑤女性の社会進出に伴い、結婚観や家族観も変わったと言われますが、あなたはどのように感じていますか

3.1 日本

現在、小学校就学前の子どもを持ちながら、フルタイムで働いている 30 歳代の女性 6 名を対象に、インタビューを実施した。(2012 年 6 月 19 日～7 月 5 日)回答は以下の通りである。

質問①

生活を支えるため。仕事しながらのほうが子育てにもストレスを感じにくい。仕事にやりがいがあった。

質問②

勤め先からはそれなりに充実した手当を受けられたものの、依然として日本の企業の取り組みは消極的である。公務員は女性の出産や育児の制度が比較的整っている。

質問③

職場の制度としては整っているが、それを活用できる環境にはない。仕事と家庭を両立するのは体力的・現実的に難しい。家族を犠牲にして働かないと昇進は無理だ。

質問④

保育園があることで仕事に専念できる。子どもが保育園で色々なことを教わるができる。親と一緒に子育てしてくれる。認可園に入るのは困難で、無認可を探すことさえもとても大変である。希望したタイミングに希望した保育園へ預けることができなければ、女性が働き続けることは難しい。親の残業に対応して延長保育もしてくれるが、利用の際には制約があり、柔軟性に欠ける。2 人目以降の入園は経済的に厳しい。ノーマライゼーションが施設に反映されていない。

質問⑤

昔と違って今の職場では男女差を感じることはなく、夫婦共働きも当たり前の環境なので、家族観も変わったと思う。仕事上の社会制度は男性を中心としていたあり方のままで、世間的には出産しても続けられる職業はまだ少ないので、実際はそんなに変わっていないのかもしれない。父親の休みや早退を認めてくれる父親側の変化も必須である。今や家事や育児も夫婦で協力しながらやる時代になったので、そういう協働的な両親の姿を子どもに見せることは教育にもなる。

3.2 韓国

2 歳の子どもを持ちながら、仕事(金融業)を続けている 28 歳の女性に対して、インタビューを行った。回答は以下の通りである。

質問①

経済的な理由と自己実現のため。

質問②

当然のことだが、妊娠後期からは会社の飲み会に参加しなくてよくなった。

質問③

不足している。制度的に可能な環境でも現実的には困難である。

質問④

家族の助けを受けているので、保育園は利用していない。

質問⑤

当為結婚や母性を強要するような家族観に相当な変化が起きているが、これはごく自然なことだ。

3.3 インタビューの考察

依然として企業の取り組みは消極的であること、また保育園が不足していて子どもの入園が決まらないうと復職できないという、この 2 点の主要因のために、仕事と家庭の両立は体力

的・現実的に難しく、家族を犠牲にして働かないと昇進は困難であることが判明した。また、女性の働く職場で産休・育休がとりやすい雰囲気を作っていくだけでなく、夫婦が家事分担をできるように男性が家庭に参加することを応援する体制の整備も求められる。

4. 訪問実習

女性を取り巻く環境がまだまだ厳しいものであると分かったが、それでは行政はどのような取り組みをしてその改善に尽くしているのだろうか。私たちは、女性の就業やワーク・ライフを支援する日韓の施設を訪れ、その施策を調べた。

4.1 日本・女性就業支援センター

日本側では、「女性就業支援センター」を運営する財団法人女性労働協会の担当者に、働く女性の抱える問題や支援などについて話を伺った。（2012年7月30日、午後7～8時）この施設は、「未来館」が廃止された後、平成23年度から厚生労働省の委託を受けて運営されている。当初「未来館」を訪問する予定であったが、廃止されていたため、その代わりとして運営されているこの施設を訪問する事にした。

質問内容は以下の通りである。

- ①女性就業支援センターの仕事内容はどういったものか
- ②そのセンターの前身である「未来館」ではどのような活動が行われていたのか
- ③現在、働く女性がどのような困難を抱えていると考えているか
- ④最近では、仕事と子育てに関する男性の意識も変わりつつあるか
- ⑤日本の労働環境に何が求められていると思うか

これらの質問に対する回答は以下の通りである。

質問①②

現在の細かい仕事内容は、本の貸し出し、女性向けのメンタルヘルスの維持やストレス対策の発信、企業や団体へのセミナー・研修のサポートといったもので、これらの事業を5、6名で行っている。1人当たり年間20か所ほど依頼のあった全国各地に赴いていき、約100件の依頼をこなしている。基本的に依頼を受けないとサポートは行わず、自ら他の組織に働きかける事はない。前身の未来館では、個別相談なども行っていたが、先の事業仕分けにより、今の形態に改まった。

質問③

女性の仕事に関する変遷としては、1985年以前、女性は積極的に必要とされておらず、2000年頃になってようやく、総合職としてなら認められるようになった。現状でも、全体の女性労働者数は増加したものの、女性労働者の非正規雇用率は高く、正規雇用であっても、結婚・出産・育児の壁があり、仕事を続けることは困難である。

質問④

男性の意識にも問題があり、その改善が求められる。政府も男性の育児休暇の取得を目指しており、若い20～30代男性も子育てをしたいので肯定的であるが、管理職レベルの世代の男性は自身のときと違う制度に戸惑いを覚えており積極的ではない模様である。男性と会社の意識の改善が必要であり、男女平等参画が唱えられる一方で、個人レベルで男女ともに葛藤がある。

質問⑤

今後日本の労働社会に求められるものは、仕事と子育ての両立と、出産と育児を経ての社会復帰への寛かさである。女性は柔軟な人事を求めている、具体的には短縮労働による抜けた労働時間の補い方や異なる労働時間の評価方法などが挙げられる。労働者全員が自分の価値観を大事にできるワークライフバランスのとれた社会が理想である。

4.2 韓国・ソウル女性プラザ

私たちは日韓共同で、ソウル女性プラザを訪問した。（2012年7月26日）なぜならソウル市庁女性政策室へ取材を依頼したところ、女性プラザ訪問を勧められたからである。そこは、市庁から委託を受けた女性家族財団が運営している、市庁の中で女性に対する政策を行う機関である。

質問は以下の通りである。

- ①女性プラザの活動内容について
- ②韓国の働く女性の環境について
- ③保育の現状と問題点は何か
- ④ソウル市の保育政策はどのようなものか

これらに対する回答は以下の通りである。

質問①

女性プラザは、2002年設立の、ソウル最大の女性センターであり、①女性セミナーの開催と、参加女性への託児所提供（1000ウォン/1時間）、②テニスコートやプール、女性史の博物館の所有、③新人の女性芸術家のための作品の展示場所や商品の販売窓口の設置、④障害者や結婚移民、食育などの女性に関する8つのNGOに2年契約での活動場所を提供、など多くの役割を担っている。

質問②

韓国社会では、0～2歳児の場合30%、3～5歳児の場合39%と、子どものいる母親の就業率は高まり、親をサポートする必要性が増している。しかし未だに全体の42%が在宅保育で、育児休暇を取得するのは女性に偏っている。

質問③

韓国では、子どもの数は減少しているが、保育園の数は圧倒的に足りていない。安い月謝、高い信頼性、整った環境のため国公立保育園が人気だが、その数は少ない。ソウル市では2011年現在待機児童は3万8700人もいる。そこで、今年2012年からは国公立でも無償保育が始まった。保育への国家予算は6247億円（2009年）から1兆1410億円（2012年）へ増額され、これにより支援の対象者は7000人以上増加した。

また、日本と違い韓国では、音楽や踊りなどの習い事に対して投資する金額が大きいため、親の負担が大きい。親の収入に対する負担金比率は国公立では7.7%、私立では14.1%、家庭内保育は4.2%である。

質問④

ソウルでは保育に関する政策が市長の一存によって決定される。前市長は私立保育園に助成金を交付して保育園の質の向上を目指した一方、現市長は国公立に交付して市立の保育園をさらに890増設することで3万人という待機児童数の減少を図っている。これは、私立保育施設は営利事業なので支援金が親に還元されず、保育園自体の経営に使われてしまうことを懸念してのことである。また、国公立の保育施設が占める割合は日本だと50%、ソウル市だと10%、韓国全体だと5%であり、韓国では私立の保育園が多いことが分かる。

さらに、現市長は施策の一つとして女性に関する10の政策の柱も打ち出している。それは、①保育公共性の確保、②生涯ステージ別女性の健康管理、③シングル女性支援、④働く女性の勤労環境の改善、⑤都市空間および施設に性平等観点を導入する事、⑥女性平等、⑦女性の就業支援 女性安全環境の調整、⑧性平等への取り組みシステムの構築および強化、⑨ワークライフバランスの調整、⑩障害者・移民女性が働きやすい環境作りである。

4.3 訪問実習の考察

女性の労働環境については、以前までに多くの記述があるので、ここでは両国の支援機関自体について考察したい。日本の女性就業支援センターは、女性をサポートしようとする何

らかの団体の活動をサポートする裏方としての役割を担っている。講演会や研修会をどのように運営するかアドバイスをしている。韓国の女性セミナーは、研究と同時に、シンポジウムや女性芸術家の作品の展示・物販、女性を支援する NGO のサポートなど、女性に関するサポートを包括的に行っている。日本は国全体の機関であったのに対し、韓国はソウル市のみ機関であったのに、かなり幅広い支援が行われていた。韓国の方が政治主導で、積極的な取り組みが行われていた。

しかし両者ともに、具体的な成果・達成した事をはっきりと把握できなかった。その理由として、施設の情報発信能力の欠如が挙げられる。

例えば、韓国の女性プラザについて、女性の就業に関する問題や政策を研究していること、開催されるシンポジウムの詳細、販売窓口の存在などは HP などでも確認できるが、さらに詳細な活動を外部から把握するのは難しい。魅力的な施設も情報発信が上手く機能していないために充分活用されていない。

この課題は日本の女性就業支援センターにも当てはまる。この施設の場合、女性支援を行う団体をサポートするという特性もあって、表舞台へ出ないため社会からの認知度は低い。前身であった「未来館」も話を聞くと、全てが無駄な施設ではなかったように思えた。つまりこうした機関は社会からの認知度が低すぎて、有効活用されていないのではないだろうか。

支援機関は自分たちの活動やサポート内容を外部に積極的に開示していくべきである。しかし、これらの情報を入手できていない私たちにも問題があるとも言える。自分たちで解決していくためにもっと積極的に行動を起こし、支援機関を上手く利用する意識が足りないからだ。

5. 考察

5.1 全体の考察

今回の研究で行った資料調査やインタビューを通じて、私たちは現在働く女性たちがおかれている社会状況を、多方面から知ることが出来た。

女性の高学歴化・ライフスタイルの多様化などの変化による女性の労働者・管理職数増加といった側面から見れば、女性の社会進出が進んでいるとも言える。しかし全体的に見れば依然として、男女間の賃金格差や経済参加率は男性優位にある。女性が社会で働くようになると、晩婚化その結果少子化が進み、それらは現在の社会問題にもなっている。女性の社会進出が、結果的にそうした問題につながってしまうのは、仕事・キャリア形成と家事・育児が両立不可能な社会状況が原因である。政府も法の側面や支援機関を設ける事で、問題解決を図ってはいる。だが、その方針や政策は私たちにまで届いていない。女性のライフワークバランスに関する社会の意識も徐々に変化しつつあるが、女性が結婚後も仕事を続けることに否定的な人は、まだ多い。また肯定はしていても、実際の社会で女性の働きやすい環境を実践しているわけではない。それは、実際にそのような状況を感じている働く母親のインタビューや、男性の育児休暇取得率から明らかだ。これから社会に出ていく私たちも、仕事と育児の間の葛藤を抱えることが予想される。

社会の意識を変えるには長い時間を要する。政府が行うトップダウン型の啓発活動・政策が必要である。また私たち個人も、積極的に問題を解決する姿勢が求められる。政策について知ったり、支援機関が発信する情報を活用したりすることは重要である。

5.2 マニフェスト

私たちは考察に加え、女性の仕事と育児問題に関して、これからの社会に必要な政策を考え、5つの点を挙げる。

①政府、企業、国民の間のコミュニケーションの強化

政府の支援機関の実態があまりにも一般市民に届いていないと感じたため、社会に向けて情報公開が必要である。さらに、企業はこうした支援機関を利用してアドバイスを受けたり、労働者の意見を聞く事が必要。

②女性リーダーの育成

女性の声が届きにくい社会構成を打破するため、女性の意見を代表できるようなリーダーを育てるべきである。もちろん女性だけの権利を主張するのではなく、よりよい社会を目指し、男女から支持されるリーダーが求められる。

③労働時間の厳守

残業や過剰労働は、家庭と向き合う時間を奪ってしまう。働く母親にとっては、家事・育児の両立を助けるであろうし、男性は育児に参加する時間を確保できるようになり、実際育児に関わってみて、認識の変化もつながる可能性がある。

④男性に育児参加の機会を提供

近年では「イクメン」という言葉があるように、男性の中にも育児に積極的に関わろうとする人が増えているようだ。そのような人にとっては子供と向き合える機会である。消極的だった人も、育休を与えられれば家事と仕事との両立の難しさに気が付き、女性のライフワークバランスへの理解が深まる契機になるだろう。

⑤女性の再就職支援

女性支援機関では、ライフワークバランスに関するセミナーや講習会が開かれている。しかし再就職に直接つながるような支援は行われていなかった。具体的には何かの技術を教えるような講座や企業との仲介的役割が必要なのではないかな。

5.3 反省点・残された課題

私たちの一番の課題・反省点は、日韓の違いへの注目が少なかった点である。この点については、セミナーの発表中も森山先生にご指摘いただいた。私たちの発表は、1人の女性のライフワークと共に、女性を取り巻く環境を説明しようとするものであったため、両国違いについて時間を割くことが出来なかった。予め私たちの発表について、よく説明しておく必要があった。

私たちは、日韓の行政で女性支援活動に対する取り組みのスピードの違いに気が付いた。しかし更に様々な側面から見れば、違いがあったかもしれない。私たちが両国の置かれている環境は非常に近いという前提に立ってしまったのは、私たちの知識や入手した参考資料からはその事実を得る事ができなかったからだと考える。ある問題を様々な側面から考えてみる事の重要性・難しさを学んだ。

この反省は今後活かしていきたい。もちろん日韓両国の女性環境の違いにも、継続して注目していく。

<参考文献・URL>

「諸外国における専門職への女性の参画に関する調査—スウェーデン、韓国、スペイン、アメリカ合衆国—」（2012/8/18 閲覧）

<http://www.gender.go.jp/research/sekkyoku/h23shogaikoku.html>

「韓国における取組と日本への示唆」（2012/8/18 閲覧）

http://www.gender.go.jp/research/pdf/senmonsyoku/14_ch3-2.pdf

「諸外国における専門職への女性の参画に関する調査」（2012/8/18 閲覧）

www.gender.go.jp

内閣府『男女共同参画社会に関する世論調査』

総務省統計局『労働力調査』

厚生労働省『賃金構造基本統計調査』

厚生労働省『人口動態統計の年間推計』

内閣府『少子化社会に関する国際意識調査報告書』

統計庁『共働き世帯と中途退職女性の統計集計結果』（韓国）

『就業 portal 人』（韓国のインターネットサイト）

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

山本梨紗

日韓の違いを私が一番強く感じたことは、日本に比べて韓国では見知らぬ人への垣根が低いということだ。1日目の歓迎会の後、ホームステイ先に向かう電車の中で、私と話していたホームステイ先の子が隣に座っていた中年の女性に突然話しかけられた。何を聞かれているのか、何を答えているのかさっぱり分からなかったが、どうやらスマートフォンの使い方を尋ねられたようだった。何度かスマートフォンを間に挟んでやりとりをした後、最終的にホームステイ先の子がかわりに操作をして、女性を悩ませていた問題は解決したらしい。「新しいものは分からないわ」というようなことを言っていた。他にも道に迷った時に韓国側の人は近くにいた人をつかまえて道を尋ねたり、どの電車に乗ればいいのかとホームでまごついていたら通りかかった夫婦が一番効率のよい行き方を教えてくれたり、逆に路線を尋ねられたりすることもあった。目的地の近くまで案内してくれた人もいた。日本、特に東京ではまず見ない光景だったのでとても戸惑った。日本なら人に尋ねる前にもうしばらく粘るか、路線を尋ねるとしても駅員さんの元へ行く。ましてやスマートフォンの使い方をたまたま隣に座った人に聞くななんてことはまずしない。同じことをしたら、たいていの人は戸惑いと警戒の目を向けられると思う。韓国では戸惑いどころか、困っている人がいたらあちらから教えに来てくれる。

思い返してみれば、事前の遠隔交流でのTV会議でも韓国側の人は「私たちのこと」を知ろうとしてくれていた。話し合いに行き詰った時、どんな職に就きたいのか、結婚したいかどうか、子供は欲しいのかなど、自分の将来像を言い合おうと韓国側の人が提案してくれたのだ。

実習の最初のうちは、自分の韓国語の心もとなさとぐいぐい引っ張りこんでくれる韓国側の人の積極性に頼り切っていたが、韓国側の人たちの姿に背を押されて自分からも勇気がでた。分からないなら分からないなりにいっそ習おうと思って、手の平や足の甲の表現や国花など、韓国語や韓国についてさまざまなことをペアの子や班の子に聞いた。そうするうちに、私の使う韓国語がかわいいと言ってもらえたりして、どんどん話しかける勇気がでた。おかげで韓国語を使うことへの抵抗感がなくなり、分かる語彙も増やすことができた。

日本人は他人に対して一定の距離を置きたがる。それが悪いことだとは思わないが、韓国のその対人関係の距離感が素直にいいなと思った。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

毛利文香

私が日韓交流実習で韓国に滞在している際に気づいた事は日韓では人と人との触れ合いの濃さが全く異なっているということです。

日本では人と人との関わりが希薄になってきてしまっており、いわゆる近所付き合いといったものも少なく、私自身も隣近所にどのような人が住んでいるか把握出来ていません。しかし韓国では違います。韓国では多くの人が巨大なアパートのような建物に住んでおり、それぞれのアパートの近くには主にその住民が利用する飲食店が数多く立ち並んでいます。私も実際ホストファミリーにそのような飲食店に連れて行ってもらったのですが、そこでは一つの料理を複数の家族が囲んでいる光景が多々見受けられました。また私のホストファミリーが食事をしている時にも多くの人が声をかけにきました。

そんな韓国で、私は最初慣れない韓国語で気さくに話しかけられることに萎縮してしまっていました。日本では赤の他人に話しかけられることはほとんどなく、あったとしても会話はすぐに終わってしまいます。しかし韓国の人は初対面でも様々なことを話しかけてきます。また通訳をペアの子に頼まなければならないことへの罪悪感もありました。しかし、ペアの子に「通訳することは私の日本語の勉強にもなるから気兼ねしないでね!」と言ってもらって、また自分でも「折角韓国に来て実習をしているのだからその文化を自分で体感しなきゃいけないな」と思い積極的に話すようにしようと思うようになりました。そして、学校外の知らない人との会話ではペアの子の力も借りながら積極的に話すようにこころがけ、また、会話ではなくても買い物の際の店員さんとのやりとりではきちんと笑顔で簡単な挨拶を交わすようにしました。

そうしていく内に私は韓国語が上手に話せなくても体で表現したり時には英語を交えたりして人とコミュニケーションを図ろうとするようになりました。話し手である私が一生懸命何かを伝えたり話しかけたりしようとすれば聞き手側もつたない韓国語の中から何か汲み取ろうとしてくれるので、簡単ではありませんが意思の疎通ははかれていたと思います。

(もちろんそれについてはかなり申し訳なく思った事も多々あったので、今度また行く時には韓国語を、もう少し上達させたいなと思いました。コミュニケーションの障壁は少ないにこした事はないので。)

今回のセミナーで、韓国はすぐ隣の国でありながらこのように日本とは違う点もあるのだなと驚かされました。そのような文化の違いを身をもって体験できて良かったです。

日韓の気持ちの伝え方、行動の取り方

鈴木羊子

日本人は何か頭に浮かんだとしてもすぐには行動に移さない。良く言えば相手の望んでいることは何かをよく考えてから行動する、悪く言えばぐだぐだと色々と考えてなかなか行動しない。それに対して、韓国人は自分のなかで思いついたことをすぐに行う。良く言えば積極的でとても親切、悪く言えば頼んでもいないのに色々かまってきて重苦しい。

日本人からすれば韓国人は押し付けがましいおせっかい、韓国人からすれば日本人は何がしたいのか分からない根暗な奴と映るかもしれない。正直、私も最初は韓国の人たちの積極性にたじろいでしまった。しかし、時間を共にするなかで彼らの温かみを素直に感じとり、そして自分の心にも素直に行動することができるようになった。

私たちのセミナーはちょうどロンドンオリンピックの開催と重なっており、韓国でも日本と同様に連日韓国勢の熱戦の様子が伝えられていた。ホームステイ先でも試合をよく見ていた。その日、私がシャワーから出るとお父さんとお母さんがご両親の寝室にあるテレビでサッカーの試合を見ているようだった。パートナーの学生は私と入れ替わりでシャワーに入ってしまった、その場にはご両親と韓国語の全くできない私しかいなかった。それまで、うまくコミュニケーションがとれないのでパートナーの学生がいない場でご両親と関わるのを恐れ、なるべく避けていた。しかし、ご両親の方はヨーグルトをすすめてくださったり、洗濯をしてくださったりと積極的に私に何かをしようとしてくださった。パートナーの学生も常に私を気遣ってくれ、気付いたことは何でもしようとしてくれた。そんな彼らと一緒にいるうちに、自分も彼らに対してこんなに消極的にいるべきではないと思うようになった。そこで、私自身サッカー観戦が好きだったのもあって、思い切って「Soccer?」と聞いてみた。最初意味が伝わらなかったようだったが、足で蹴る真似をしてみると、「Uh!」と言ってすぐに「Watch?」とテレビのあるご両親の部屋に入るように招いてくれた。そこからご両親と一緒に3人でスイカやらウォーターメロンやらを食べながらサッカー観戦で盛り上がった。

おそらく日本で同じ状況になったとしても同じ行動を取ることはなかっただろう。一緒にサッカーを見たいと思っても、「テレビはご両親の部屋にあるし部屋に入るのは失礼だろう…」「出会って1、2日の私とサッカーなんて見たくないだろう…」などと理由をつけて、自分の気持ちに素直に動けなかっただろう。もちろん日本人なりの相手を気遣う配慮も時には必要である。しかし、相手の気持ちはひとまず置いておいて、自分の中にある気持ちを率直に相手に伝えることで関係を深めることができるということを私は韓国で強く感じた。

合宿所に向かう日の朝、私は大きなキャリーバックを持ってやっとの思いで地下鉄に乗った。すると、すぐに近くの席（優先席）に座っていたおじさんがシートを指差して隣の席に座るよう強く促してきた。私は優先席であることが気になりながらも、おじさんの目力に負けて座った。違う日、地下鉄で小さい子どもを二人連れた女性の方が地下鉄で立っていると、座っていた人がすぐにその女性を半ば無理矢理席に座らせようとした。その女性はきっぱりと断っていた。おそらくこれが韓国式のコミュニケーションの取り方なのだろうと思った。自分の思うことをとりあえず相手にぶつけてみる、それに対して相手も自分の思いをしっかりと返す。韓国人学生の話し合いや討論の様子をセミナー中何度か目にしたが、彼らがいいつでも真剣な表情・口調で言葉を交わしているのがとても印象的だった。普段、自分の本心を言ったりNOとはっきり断ることをしない私はとても戸惑ったが、自分の意思をしっかりと伝え、相手の気持ちも同じようにしっかりと受け止めることはとても大切なことだろう。

私たちは多くの人と出会い関わっている。相手とどれくらい共通するものがあるかは様々である。しかし、その差異に関わらず、相手と真正面から関わっていかうとする姿勢は常に必要であろう。日本人は距離を置きながら様子を見る傾向があるが、もっと素直に生きていくことも大切である。

韓国で過ごした1週間は私が成田を出発した時に考えていたものよりずっと濃いものであった。韓国の人たちの情熱に触れ、優しさに触れとても刺激の強い1週間であった。異なる文化的背景を持つなかで100%相手を受け入れ理解することは難しい。しかし、その違いの中で新たな価値観の発見を楽しみ、自分の中にもともとあった考え方と融合させることで広い視野を持てるようになるだろう。異文化間交流はその場における楽しみがあるだけでなく、それからの自分の生き方そのものにも大きな影響力を持つだろうと今回の日韓セミナーを通じて感じた。

交流を通じて

三谷菜穂美

今回、この韓日大学生国際交流セミナーに参加して最も印象に残っていることは、韓国の皆さんの思いやりである。

初めて出会った日から韓国の皆さんはとても親切で積極的であった。歓迎会では私のお皿にたくさんの料理を取り分けてくれ、帰り道ではまるで自分が持つのが当たり前であるかのように重いトランクを運んでくれる。グループ別で野外実習へ行ったときには、グループ全員分のお茶を用意してくれており、昼食には手作りのお弁当を持ってきてくれていた。私は、ここまでしてくれるものなのか、と驚いたと同時に、自分はこんなにも人に親切にできるのだろうか、と感じた。はじめのうちは韓国の皆さんの温かさに触れると、どこか申しわけなさを感じ、何かをしてもらうたびに「いいよいいよ」とか「ごめんね」を繰り返していた。しかし、せっかくの思いやりを「いいよいいよ」という言葉で拒絶してしまうのは、なにか違っているのではないだろうか、その思いやりを目一杯受け入れることで感謝の気持ちを表すべきではないだろうか。とふと考えさせられた。

日本の価値観では、人にあまり干渉しすぎないことも思いやりの一つであると考え、あえて人と距離を置いて接することが多い。しかし韓国の価値観はそれとは違う。どちらの価値観のほうが良いという問題ではなく、相手の心からの気持ちを汲みとり、自分はその気持ちに精一杯応えることこそ、私がとるべき態度なのではないかと気づかされた。

最終日に、同じグループの日本の皆さんと思い出に浸りながら「韓国に来て人を思いやる気持ちをとり戻した気がする。」「韓国側の皆が日本に来たら、今度は私たちが心からおもてなしをしたい。」という会話をしたことが今も心に残っている。

日本と韓国では依然として歴史問題・領土問題を含めたたくさんの軋轢がある。このレポートを作成している今も、領土をめぐる両国の関係は不穏な状態にあり、インターネットでは連日のように反韓感情を煽る心無い記事が掲載されている。韓国へ訪れて韓国の文化・人々に触れた今、この状況に心が痛む。私が交流で得たすべてのものを踏みにじられた気持ちになるからだ。

しかし、お互いの国を大切に思えるようになったこの気持ちこそ、交流で得た最もかけがえのないものであるといえる。交流を通じて相手の価値観や考えに触れることで、相手の文化や人々に対する関心・共感・理解が生まれ、主体的にその国の文化・人々に関わっていくことができる。もちろん政治的な問題が平和に解決されることも望むが、それ以上に今回のセミナーのような交流が次から次へと受け継がれ、日本と韓国を繋ぐ架け橋になることを願っている。

女子力

丸山 栞

4 か月にわたって「女性の社会進出」というテーマに沿った調査を行い、週一回テレビ会議で状況を報告しあいながら準備を進めてきたわけだが、実際に会えるとこんなにも嬉しいものだろうか！歓迎会では、これまで日韓を隔てていたスクリーンの壁がやっと無くなったようでとても興奮した。セミナーに参加した同徳女子大の学生たちはお茶大生に負けず劣らず真面目で頼もしくて楽しくて、一緒にいてとても心地よかった。

さて、日韓比較について考えてみると、両国の文化や価値観にはさして大きな違いは感じられず、正直なところ、似ている部分や共通点ばかりが目についたため、多文化の差異を実感したことはわずかだった。以下では私が感じた数少ない相違点のうちの一つ、언니文化について考察してみたい。

「언니」と聞くと「おねえちゃん」という日本語を連想する人も多いだろうが、まさに韓国ではこの言葉がよく聞かれる。私たちのグループでも、韓国側には1年生から4年生までいたので、セミナー中ずっとこの言葉が飛び交っていた。

언니という語には独特の甘さがある。それは、妹は頼りになる姉に甘えて慕い、姉はかわいい妹の面倒を見る、という女の子の独特な関係性を紡ぎ出しているものこそがこの語であるためだ。そして甘さを持つと同時にまた、この語はその話者に責任感や芯の強さを付帯し適度な緊張感も生み出している。つまり、妹に慕われるからには姉にはそれなりの能力や知見が求められるし、妹も助けてもらうからには姉をいつでもフォローできるような体勢で構えていなければならない。언니という語が象徴するように、女の子同士の関係が濃密であり、姉も妹も相手への深い愛情と思いやりが体中から強く溢れ出ている。日本のくだけた友だち関係や部活内の厳しい先輩後輩関係とは違う、まさに「姉妹関係」とも言うべき繋がりが構築されており、この点に韓国との相違を感じとった。KBSの文化解説によると、언니は『相手を警戒の対象/競争の対象』として見ずに、家族または親戚と同じような感じで接するという宣言的な意味^[1]を持つ、韓国的な家族関係を適用させた、親しみのこもった表現である。

しかしよく考えてみれば、日本にも언니文化のような上下関係があってもいいかもしれない。日本人には、언니という愛称もその概念も全て女の子の「かわいい」文化として受容されそうな気がしている。

<参考資料>

[1] 「KBS WORLD」(2012/8/10 アクセス)
http://world.kbs.co.kr/japanese/korea/program_kjculture_detail.htm?No=102

対話と交流が生み出すもの

馬淵茉衣

私は今回の日韓セミナーをずっと心待ちにしていた。昨年は東日本大震災の影響で中止されたため、一年越しの念願が果たされることとなった。セミナーを終えた感想を一言で言うと、「何事も直接対話し交流しなければわからない」ということである。全てを言葉で表すことはできないが、私がそう感じた経緯について精一杯綴っていききたい。

まず、事前のテレビ会議では日韓で意見の食い違いが生じることが何度もあり、互いに興味のある分野が異なるという印象を受けたため、自分達で選んだテーマを発表できる段階まで持っていけるのか非常に心配だった。それと同時に、未だ会う前の段階でこれほどずれ違いが生じてしまうのならば、実際に会った時にはもっとわかり合えない部分が出てくるのではないかと不安に思っていた。そんな心境の中、私は日韓セミナー出発を迎えることとなった。

しかし、歓迎会の場で同徳女子大の皆さんと対面した時、それは私の取越し苦労だったと判明した。初対面から私のホームステイ担当のパク・デウォンさんは私の名前を呼び、手を取って座席まで誘導してくれた。うまくコミュニケーションをとれるか心配していただけに彼女の行動はとても嬉しかったし、これが授業で聞いていた韓国人のスキンシップの文化かと実感することもできた。彼女とは多くの時間を共に過ごし、語らい、まるで昔からの友人であったかのように感じられるほど親交を深められた。日本のアイドルの話で盛り上がり、大学生活やアルバイトの話などの他愛のない会話をしたりするうちに、私達のグループの親密度は増していき、発表に向けた準備でも意見を聞かせるのではなく、一人ひとりの意見の良いところを組み合わせることで協調的に作業を進めていくことができた。交流を深めていくにつれて、私は彼女達が韓国人であるという意識が薄れていく気がした。同じ一人の女性、同世代の子として彼女達を見つめるようになった。もちろん、彼女達が日本語が堪能で日本に興味があるというのがそう思う一番大きな理由かもしれないが、彼女達も私達と同じようなことに関心を持ったり悩んだりしているのだということが強く感じられて、国境を越えた親近感がそこにはあった。

最後にこんなエピソードを紹介したい。私とデウォンさんが日本の地域について話していた時、私は「日本海」という単語を使ったが、韓国では「東海(トンヘ)」と呼ぶと初めて知った。それまで当たり前だと思っていた「日本海」という表現がいかに日本人目線で一方的解釈であったかと痛感した。だが、だからといって「東海」と言うかと聞かれたら答えに迷う。「竹島/独島」の問題と同様に、日韓が抱える問題は多い。それらに対する解決策は簡単には見つからないが、ここでも対話と交流が肝心であると考えている。メディアからの情報だけで安易に自分の意見が左右されるのではなく、実際に交流し対話することで、たとえ日韓の間に問題が生じようとも心では繋がっていると私達セミナー参加者が経験を以て証明していきたい。

見て、聞いて、話して、感じる日韓の文化的違い

船木円香

今回の実習は私にとって初めての海外セミナーだったこともあり、最初は期待以上に不安が大きかった。しかし、実際に韓国で同徳女子大学の学生や先生、ホームステイ先の家族と交流した8日間はとても短く感じられ、充実した日々を送ることができた。「日韓の女性意識」グループ（通称：꽃 hana）の活動にしても、ホームステイ先の人達との生活の中でも意見の衝突やコミュニケーションにおける言語以外の摩擦を感じることはなかった。一方で、彼女たちの私たち日本人学生に対する接し方や日常における韓国人同士の会話を通じて、日本人とは異なる人間関係の構築や習慣を直に感じる事ができた。

まず、今回のセミナーで一緒に行動したグループの韓国人メンバーとの交流を振り返ってみる。朝から晩まで8日間共に過ごした中で、彼女たちの積極性は日本人学生にとって刺激的であった。事前の遠隔交流では互いに敬語を使い、遠慮がちだったのを覚えている。だが、セミナーが始まってからは自分のペア以外の日本人学生にも話しかけてくれ、様々な話題で盛り上がった。森山先生の「言語と文化」の授業で学んだように韓国人学生は友人同士で気軽に腕を組んだり、飲み物をシェアするのでセミナー中は姉妹がたくさんできたような気分になった。日本人メンバーも決して消極的ではなかったが、韓国人メンバーとの交流を通じて次第に新たな一面を見せていった人が多かったと私は思う。勉強や趣味、家族、恋愛など多様な話題で相手のことを知りたいと思うと同時に、自己開示の内容が深い韓国人のコミュニケーションは日本人に発言の積極性を与えると感じた。

次に、韓国人学生と一緒に食事に行った際に見た彼女たちの店員との接し方も印象的だった。店員に関しては日本のような笑顔や丁寧な接客・対応を見る機会は少なかったが、気さくに料理の説明をしてくれて他人行儀な雰囲気がなく、居心地がよかった。

日本人と韓国人は似ているようで似ていないということは認識していたが、今回韓国に行って買い物をしたり、韓国の人々と生活するという経験を通じて日本では気づけなかった日韓の文化的（接し方）違いを見つけた。異文化は机上の学問のみならず、自身の体験も含めて理解を深めるものであることを実感した。日韓の関係は政治的・歴史的側面において暗い部分もあるかもしれないが、文化的交流は今後も良好であってほしいし、私たち学生が率先して関係維持に努めていきたい。

最後に今回のセミナーでお世話になった先生方、ホームステイ先の家族、そして韓国の学生の皆さんに感謝の気持ちを伝えたい。素敵な8日間でした。ありがとうございました。

違って当然だし、その違いが この世界をこんなに魅力的にしてくれてること

藤田佳那

韓国と日本はけっこう違うのだな。

これが事前学習やメディアからの情報などを聞いていて、私が感じていたことだった。例えばご飯を食べるときのマナーをはじめ「韓国のカップルは町中でも堂々といちやいちゃしている」といったような話はよく聞いていたからだ。が、実際に行ってみて予想外にそのような場面に出会う機会はあまりなかったし、あからさまに「違う」、と感じたことは殆どなかったのである。

しかし合宿所でディスカッションをしていてこれはけっこうな違いかもしれない、と興味深かったのは「日本人は過去の事は過去の事と考えるけれど韓国人は過去のことも、自分の仲間におこったことだから自分のことのように感じる」という価値観の違いについてだった。

もちろん全ての人がそうというわけではなくあくまで傾向としての話だが、おそらく人間関係を築いてゆく中で考え方や価値観の違いが引き起こす摩擦というのは他のどんな要因よりも大きい溝を生むのではないかと思う。

ただ、価値観というのはどれが正しい、正しくないとは位置づけるものでは決してないし、生まれたときから長い時間をかけて作り上げられたものであるため簡単に換えられるものでもない。

そうならば、違った価値観を持っていてもそれを乗り越えて手を取りあう為に私たちができることは、やはり受け入れあい理解しあうことしかないのだろう。押し付けるでも、つぶねるでもなく、互いを知り、それを受け容れること。

自分の価値観が絶対的であると信じ込み他の価値観をただ不快に感じたり排除しようとするのは傲慢でしかない。韓国と日本に限らず、人はお互いに文化や育った環境が違うため、価値観が大なり小なり異なるのは当然であり、だからこそ自分のもつ価値観に固執しすぎず、様々な人の価値観をも受け入れることで、より多くの視点から物事を見る事ができるようになるのではないだろうか。

セミナーで領土の話をした時にもこうした価値観について言い合ったが、まず価値観が違うのだという事実に変更して気づき、それを受け入れて尚解決への糸口を見つけなければならぬのだろう。

ただ受け容れるといってもメディアなどでみるのと実際の価値観や文化というのはやはり多少の誤差があり、また実際にみたこと、触れた事のない未知の異文化を受け容れるというのはなるほど困難なことである。その点、今回私たちは実際にこの身で異文化に触れ、そこに住まう人々と触れ合ったことで、受け容れやすい状況におかれたことが良かったのだと思う。

自分が今回の合宿で気をつかったのは、「郷に入っては郷に従え」という言葉通り、できるだけ韓国の子たちがしているようにする、自分を相手に合わせる努力をすることに尽きたといえる。わたしはそれが結局は一番大事なことなのかなと思うし、(流されるのではなく、あくまで違いを受け容れた上でそれを尊重するという意味で)これが今回のセミナーにおいて文化の違いに煩わされることがほとんどなかった理由なのかなと思う。

大人や今の世界に惑わされずに、自分の目でみて、聞いて、感じたことを自分の価値観として確立して、そしていつも他人を尊重できれば、この世界もきっと変わるんじゃないかな。

異文化交流の場で学んだこと

林沙樹

韓国でのホームステイや合宿を通して、韓国人の「情」というものを実感することができた。出発前に想像していたものは、家族間の絆や、目上の人への敬いの気持ちであったが、実際には、会ったばかりの私と韓国の学生の間や、ホストファミリーと私の間にもそれを感じることができた。加えて、気持ちの伝え方も日韓とでは少し違うように感じた。

情から生まれる行動には、日本人の感覚では少し戸惑うものもあった。例えばホストマザーは食事の時、終始横に立ってキムチ等を私のお皿によそってくれ、ホストファザーは、私が部屋の戸を閉めて寝る用意をしている所に入ってきて、布団を敷いたり扇風機をつけたりしてくれた。日本人は、出会ってすぐの人とは距離を置きがちで、また、そっとしておくことを気遣いとすることも多い。そちらに慣れている私はホストファミリーの行動に少し戸惑いを覚えたものの、これこそが情からくる優しさなのだと、事前に得た知識から冷静に理解することができ、私にもそういった感情を持ってくれたことに温かさを感じた。

また、気持ちの伝え方の違いも、交流を通して実感した。特に相手に物を贈る場面ではその違いが顕著であったように感じた。日本からのお土産を渡す際、私は「欲しいものかわからないけど、もしよかったら使って」と口にした。一方で、韓国の学生からプレゼントを受け取った際には、「あなたの為に選んだから、使う度に私の事を思い出してね」と言われた。もちろん日本人にも相手を思って選んだ物を使って欲しい思いはあるが、直接口に出すことはあまりない。直接的で熱い韓国の学生の言葉を聞いて、私は内心驚いたのだが、冷静になって考えると、強い情の気持ちがあるという前提を共有している韓国の方々にとっては、その気持ちを率直に伝えることは不自然なことではないのかもしれない。

文化や感覚の違いから生じる違和感は、理解できなければ相手への嫌な印象に繋がる。例えば今回わたしが感じた、日本人より遥かに熱い韓国人の情やそれに伴う言動は、ともすれば、「うっとおしい」「重い」という感情にも繋がりがかねない。しかし今回私は、むしろ嬉しさを感じることができた。その理由としてはまず、事前に勉強した知識により、差異に直面しても冷静に受け止めることができたことが挙げられる。さらに、自分の気持ちを相手に理解して貰おうと努めることが大切だと、今回の実習で気付いた。「郷に入っては郷に従え」という言葉もあるように、自分の入った先の文化を受け入れることが重要なのは言うまでもないが、しかしそれだけではストレスが生じ、結果的に関係が上手くいかないこともある。ホストファミリーの親切は非常に嬉しいものであったが、「今日は疲れたから部屋で休みたい」とお願いしたら、理解して貰えた。相手の文化を受け入れることと、自文化を全て抑えることは違う。広く他の文化を受け入れてその良さを感じつつ、自分の気持ちもきちんと伝えることが、お互いに気持ちの良い交流を続ける鍵であると感じた。

知り、認めることの大切さ

小林詩織

私の中でのこの日韓交流セミナーで最も得られたと思うことは、異文化交流において相互の文化を知り、許容し、理解に近づけることの大切さを学んだことだ。短いようで長かった濃密な一週間であったが、中でも最もよく覚えているのが一番初めの歓迎会での食事のことだ。ポジティブな感情よりも、ネガティブ、とくに羞恥に近い感情であったために強く心に残っているのだと思う。食事をとる際、日本ではお茶碗を手を持つことが良しとされており、持たないで食べると行儀が悪い。逆に韓国ではお茶碗を手を持つと意地が汚く見えるため、置いて食べるべきだとされている。事前学習として、韓国側の文化や歴史を簡単に学んでいたが、それは表層の知識でしかなかった。相手側である異国の地で、異文化の食事を、異文化の人々と一緒に食べるのに対し、私は自国の文化の礼儀のまま振る舞ってしまった。はっと気づいてその時はお茶碗を置いてみたものの、その後の生活では自文化のやり方で通してしまっただけが多いように思える。今回の場合は、韓国側が快く迎えてくれて、また日本語も使用してくれて、日本にも理解のある人々だったから、気に留められてはいなかったかもしれない。だが、こういった用意された機会ではなく、自然に近い状態であったら、多少の不快感を発生させてしまっただろう。反省の一つとして、以上のように私は異国の客人という態度を堂々とやってしまったのではないかということが挙げられる。韓国側のおもてなしに寄り掛かっていたのだ。これから出会うだろう異なる文化に生きる人々は日本文化を知っていて、それを許してくれるとは限らない。まず、知ることが本当に大事だと思う。そこから、理解に至らずとも、存在を許すことにつながれると、良好な関わり合いが持てるはずだ。率直に、嫌いな人もこの広い世の中には出てくるだろうが、嫌いな人を愛するということはその存在を許すことだ。自分だけが、自分の文化だけがこの世界にあるわけではなく、既にグローバルな環境になっているのだから、理解しがたい存在に出会う可能性は非常に高い。そこで、相手を知り、認められることができれば、快適によりよく生きていける。おまけに理解までできたら、より深く、つながりを得て生きていける。自分の世界を自ら狭めるようなことはすべきではない。内集団のみで暮らすことは一見楽かもしれないが、外との軋轢に満ちた、発展性のないものに違いない。せっかくこの時代に生きるのだから、広く人類の可能性を知り、自分の可能性も伸ばしていくことができたのならこんなに素敵なことはないと思った。

また、私が実際に韓国の学生に言われたことは、「怖い人だと思った」ということだ。それでなかなか話せない、話しぶりかと思っただろう。今まで生きてきてそういった第一印象をもたれることは多かったのも、私の問題であり、人付き合いの上での課題の一つだと思う。コミュニケーションスキルの基盤も大事であると実感した。開いた状態であるべく相手に向かうこと。自己の心身の状態に左右されてしまうが、コントロールできる人間でありたい。

日韓交流における学びと今後の可能性

遠藤美里

事前の遠隔交流と現地での交流のどちらにおいても、私たち日本側は、韓国側の積極性とホスピタリティに驚かされ続けた。グループのテーマを決められた時から、韓国側は積極的にこちらとコンタクトを取ろうとしてくれた。そして、韓国側の学生が日本語と日本の文化について大変詳しく、日本人的に接しようとしてくれたこともあって、コミュニケーションを容易にとることができた。韓国と日本のコミュニケーション方法の違いをいつも埋めるよう努力してくれた韓国側には、本当に感謝したいと思う。また、つねに日本側を気遣い、家族のように大切にしてくれる様子は、いつか森山先生がおっしゃっていた日本人にはない「韓国人の熱さ」であると実感したし、大変感動した。また韓国側の熱心さには、日本側は只々日頃の自分たちを反省させられるばかりであった。加えて、今回の日韓セミナーの中で、共同プレゼンテーション作りは私の中で最も大きな学びとなった。それは、限られた時間のなかでプレゼンテーションを作らねばならない状況において、初めて言語の壁を感じられたからである。このセミナーは、韓国側の日本語力に頼りながら進められていたこともあり、日本側は相手が外国語を話していることをあまり意識しなくなってしまうていた。そのため、話し合いの中において日本が主導権を握り、韓国側が日本側の言いたいことをどれだけ理解しているかという点について、配慮に欠けた場面があった。この問題は、日本人側が、自分たちがもし外国語で話をする立場に立ったらどうかという視点を持つように心がけることで改善された。これは、それまで韓国に頼り切って韓国での生活をしていた私たちが、初めて韓国側に一歩近づいた瞬間で合ったように思う。

正直、このセミナーに参加するまでに韓国に特別な興味を持ったことはなかった。が、しかし、今回日韓セミナーに参加したことで韓国が大好きになったし、大切な友達のように身近に感じられる。これまでも近頃と同様に日韓関係が悪化することは多々あったが、友達の国との関係が悪化すると考えると、これまでのように無関心ではいられないし、大変悲しいことのように思う。だが、今話題となっている領土問題を含め、互いに解決に向かっていない際どい問題を日韓の学生で話し合ったという経験は、今後これらの問題を解決するに向けたひとつの希望となったように思う。また、はじめは、「東アジアの平和のために」というテーマの大きさに実感を持つことができなかったが、このような若者の交流が本当に未来を切り開いていくのだと今は強く実感している。

韓国の電車を通して学んだこと

矢萩まりこ

私にとって今回の日韓セミナーは初めて訪れる韓国であると同時に初めてのホームステイであった為、行く前には色々と不安を感じていた。しかし、実際に行ってみるとただ日本語が韓国語になっているだけで町並みにも人々の様子にもほとんど変わりがなく感じ、本当に私たちは海外に来ているのか？と感じるほどで、旅行の最終日には1人で買い物に行くなど、旅行前にはどんな事があるのだろうかと思っていた自分の不安がおかしい程に韓国を満喫していた。しかし一方で日本では理解できない文化に出くわす事もあった。その中でも最も印象に残っていることは、私たちが電車に乗った際に起きた出来事である。

私たちがその日の実習を終えてホームステイ先に帰ろうと電車に乗った時の事だが、私の目の前の座席が空いた際に、ちょうど電車に入ってきたばかりの中年の女性が突然「割り込んで」席に座ってきたことがあった。事前の授業でそういうこともあると聞いてはいた事の1つだったのだが、やはり日本ではあまり無い出来事であったため驚き、どうして割り込んでくるのだろうか？とその女性に多少のいらだちを感じた。だがその直後に、女性から「その荷物持つわよ？」といったような事を尋ねられ、再び驚くと同時にいらだつ以上に納得した。確かに私が自分の母親と一緒に電車に乗った時には座席が1つ空けばその席は母親に譲り、自分の荷物は預けて前に立っているだろう。親子でも全く会話もなしに突然座る訳ではないが、韓国では自分の家族だけではなく全く知らない他人同士でも家族のようにする事が当たり前だということをこの出来事で思い知った。私たち日本人も年長者を敬う事はするが、それを自分の親のように他人にもする事ができるかということそうではない。事前の学習で韓国では他人同士の関係が日本よりも密接であるという事を学んだが、この電車内での経験を通してどういう事なのか初めて理解できたと思う。

今回のセミナーに参加して、私は自分の国にこもっていても本当には理解できていないことが有るということを実感した。8日間の短い韓国滞在では韓国の文化を理解できたとは決して言えないが、それでも文化の一端に触れる事ができたことはとても嬉しく思える。現在、日韓の間では領土問題によって今まで以上に激しい対立が起きている。しかしこの対立をただ国と国の問題として扱うのではなく、私たち一人一人が今回のセミナーのように互いに交流し話し合うことで相手の文化の本質を少しでも理解し、いがみ合うのではなく穏やかに話し合える関係になれば良いと思っている。

韓国の興味と受け入れ

永田 祥

私は今回のセミナーで初めて韓国に行った。今まで韓国に行ったことがない、というのは正直セミナーへの不安材料の 1 つになっていたが、初めてだったからこそすべてを新鮮に受け止めることができた点も多くあったように感じる。

様々なことを感じ、考えた 8 日間となったが、私が特に深く考えさせられたのは、韓国では知らないこと、異文化に強く興味を持ち、そしてそれを受け入れているように感じる場面が随所にあったことだ。私はあまり人に話しかけるのが得意でなく、ホームステイに強い不安を抱いていたのだが、ホストスチューデントのアクティブさがそれを払拭してくれた。日本語科だから日本に興味を強く持っているのは当たり前なのかもしれないが、ホストスチューデントは私をかなりの質問攻めにしてくれた。「日本ではどうなの?」「この歌手知ってる?」…日本のような初対面の会話、というものをすっとばしていた。最初は怒涛の会話に戸惑ったのだが、初対面で会話が違ふ、というのは授業で聞いていたのでそういうものだと受け止められたし、何より相手が興味をもって聞いているというのがとても伝わってきたので、次第に質問攻めにもかまえて対応できていったのでは、と感じる。

そしてその知らないことや異文化の受容は街なかで感じられた。電車に乗ると、主要な駅では放送が日本語を含む 4 か国語であった。また、セミナー中はほぼすべて日本語を使っていたのだが、街なかで他言語が飛び交っていても周りの人々は私たちを奇異、好奇の目で見なかった。これらはどうも当たり前のことらしく、私が質問をしても「そのどこが疑問なのか」という顔をされた。日本では英語の放送すらついていない電車も多く、また街で日本語以外の言語を話していると周りの人の視線はそちらに向けられやすい。初めは自文化、多文化共に執着心が低いからこのようになるのかと考えたが、自文化への愛着が韓国の人々は総じて低いとはどうも言い難い。初めのうちはこの多文化状態が学校などの限られた空間でなく、街という場で起こっていることに非常に驚いていた。そのうちに、これは興味の低さからではなく、受容性の高さ、と言った方が望ましいのだと気づいた。韓国だけでなく、他の様々な文化が韓国に溢れていることに人々は思っているより不快に感じておらず、多文化を受け入れる姿勢が高いからこのような多文化化が起こっているのでは、と考えた。そのような多文化の中にいるから興味も持つようになるし、興味のある人が増えてゆくから多文化化も進む、という状態になっているのだと感じた。ただこの多文化化の中で誰かが置いていかれることのないように気を付ける必要はあるとも感じた。

私は海外渡航経験がほとんどないこととも相まって、今回のセミナーは本当に充実したものであった。交流すればそれでいい、というものではないだろうが、これからより広く目を向けて様々な課題に取り組んでいきたい。

日韓のコミュニケーションにおけるマナーについて

岩田明子

今回のセミナーで私は初めて韓国へ行き、韓国人と生活を共にした。一日中韓国人と共に過ごし、コミュニケーションをとる中で、私は主にホームステイをさせてもらったチームメイトと「日本はこうだね、韓国はこうだけど」といった話をたくさんした。今回のレポートではその話のなかで印象的だったものを紹介したいと思う。

「日本人はNOをハッキリ言わないよね、遠慮しないでいらないならいらないって言えばいいのに。」これは、彼女の家でアッパとオンマも一緒に晩酌をしていて、そろそろお風呂に入るとかそういう話をして立ち上がったときに「もっと食べるか？」とアッパに言われ、私が曖昧に笑って「いやいやもう…」とジェスチャーで伝えた後に彼女に言われた言葉である。日本人の私からすれば大分年長者のアッパに「もういりません。」とハッキリ言うのはなんとなく腰がひけることであるし、失礼にあたらないのだろうかと思うところなのだが、彼女曰くハッキリしないと片づけていいのかいけないのかわからないし遠慮する必要はないということであった。

「日本人の『なんでもいいよ』は難しいよ〜。」コミュニケーションの違いを話し合っていたときに出た話題である。例えば、友達同士でご飯を食べようという話になったとき。日本人はとにかく「なんでもいい」と言いがちである。彼女に言われて私も納得した。私もよく言う自分でも思う。しかし、その「なんでもいい」は真の意味での「なんでもいい」ではなく、「どちらかといえば食べたいもの」とか、「主張しないけれど食べたいもの」があるはずで、この「食べたいもの」を探り当てないといけないのが本当に難しいということだった。もちろん、そういう場合もあるだろう。そう言った日本人の心理としては「コレ！！と私が主張して、食べたくない人がいたら悪いかな」「食べたいけど、まあ主張するほどでもないかな」、そして「特にこれといった具体的なものは思いつかない」というものではないかと思う。韓国ではどういう話し合いになるのかを尋ねると、まずはみんな何かしらの食べたいものを挙げる。そこから、例えば美味しい店を知っているから食べに行こう！とかそういうプッシュをするという。そこに理由があればみんな納得するし、選択肢が誰からも出ないと進まないじゃないか、とのこと。感心したと同時に、「議論する」という姿勢はこういうところから生まれるのだと思った。

違いを確認するなかで、彼女は「事前に知っていたから『やっぱりそうなんだ』と思うくらい」と言っていた。良い悪いという観点からではなく、文化の差異を話し合えるとても貴重な体験であった。国家間ではこえられない壁はあるにせよ、文化という側面では友情を深めることは可能である。そのことを確認させてくれた彼女、また他のチームメイトに感謝したい。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

石川しほみ

私が所属するチンダルレグループは、授業外での事前の遠隔交流はスカイプを使用して行った。スカイプはチャット、カメラ無しの通話(いわゆる電話)、お互いの顔を見て会話することができるビデオ通話。今回、私たちが選んだのはお互いの顔が見える通話方法である。何故この方法を選んだのか。チャットやFacebook、Lineといった顔を映さない方法も数々あり、日本側はなるべく顔を映さない方法がいいなと考えていた。しかし韓国側はビデオ通話のほうが良いという意見で、今回は韓国側の意向を汲むことにしたのである。

正直始めのうちは、「顔なんて見えなくてもいいのにな」「恥ずかしいな」という気持ちを持っていて、なぜビデオ通話がいいのか理由が全くわからなかった。普段友人とスカイプするときも、チャットやビデオ無しの通話ばかりであった。いざ、ビデオ通話をするとなっても、やはり恥ずかしい気持ちは消えなかった。相手の顔が見えると「おお！」と感動することもあったが、それと同時に自分も相手に見えているのか、変な仕草はできないなと思ったり、無駄に緊張してしまうこともあった。もちろん学校などで人と話すときは、顔と顔を向い合せて喋っていて、それに対しては何も思わないのだが、なぜか離れた場所にいる人と顔を向い合せて喋ることは普段とは違った気持ちを生じさせたのである。しかし折角の国際交流の機会なので、なるべく相手のことを知るのも大切である。この顔を見たいという韓国側の思いが授業でよく森山先生がおっしゃっていた韓国人の「熱さ」なのであろう。

この日韓の考えの違いをどのように受け入れていくか。それはあまり難しいことではなかった。確かに恥ずかしいという気持ちは持っていたが、やはり回数を重ねていくうちにその思いも薄れていったし、また大勢で話しているということもあって、顔が見えたほうが、誰がどのように話しているかを正確に知ることができる。声だけだと、一瞬誰が喋っているのかわからなくなってしまうだろう。また、声だけで話すより、顔を見合って話すことで直接会う前から親しみを覚えることができ、実際に会ったときに初めて会ったというよりも久しぶりに会ったというような感覚にもなった。会う前からもうすでに私たちは友達なのだ。これらの利点もあって、今回の事前学習で顔も合わせながら話すことの大切さを学ぶことができた。声だけのときは寂しささえ感じるほどであった。

日常生活において、人と距離を置いて接しがちであったが、韓日セミナーの事前学習での顔と顔を向かい合わせたコミュニケーション、実際に会ったのコミュニケーションを通して、日本とは違う近い距離でのコミュニケーションも素敵なものだと感じることができて、とても良い体験をすることができた。今後国際交流する機会があったのなら、今回のように相手に合わせ、相手のことを知り、良い収穫を得ていきたいと思う。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

齋藤芽依

今回のセミナーを通じて、私は日韓には「自己主張のスタイル」に大きな違いがあると感じた。私達「日韓の女性意識チーム」は、事前打ち合わせを全員が参加出来るTV電話で行っており、実際にカメラの向こうにいる相手と対話しながら話し合いを進めてきた。そのためTV電話し始めて、すぐに自己主張の違いを感じた。

日本と違う点がいくつかあった。まず、自分たちの意見をはっきりと主張する点だ。次に、相手と意見が異なっても恐れずにそれを伝える点。更に比較的に率直な言葉を使って、意見を表明する点である。例えば、日本側に対しても韓国側内部のお互いに対しても、それぞれが自分の意見を示す様子がカメラを通じてわかった。また日本だと、相手の意見に異を唱える時、非常に遠まわしに気を使いながら話す。しかし韓国側からは「それに意味が感じられない」などストレートな表現が多かった。

授業中の森山先生のお話や、私が韓国人の友人と交流した経験から、ある程度こうなることは予想していたが、実際自分たちが違うスタイルと付き合う事は難しかった。私自身はリーダーとしての立場もあったので、日本側の意見を代表する形で積極的な発言を心掛けた。しかし日本チーム全体で見れば、日本的な自己主張のスタイルから抜け出せておらず、意見を持っているのにそれを上手く表現できていなかった。また韓国側は、私たちがあまり明確な意見を持っていないような印象を受けたかもしれない。

日本側もっと意見を表明出来るように、私は定期的に他のメンバーに意見を促したり、日本側内部だけで意見交換する時間をTV会議の中に設けるようにした。また作業を分担する事で、自分の担当箇所に対しては何か意見しやすくなると考えた。そうする事で、徐々に日本側の発言の回数も増え、私自身も意見を言うこと自体の重要性を知り、議論していく中で妥協点を見つけていく方法の楽しさも知った。

確かに日本の自己主張スタイルは私たちにとって居心地が良い。しかし最近は、グローバル社会の影響や、日本自体の閉塞感などから、今までの自己主張の弱さが反省されるようになった。異なる文化背景を持った人と充実した議論を行うためにも、日本の自己主張スタイルから脱皮する必要があるだろう。その時、はっきりと意見を言う韓国のスタイルは見習うべき点が多かった。

最後に、この点以外にも私は日韓の様々な違いを感じ、また韓国の友人から多くの事を学ばせてもらった。私たちが韓国の友人から刺激を受けたように、私たちと交流する事で彼女たちも何か学んだ点があれば、私も非常に嬉しく思う。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

渡邊真梨

私がこのセミナーを通して気づいた日韓のコミュニケーションスタイルの違いは、韓国人のスキンシップの多さです。事前学習の時点で、韓国では女性同士が手をつないで歩いたりカップルが肩を組んで歩いたりすることはごく当たり前のことであるという知識は得ていたのですが、実際に韓国に行ってみるとそれを強く感じさせられました。セミナーの韓国側の学生たちも日本人同士と比べるとスキンシップがとても多いなと感じました。日本ではあまり見かけることのない光景だったので最初は驚きましたが、その違いは日韓の間の国民性の違いが大きく影響しているのではないかと考えました。日本人は自分の感情を正直に表現することを避け、あいまいだ、とよく言われます。一方で韓国人は、嫌なものは嫌、きちんと正直に自分の考えていることや思っていることを表現することが好まれると言われています。そんな自分の気持ちをはっきりと伝える韓国人たちの国民性ゆえに、自分の好意や愛情をスキンシップという形を通して相手に対して表現しているのではないかと感じました。このセミナーを通して、韓国人の方々と接する機会をたくさん持てたのですが、スキンシップに限らず韓国人は相手に対する好意や愛情をためらうことなく表現している、といった印象を受けました。それは、セミナーの韓国側の学生たちの行動だけに限らず、ホームステイの家の人たちの行動からも感じ取ることができました。自分の好意や愛情といった感情を素直に相手に伝えたり示したりといった行為は、日本人にとってはとても恥ずかしいもののように感じられて、正直に表現できる人というのは本当に少ないと思います。その違いのせいでお互いがお互いに対して不快な気持ちを持ってしまうこともあるかもしれません。韓国人は、自分の気持ちをはっきり表現しない日本人にイライラさせられたり、逆に日本人ははっきり嫌だ！と言われたりすることで心を痛めることもあるかもしれません。しかし、このセミナーを通して感じたことは、そのような文化的な違いを認めながらも仲良く付き合っていくことができるということです。日本と韓国、同じアジアに属する近隣の国として、お互いの違いを認め合って協調していくことができれば今後のアジアのさらなる発展を期待していくことができるのではないかと感じました。そのためにこのようなセミナーを通して、まずは個人レベルでの多文化理解というものが必要不可欠になるのだと感じました。今回このセミナーを通して実感することができてよかったです。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

溝部久江

今回の実習を通してのコミュニケーションは、日本人は母語である日本語、韓国人は第二外国語である日本語を話し、もてなしてくれているという状況であったため、コミュニケーションスタイルと言っても特別な例であると思う。今回はグループ内でプレゼンの話し合いを進める上でのコミュニケーションについてと、日常会話におけるコミュニケーションについてそれぞれ分けて述べる。

まず、グループ内でのプレゼンの話し合いを進める上でのコミュニケーションについて。事前学習での遠隔コミュニケーションの時点では、日本側のメンバーに、韓国側は母語ではない日本語を喋ってくれているという意識があまりにも欠如していたように思う。ゆえに、調査したい内容や、発表の流れを話し合う場面で双方が望む方向性を理解し合うことができず、話し合いが行き詰まることが多々あった。その点において日本側の意識が変わったのは、セミナー中に日本人学生の一人が「日本側は自分が英語でプレゼンをする状況だとしたらどうかを考えながら話そう」と提案してからだ。韓国側のメンバーは、日常会話では支障なく流ちょうに会話をする事ができるものの、プレゼン作成にあたる話し合いとなるとどうしても難しい単語が増え、理解できないままに話し合いがすすんでしまう。そこで私たち日本人側は、極力難しい単語を使わないこと、理解できたか確認しながら作業を進めること、そして韓国の学生と日本の学生が交互に円状に並んで話し合いを進めることにした。その結果として、より韓国側を巻き込んだ話し合いにすることができたと思う。ただ、プレゼン準備までの時間がかなり限られていたため、それでも日本側主導のプレゼン、意見となってしまった感は否めず、それは反省点である。

次に、日常会話におけるコミュニケーションについて。私が最も強く感じたことは、韓国側のメンバー、またホームステイでお世話になった家族も含め、韓国の人々は日本に比べてもてなしの精神が深いということだ。また、おごる、おごられるといった気前のいい関係を好むようにも感じた。その中で、感謝の気持ちを「감사합니다」でしか伝えられないことに歯がゆさを感じ、もっと円滑に進めるためにも、より韓国語を、少なくとも英語の力をつけておくべきだったというのが反省だ。

現在、独島／竹島の問題をめぐる、日韓関係は悪化している。その中で、考えなしな「韓国人は一だ」と言ったことを言う人もいるだろう。だがしかし、韓日実習での体験を忘れず、自分たち自身が韓日の友好の架け橋であれたらと思う。

おもてなしを乗り越える

林千恵

日韓セミナーを通して、韓国の学生と交流をした中で感じた、一番大きな文化の違いは、韓国人のおもてなし精神の大きさである。実際に自分が韓国に行って、韓国の学生と交流した日韓セミナーを思い返して一番印象強く残っている、韓国人のおもてなし精神について今回は述べようと思う。

日韓セミナーが始まる前に、テレビ会議や FACEBOOK、skype などを通して同じグループの韓国側の学生と連絡を取り合うようになった。(実際に両国の学生が顔を合わせる前の、この事前学習ももちろんセミナーの一環ではあると思うが、ここでは実際のホームステイや合宿を行った期間をセミナーと呼ぶことにする。)私たちのグループは歴史教育がテーマで、事前にテーマについて話し合うなかでは、もちろん皆真剣に議論を重ねていったし、時間も限られていたのであまりテーマ以外のことについては話をすることができなかった。また、時間効率のことを考慮して SNS を使用しての会話はほとんどがリーダー同士で行っていたため、その中で文化の違いを感じることは難しかった。

しかし、実際に日本側が韓国へ足を運び、韓国側の学生と面会してみるとすぐに文化の違いを感じるようになった。韓国人がよくお節介なまでにおもてなしをするというのは、事前に先生からも伺っていたことではあったが、到着日に早速ホームステイ先へと向かうなかで、何の迷いもなく荷物を運んでくれたことに、韓国人のおもてなし精神が垣間見えた。最初は初めて会うし、到着したばかりだから気合が入っているだけなのかな、とも思ったが、その思いはホームステイ先で一蹴されることとなった。あとで話すと、日本側のグループのメンバーも皆同じような待遇を受けたようなのだが、とにかく韓国の家族の方はあれこれと気にかけてくれるし、出てくる食事も大変立派なもので驚いた。朝から普段夕食でも食べないような量と質の料理を出してくれたし、実際ホームステイ先で過ごす時間はわずかだったのだが、少しでも不自由のないようにと気配りをしてくれた。その姿勢は韓国側の学生にもみられたし、わざわざ日本から来てくれたのだから、と口々に言っていた。

遠慮の文化が根強い日本人としては、逆にそこまでしてもらうことが重荷になったり、その分何かお返ししなければと思ったりするし、あるいは初対面のときは特にそうだが、相手との距離を慎重にはかろうとするので、正直そういった韓国側の姿勢がストレスに感じることもあった。遠慮がちな日本人であれば、何も言えずにそのまま受け入れてしまうのかもしれないが、私は韓国人が自分の意見をはっきり伝えるという文化を持っていることも知っていたし、日本人ももっと主張する力が必要だと常日頃考えていたこともあり、必要の無いことやこちらの要望も、臆せずはっきり言うことでストレスを溜めないようにした。相手に対して言いたいことを溜めることは、そのまま相手に対する嫌悪感を増すことにもなり、ひいてはちょっとしたことでさえも不快に感じ、偏見や差別、誤解につながる原因となってしまう。もちろん、主張する程度も大切だが、わがままであることと自分の考えをきちんと表現できることは違うし、互いを理解するためには意見を述べないことには始まらない。国籍の違う人と接することで発見できることは本当に多く、そして大切なことだと思うので、これからも積極的にいろいろな価値観や文化に出遭っていきたいと思う。

日韓学生交流セミナーを通して見えた 日韓学生のセルフエスティームに関する比較

陳海茵

私は今回のセミナーで初めて自分の足で韓国の土を踏み、直接韓国人の方と色々な話をし、肌で韓国という国を体感することが出来ました。まず、この貴重な機会を与えてくださった先生方、ホームステイ先のご家族も含め、サポートしてくださった全ての方に感謝の意を表したいです。セミナー全体に渡って、韓国同徳女子大学の学生と一緒にさまざまな共働作業をしてきましたが、その中でも同じテーマについて話し合う際の日本人と韓国人の基本的なスタンスにおける「違い」を垣間見て、とても興味深く感じられました。私たちのチームは竹島/独島問題を切り口として歴史教育の在り方を比較し、その今後を考える取り組みをしましたが、その時私が感じた日本側と韓国側の学生のセルフエスティームの違いをここで考察してみようと思います。

領土問題という非常に複雑かつ敏感な問題を国を超えて討議する際、私たちはどのような心持で臨むべきでしょうか。私は初等教育の段階から日本社会の中で育った自身の経験を踏まえて考えると、日本人学生は自国の歴史を比較的客観的に学んできていて、知識も豊富であるが、どこか当事者意識に欠けるような気がしました。相手の主張に耳を傾けようとする謙虚な姿勢かつ中立的な立場を取ろうとすることは日本側の良いところだが、自分たちの歴史にさえ「外からの傍観者」として向き合ってしまう感じがします。一方、韓国側の学生たちは、これまで自分たちが学んできた自国の歴史を自分自身のルーツとして捉え、盲目的な愛国心とは異なった自尊心を持っていました。更に彼女たちは自国の歴史や文化、考え方に至るまで臆することなく日本語で私たちに伝えてくれました。ここで、私は自分だったら果たして外国語を使って日本のことをどれほど正しく外国人に発信していけるのだろうと考えた時、きっとその力は韓国の学生には劣ると思いました。「Think globally, Act locally」という言葉のように、私はこれから、知っている「つもり」になってしまっていた自文化をもっと見つめ直し、そして更に深く掘り下げた学習と省察を続けていかなければならないと思いました。

国を越えて何かを話し合う時、私たちはどうしても「相手の立場に立ち、相手の主張を理解する」ことこそが最優先事項でありそのために最大の努力をすべきだと考えてしまいがちだったが、韓国側の学生の姿勢を見て「自国の歴史や文化に誇りを持ち、その上で相手のことをも尊重することで、はじめて真に対等な立場での対話が成り立つ」ということを改めて気付かされました。東アジアの平和構築を目指した対話の場において、自己主張を控えがちな日本人も、プライドが高く寛容な姿勢に欠ける中国人も、この点においては韓国を少し見習う必要があるのではないかと個人的に思いました。これは将来、私たちが国際社会で活躍していけるような人間になるために目指すべきことの一つでもある気がしました。

日韓のコミュニケーションの距離感

高橋梨紗

今回の韓国セミナーに参加して一番に感じたのは、韓国の方々は日本人に比べて、友達との距離感が近いということです。私たちが、たった一週間のこのセミナーでこんなにも仲良くなれたのは、韓国側の距離感の近さも理由にあると思います。

私がまず驚いたのは、歓迎会のあとで、韓国の方たちが私のスーツケースを運んでくれ、さらに、喉が渇いているでしょう？（その日はとても蒸し暑かった）と言って、日本人の人数分のペットボトルを買ってくれたことです。とにかく、韓国の方は、何から何まで、私たちが不自由しないように面倒を見てくれ、私はそれにとっても感動しつつも、自分はとてもじゃないけれどもこんなに他人には気遣いは出来ないと感じました。日本人からしたら、相手のことを何から何まで構うのは、鬱陶しがられてしまったり、ありがた迷惑だと感じられてしまうことがあると思います。また、電車やバスの中でも、まだ知り合ったばかりの私に、常に話しかけてくれ、話題に困ることはありませんでした。このように、韓国の方には、人と人との距離が近く、他人が困っていたら出来るだけ助けてあげようという温かさを感じました。

日本人でここまで相手を気遣い、たとえ初対面であっても、手助けをする、というのはあまりないと思います。自分と、家族や恋人、仲の良い友達は気遣いや手助けの対象であっても、知り合いは他人であり、手助けの対象ではないのです。他人には手助けをしない代わりに、相手の行動に干渉はしないし、されたくない、という意識があり、コミュニケーションが表面的になりがちなのではないでしょうか。

私もはじめは、韓国の方たちの気遣いやコミュニケーションの積極性に、「まだ知り合ったばかりなのに…」と戸惑いました。しかし、自分の今までのコミュニケーションの仕方を見つめ直し、他人との間に壁を作りすぎていたのではないかと反省し、彼女たちを見習って、距離感を縮めることによって、戸惑いはすぐに消え、互いに気遣えるこの距離感が心地よくなっていきました。

今回の韓国セミナーでは、韓国の人と人との距離が近いというコミュニケーションスタイルを目の当たりにすることで、今まで当たり前だと思っていた、日本のコミュニケーションのあり方、そして自分のコミュニケーションの仕方を見つめ直すきっかけとなりました。韓国のコミュニケーションスタイルは、私にとっては心地よいものであったので、これからは、表面的なコミュニケーションではなく、思いやりをもってコミュニケーションしていけるよう努力していきたいと思います。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

畠本真澄

3ヶ月強の事前準備と8日間のセミナーを通して私が最も強く感じた日韓のコミュニケーションにおける違いは、人とのつきあい方・態度についてだ。日本では少し前に「空気が読める・読めない」という言葉が流行ったが、それに象徴されているように、日本側は人と接する際に一緒にいる相手の様子を伺う傾向が見られ、コミュニケーションにおいてあまり積極的とはいえない態度であった。しかし、韓国側は事前学習の時期から積極的に交流の機会をはかり、実際にセミナーで対面したときも、始めは緊張していたものの、すぐに慣れて積極的に話かけてくれたように感じた。また、コミュニケーションにおける態度だけに限らず、韓国側は様々なものを友達とシェアする場面も多くみられた。それは例えば食べ物であったり、ドライヤーなどのモノであったりだ。韓国人が友達といろいろなモノをよくシェアするということは、実習の前から先生に聞いていたのであまり戸惑うことはなかったが、サービスエリアで売られている食べ物も大人数で食べられるように量が多かったり爪楊枝がもともと何本もついていたりする場面も見られ、この習慣が若者だけでなく韓国の社会に根付いているものだと実感した。

韓国の積極的な態度や誰に対してもオープンな態度は、発表準備のグループでの話し合いの際にも顕著に見ることができた。日本側はなかなか最初に自分の意見を口にするのではなく、周りの意見を聞いてから自分の意見を言うという態度をとる人が多かったが、韓国側は第二言語で話し合いに参加しているにも関わらず、「聞いて聞いて！」と言わんばかりに自分の意見を積極的に共有しようとしていた。私はこの韓国側の積極的な態度はとても良いものだと思います、日本側が見習うべき点だと感じた。しかし、その一方で日本側の、相手と調和し、受け入れる態度もこの実習で改めて感じることもできた。私たちのチームは今回歴史教育というテーマを担当し、その中でも竹島／独島問題について扱ったため、日韓の間で意見が食い違う場面が何度か見られた。竹島／独島問題は日韓の間でナイーブな問題であり、普段はお互いが意見をぶつけ合うことが難しい問題であると考えられるが、今回私たちのチームでは日韓両側からの意見を共有し、それをチームとして一つにまとめることができた。これは、韓国側の自分の意見をみんなと共有するという積極的な態度と、日本側の相手の意見を受け入れ、相手の意見と自らの意見の間で折り合いをつける態度がバランスよく調和したからのように感じた。

私はこれまで韓国の方と話をする機会をあまり持ったことがなかったので、今回このセミナーでほとんど初めて韓国の方々と交流し、仲良くなることができた。私は少し人見知りなので、このセミナーを楽しみにする一方でうまく交流できるのだろうかという不安も少しあった。しかし、韓国の学生たちは本当に気さくで積極的に話かけてくれ、その後もオープンな態度で接してくれたためこの交流セミナーを本当に楽しむことができた。日本人の相手を受け入れる態度も忘れずに、今回韓国側の人々から学んだ積極的でオープンな態度を見習ってグローバル化する社会で生活していきたいと感じた。

文化の交流と私たちの責任

志田雅美

7泊8日のセミナーは、自分自身の価値観の変化に大きな影響を与えてくれたと感じます。まず、セミナー開始前は、ホームステイでお互いが不快な思いをすることなく過ごせるだろうかということが非常に不安でした。文化や言葉が異なり、その上歴史背景に良好であったとはとても言うことのできない事実があるわけですから、少なからずどちらにも気まずい思いをしなければならないのかと悩んでいました。しかし、それは私の勘違いだったとセミナーを終えて気付きました。ホームステイした3日間、ホームステイ先を提供してくれたヘジンは本当の姉のように感じましたし、ヘジンの両親も日本語で私たちを迎えてくれようとして、非常に感動しました。韓国の中の日本・日本の中の韓国チームは、LINEでの話し合いでは、お互いの主張がいまいちよく分からなくて、はっきり方向性を決められず、韓国側は私たちを鬱陶しいと感じているかもしれないと思っていました。会ってみるとそれは杞憂に過ぎなくて、直接話し合うことで、どういうことを深めていきたいのか分かりあうことができました。また、一日中ずっとご飯のときも寝るときも一緒だったことが、非常に効果的であったと思います。共同生活することで、喜怒哀楽が同時に生まれることを実際に経験しました。おそらく、ディスカッションのときに集まるだけでは友情は芽生えなかったのではないのでしょうか。

私は、このセミナーを終えて、真の国際交流、理解というものが分かりました。今までの私は、「国際交流」や「文化を越えての理解」が、どうしても薄く感じていました。それは、やはり表面だけで留まっていたからだと思います。一緒に生活し、同じ感情を共有することが出来れば、私が感じていた薄っぺらさは消えるということが分かりました。これからの課題は、今回のセミナーのような形の国際交流を、どのようにして頻度を増やし、人々を巻き込むか、ということです。私たちは幸運にも、相手の国に行き、文化に触れ、8日間という長い期間をかけて、交流を行うことができました。しかし、すべての学生がこのような機会を得ることができるわけではありません。そうすると、求められるのは実際に交流してきた人の発信力であり、実際の体験をFacebookなどのSNSで共有することにより臨場感を得られたり、実際に自分も行ってみようという自発性につながる可能性があります。

ソーシャルキャピタルを充実させることは、実生活の質の向上につながると考えます。異なる文化をもつ人々との交流で、自文化だけではない交流ネットワークが構築できれば、より豊かな暮らしに繋がるのです。異文化に対する興味は誰しもが持つものだと思いますが、それをより向上させることは、実際に異文化に触れた人が持つ責任であると考えます。その責任を果たせるように、行動することが今回のセミナーに参加した私たちに求められているのだと思います。

日韓の差異に触れて

岩渕麻里亜

私は今回この日韓セミナーに参加して本当に良かったと思っています。一週間も韓国で韓国の文化に触れ、また韓国の学生と一緒にセミナーをすることができて、あっという間に感じるほど、充実した日々を過ごすことができました。

一週間韓国で過ごして、多くのものを経験することができました。その中でも特に感じたことは、韓国人の他人への思いやりでした。そして、とても世話好きであるとも感じました。私のホームステイ先は社会人の院生の方のお家で、ホームステイの3日間朝と夜しか一緒にいる時間がなかったのですが、そんな短い時間でもホームステイ先の家族の皆さんがとても気を利かせてくれて、毎回毎回とても気を利かせてもらって申し訳ないと思うほど良くしていただきました。

さらに、野外実習や合宿を韓国の同じグループの学生と一緒に過ごしてすごく気を利かせてもらっていると感じました。野外実習では、朝から晩までのスケジュールをみっちり考えてくれたり、ホームステイ期間中の電車の往復では心配してくれてホームステイ先の最寄駅まで韓国の学生がついて来てくれたり、移動する際は日本側を気にしてくれながら移動してくれたりと、すごく尽くしてもらったという気持ちが大きかったです。

このように、一週間多くの韓国人に触れて、やはり韓国人は情が深く、相手に対して尽くしてあげて、そして皆と物や嬉しいことや何でも共有するとういうことを強く感じました。それによってなのか、特に韓国人同士の一体感というのがすごく強いと感じました。こういうことが、私は日本人より韓国人の方がより濃い人間関係を形成しているのかなと思いました。日本では「空気を読む」や「本音と建前」という言葉があるように、人と人にある程度の距離感があったりして、お互い探り合いながら接してしまっって仲良くなるまでに時間がかかったりするのに対して韓国人は早い段階で距離を縮めて仲良くなろうという違いがあると実際に韓国人に接して思いました。このような差異に日本人は最初戸惑ってしまうと思うのですが、私は接し方の違いを事前に知っていたので特に戸惑うことはありませんでしたし、逆にいいなとも思いました。

韓国実習を通して、韓国人の情に触れ感心して、実際に体験していろんな「韓国」を知ることができました。日本と韓国はお隣の国同士で、似ている部分や全然違う部分があり、日本も韓国もいいところがたくさんあると思います。そんなお隣の国同士だからこそ、お互いに良好な関係を私たち学生やこれからを担っていく子供たちで築き上げていければいいなと強く願っています。

食事から異文化理解へ

齊藤成美

「近いからこそ、少しの文化の違いで驚きを覚える」、8日間の実習を終え、この言葉の意味がようやく分かりました。韓国を訪れる前の話し合いでは、発表や打ち上げでの出し物の話ばかりで互いの文化に触れることはあまりなかったように感じていて、意思疎通に若干のずれが起きたのも語学のせいであると考えていました。また、事前の授業で韓国の文化についての講義を受けたものの、韓国と日本の違いは積極性くらいだろう、行ってみれば分かるだろう、と勝手に思っていました。

実際に韓国を訪れて2日目、グループでとった昼食のとき文化の違いを目の当たりにしました。私たちのグループは学校の近くにある冷麺屋さんを訪れました。そこでは2種類の冷麺を適当に注文して分けようということになり、日本でも友人と互いのご飯を味見する程度貰うことがあったので、そんな感じだろうと考えていました。しかし、料理がくると韓国側の学生たちが一皿一皿はさみで冷麺を切りはじめ(韓国では冷麺も食べやすいように切るらしい)、調味料を入れ、さっきまでキムチを食べるのに使っていた箸でそのまま混ぜだしました。そのときの私は驚きに満ちあふれていました。日本では、鍋をするときでさえ取り分けようの箸を使うかわざわざ確認したりするのに…。そういえば、1日目の歓迎会で小鍋のみそ汁が出てきたとき、店員さんにとりわけ用のお碗を頼んだら少し怪訝な顔をされたことを思い出しました。8日間の食事風景を思い出すと、どの場面でも一つの料理をシェアしていたことに気がきます。はじめは戸惑っていた私も、郷に入っては郷に従え精神で、その後の食事から全く気にせずシェアを楽しんでいました。

同じアジアの国の中でも隣国という国だから、相手と自分の国の文化は同じだろうと考えてしまっていたことが、驚きの最もの理由だと考えます。もちろん、同じ感覚を持っていると感じた部分もあります。しかし、相手が自分と全く同じだという考え方で接してしまうと、驚きだけではなく、ショックを受けるということもありえるのです。

実習を通してそれらが『異文化理解』であるということを改めて考えました。また、異文化と感じる原因を理解していないと、相手に対して不満が溜まる一方であるから、自己文化理解を前提に置くことも重要だと学びました。前述した食文化は日常生活の至る所で触れるため、誤解や互いに嫌な思いをさせてしまう機会が頻繁に起きてしまいます。こうしたとき、相手を理解しようとする気持ちでいくということが大事なのだと実感した8日間でした。

韓日のコミュニケーションスタイルの違いと学び

キム・ユリ

今回の韓日大学生国際交流セミナーは私にとって外国人と直接触れ合い、日本語で会話をする初めての機会でもありました。私は日本語専攻ではないので日本語が上手ではなく、会話の経験もないので日本語を話すことに対して不安や心配がたくさんありました。文化的な面の違いはいろいろ知っていたので特に心配はありませんでした。しかし、その違いというものはずっと現れました。

私たちのチームは Facebook や skype でお互いの意見を共有していましたが、テレビ会議になるとその時話したことが違っていたので、私たち韓国側は戸惑いました。お互いの意見の接点を見出すことができなくて韓国側と日本側が同じテーマについて別々に発表準備をする案まで出ました。互いの違いをよく知っていると思っていた私は、こうした状況になったのは自分の観点から相手を見ていたからということに気づきました。ここで見つけた両国のコミュニケーションの違いは、まず韓国ではある意見に対して特に反論や異見がないと暗黙に同意して決まったと考えるのに対し、日本側はそれはまだ決まったことではなく、一つの意見にすぎないと思うということです。そのため韓国側としてはいきなり話が変わる、日本側としては知らないうちに何かが決まって話が進むという状況になっているのです。もう一つは、日本側では個人的に話すときは自分の意見をきちんと述べるが、皆で話すと周りの空気をうかがい、例えそれが自分の意見と違う部分があってもそれを受け入れて自分の意見は出さないということです。韓国側はストレートで積極的なところがあり、日本側に対して最初はもどかしさを感じましたが、日本の先生に日本人は意見を出す場で他人の様子をうかがうところがあるという話を聞いてからはこの状況を理解することができました。そして、みんなで話すときは自分の意見を出すことも重要だが、時には日本側のように相手や周りの状況を考えて自分を自制する姿勢も必要だということを再確認することができました。

今までは文化の意味を周辺環境による衣食住のことを主に考えることが多かったですが、コミュニケーションにもその国の文化が反映されていて違いがあるということを感じることができました。そしてこのセミナーは韓国人には外国語である日本語で行われたため、セミナー期間中 外国語で話す人が感じる文化の差や難点を理解する事ができましたし、韓国側の下手な日本語を真剣に聞いてくれる日本側の姿を見て外国人を対する時の姿勢を学ぶ事もできた貴重な経験でした。

韓日国際交流セミナーを通し学んだ交流の重要性

パク・ジウオン

2012年7月、これまで一番と言えるほど蒸し暑かった夏、私は日本のお茶の水女子大学と私たちの学校が毎年合同で主催している日韓大学生国際交流セミナーに初めて参加しました。そして今回のセミナーを通じて初めて日本の大学生と会って話しながら、「交流」の大切さを学びました。

まず、およそ4ヶ月間週1回のテレビ会議とインスタントメッセージなどを介して一緒にセミナーを準備しました。離れてセミナーを準備したため、お互いの考えが合わないのではないか、コミュニケーションに困難が生じるのではないかなど、いろいろ気になっていました。しかし、仁寺洞であった歓迎会で実際に会ったら、心配していたことが一瞬にして消えました。

今回の国際交流セミナーを準備しながら、何よりも期待していたのは、日本の友達とのホームステイでした。今までホームステイを一度もしたことがなかったので、とてもワクワクしていました。私と一緒に3泊4日間一緒にホームステイをしていたお茶大2年生のマイは互に通じるものが多い人でした。お茶大の学生と初めて会った歓迎会が終わって帰りの電車の中で私たちは沢山の話をしながら親しくなりました。

マイとのホームステイは心配していたこととは違って、とても楽しくて良い思い出をたくさん残すことができました。母はもし食べ物に口に合わなければどうするか、言葉が通じなくて不便な時はどうするかなど、マイのことを心配していたのですが、マイは母が用意した韓国料理もおいしく食べて、毎朝韓国語で挨拶をしていたので、母と父は喜んでいました。私はマイと一緒に過ごす間、自分が長く暮らしている水原のことや韓国の文化について多くのことを知ってもらえたかったです。それで、有名な水原カルビを食べに行ったり、水原華城を見に行ったりしました。水原と韓国の文化について、私は足りない日本語でも頑張ってマイに説明しました。逆にマイを通じて日本の文化についてたくさん学ぶこともできました。

今回のセミナー中、マイとの対話や私たちチームの日本の友達との会話を通じて、韓国と日本に関して多くのことを感じ、学ぶことが出来ました。韓国と日本は、似ているところも多い国ですが、異なる点も多い国であるということです。発表の準備からも学んだように、韓国と日本はまだ多くの問題と深い葛藤を抱えています。そして、その問題と葛藤が続く原因は日本の友達の考えから見つけることができました。韓国と日本は顔付きも、生活習慣や文化も似ているところが本当に多い国です。しかし、非常に細かいところで違いがある国であることが分かりました。みんなとの会話で感じたように、未だに続いている複雑な韓日の歴史を眺める視点が違っているし、お互いに知っている事実も多くのところで異なっていました。私もこのような交流がなかったら、彼女達の考えを知ることも、私たちの考えを伝えることも出来なかったと思います。そういった意味で、今回の国際交流セミナーは、日本に対してもう一度考えてみる事ができる機会となり、未だに葛藤している韓国と日本ですが、このような交流を重ねながら、明るい韓日関係を築くことが出来ればと思います。

初めて会った日本

キム・ジンア

今まで日本については授業や本での知識が全てだった私に、今度のセミナーはとても大切な経験になりました。外国の学生たちに合う機会もなかったのに、その上、何かを調べて発表するということは「ちゃんとして行かなければならない」という負担もありましたが、それ以上に「一緒に何かをする」という期待もあり、胸がわくわくしました。そのためか、セミナー中、特に「人と人の関係」に関していろいろな部分で違いを感じました。

韓国人と日本人の性格について話す時、よく日本に比べて韓国は『情』が強くて比較的距離が近いと言われます。しかし、韓国人にはどこかに見えない距離感があります。それを強く感じたのが「歳」でした。なぜなら、日本の学生達には 割に先輩と後輩との距離は遠く見えなかったからです。普通の韓国人は誰かに初めて会った時、まず「何歳ですか」、あるいは「何年生ですか」などを聞いて、どちらかが年上か年下であればその瞬間から年下の人だけ敬語を使います。しかし、日本の学生達は何歳か（あるいは何年生か）に関わらず、お互いに仲良くなれたと思ったら自然に敬語を使わずに気安く話すのが印象深かったです。これを見て、話の出発点から自分と相手の位置を区分しているという点で、もしかしたら相手に距離を置いているのは意外と韓国の方が強いかもしれないと思いました。

そして、日本人は初めは距離を置くとしても、一度仲良くなるとその距離がとても近くなれると思いました。合宿の歓迎会で初めて会った時には見慣れなくてなかなか言葉さえ交わせなかったのに、短い間にいつの間にかお互いに冗談を言ったり、何かを買ってくれたりするのが長い時間を過ごしてきたように友人のように見えて嬉しかったです。また、韓国人は仲良くなれても「これは言わない方がいいだろう」とか、「こんなことをしたら/言ったら恥ずかしいでしょう」と思ってあきらめる時があるが、日本人は冗談のような形として相手が受けられる範囲でそれを素直に言ってくれるのが印象的でした。

韓国も日本も自分ではよく分かっていないかもしれないが、それぞれの『深い情』が存在しています。ただ、お互いにスタイルが違うだけで、相手に親密さを感じる心も、配慮しようとする心も結局は同じだと思います。このスタイルを認めて、少しずつ理解し合おうとすることから始めれば、いつかきっと私達はずっと仲良くなれると信じます。

個人の感想

ペ・ユンヨン

セミナーの参加を決めてその準備していた頃の私と、今の私はかなり変わっていると思います。最初は新しい分野について準備をすることに対する好奇心もあって、他の国の友達を作ることや話を交わせることに対するときめきから始まったと思います。しかし、セミナーが終わった後は最初の好奇心とときめきは満足感と共に言葉で形容することが出来ない重さへと変わりました。セミナーに参加したすべてのチームがそうだったように、異文化の友達と一緒に共同作業をして、それが無事で誠実に終わったということや、その誠実さと情熱から出した結果で満足感を感じたのだと思います。そして、形容しにくい重さとは、私が今まであまりにも簡単に、そして軽く考えていたグローバル化と異文化への理解というものが自分の中でまだまだ足りないし、決して軽く考えることではないと感じたからです。私のチームのテーマは「歴史教育」でした。韓日の最も葛藤が多い部分であり、いまだにその葛藤が深いので、私は民族主義 (= NATIONALISM) と国家主義について沢山考えるようになりました。

普段私は民族主義、国家主義という話は帝国主義の負のイメージがあり、そのような感情を持たないように努力していたし、今までそういうことをあまり感じないまま生きてきました。しかし、セミナーを通して、民族主義と国家主義についてもう一度考えるようになったのは自らも興味深いと思いました。自分が生まれるずっと前から私のルーツとなった民族や文化の伝統は無視することが難しいことであることを今回実感しました。これは、日本の友達からも感じたものでした。この感情はお互い自分の国の立場だけを固執するという否定的な感情ではなく、このような民族主義と国家主義はある意味当然なことでもあると思いました。それは多くの葛藤が生じる原因であり、またそのことに対して理解出来ないのも、葛藤の原因を正すことは難しいと思いました。私たちは今、技術的なグローバル化を見てワクワクしているが、それを文化や精神的なところへまで無理に適用させようとしているのではないかと思います。技術では既に地球上のすべての国が同時代を生きていくことが可能となり、その時代を共有することが可能になったが、これはただの技術であるだけで精神的なものではないと思います。だからまだ準備出来ていない精神的なところへの理解が足りない状態で、とにかく相手に理解を求めていたので、お互い大変だったのではないかと思います。

民族主義と国家主義がまだ残っていて、それが簡単に人類の歴史から消えないようであれば、私たちは互いにどのように考えて、どのような観点で相手を眺めることができるのか、そしてどのような観点から相手のことを眺めなければならないのかに対することに重荷が残っていると感じました。このような考えも直接経験しなかったら感じるものの出来なかったことなので、意味深い時間だったと思います。そして何よりも、一緒に話を交わし、一緒に遊ぶ時間を過ごしてからは、人間というのは本当にどの民族であれ、そしてどの人種であれ、似ているものだと感じました。それで私が思っていた民族主義、国家主義と、人間の普遍的な共通点がずっと私の心の中に興味深い研究テーマで残り、さらに、これからより多くの経験と思考をしていこうと思うようになったセミナーだったと思います。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

ユ・ヨンジ

今回の国際交流セミナーは日本語を専攻している私にはいつまでも忘れられない思い出、さらにはもう一步自分が成長できた機会でした。

東アジアの平和のために我々は何ができるか、初めは大きなテーマだと思いました。「韓国の中の日本、日本の中の韓国」というサブテーマを決めて、韓国側の「韓国の中の日本、日本の中の韓国」チームのみんなと会った瞬間にもどんな話をしたらいいかわからず、韓国側のチームのみんなとも資料を探したり見学する場所はどこがいいかわかりにくくて遅くまでみんなで話した記憶が思い浮かんできます。その準備期間で言語や報道と分野を分け、報道を担当した私は今まで知らなかったいろいろな日本と韓国、双方で報道されている事件やその方法、内容に現れた両国の価値観の違いなど、今まで自分が考えなかった、あるいは見ることができなかった日本を学ぶことができました。それから東日本大地震についての新聞記事や当時の建築物に関する展覧会があつて行って見たこともありました。このほかにも行事日程の発表時間を進行者として柔軟に進めるため何度も台本を読んでみたときがあり、「責任を持って何かを自分がする」という言葉をただ言葉ではなく身をもって学びました。日本の側みんなと会う前に自分自身が準備したものや韓国側の参加したみんなと会って話しながら一緒に頑張った一日一日が私には大切な宝物です。

日本側のみんなと初めて会った日、ご飯を食べながら足りなかった自分の日本語の実力も感じながらみんな明るく優しく話かけてくれたり、韓国語で挨拶とか自己紹介した時には国籍の違いや言葉の違いなどは問題にはなりません。両国の文化には少し違いもありましたが、逆に相手の立場をもっと考えて話をしたり相手が不便なことがないように配慮する態度も学ぶことができました。

そしていよいよ発表会の期間に入って「韓国の中の日本、日本の中の韓国」のみんなが両国の今まで調べた資料と設問調査の結果を一緒に分析しながら韓日間で、それぞれ気になることはなぜか理由をお互い探してみました。すると、韓日間の子供の頃から育った家庭の環境や、社会の雰囲気、歴史など我々があまり意識していなかった色々な要素がすべて原因になっていることが分かりました。たとえば、家庭の環境についてみると、韓国は家族間の絆が強く、いろんなテーマについて家族内で話し合ったりすることも多いわけです。こういう環境の下で韓国の子供たちは、子供のころから祖父や祖母から韓日間の歴史や戦争の話などを聞き、たぶんその時から反日感情が生まれ、それが大人になっても続いているのだと思います。しかし日本の場合、子供の頃から大人になるまで家族の関係が韓国のより比較的深くなく、個人の感情や部分をより大事にすると感じました。そして過去と現在、そのどちらに重きを置くか、または二つを繋げて見るか別々に見るかなども韓日間で少し差があると感じました。最初は互いに理解できず、どうやって解決の方法や結論を出すか、言語の限界もあつて難しかったが、にもかかわらず「韓国の中の日本、日本の中の韓国」のみんなの気持ち、視線、非言語的な部分まで集中して意見をまとめ、我々が両国の未来に何ができるか、東アジアの平和のために我々は何ができるかが見えてきました。

発表が終わり、自由時間には普通の女の子の話をしたり、韓国のおすすめの食べ物や買い物、日本のおすすめの食べ物、買い物するものなど笑ったり踊ったり楽しく過ごすことができました。

私も日本の友だちが質問してくれた韓国のいろんな文化や韓国人の行動などについて、理由を説明しながら、むしろ私のほうがもっと韓国のことを勉強する機会になったと思います。さらにまったく違うと思った日本の文化とか日本人、日本語なども日本の友だちと話をしたら間違った部分も多くあつて正しく日本の文化が理解できた一時でした。

今度のセミナーを通じて私はいいい人たちに会いました。相手に配慮するという気持ち、責任感、いろいろな美しい韓国の文化や場所、日本語科として持つ自慢など、このセミナーに参加したことで、様々な点で日本人とか韓国人とかいった国籍は問題がないのだという事実を知ることができました。また機会があったら参加したいです。

3ヶ月、その楽しいショックの続き

イ・ソヨン

実は、セミナーが始まってから終わる日までのすべてが驚きの続きだった。それはいろいろな意味でのショックだった。まず当然のことだが、韓国と日本の大学生が考えることは少し違うと感じたことだ。最初は順調だったが、だんだん意見をまとめるのが難しくなってきた。テーマが「慰安婦問題」なので、言葉を慎重に選ぶ必要があった。たぶんそこで生じる問題もいろいろあったはずだ。女性の人権の問題と捉えていくつもりだったが、それでも解決に向けた話はかなり難しかった。これは合宿の時、話し合いを深めていく中でようやくある程度まとめることができた。

そして韓国と日本の文化の間に似ている点が多かったのが2つ目の驚きだった。これも当然な話かもしれないが、かなり細かいところで一致していたのが面白かった。例えば、韓国では金曜日を「금요일(ブルグン)」と呼んでいる。「불타는 금요일(燃える金曜日)」を略した言葉で、「明日は休みだから今日は一生懸命遊ぼう」という意味だ。日本はその金曜日を「花の金曜日」、略して「花金(はなきん)」と呼んでいた。意味も似ていて、「仕事が終わった金曜日には楽しく飲んで遊ぼう」という意味がある。このように意味は似ていても、それを表す言葉の違いで、お互いの文化の違いも感じることもできたのが面白かった。

韓国側のみんなは、いつの間にか日本語で自然に話していることもビックリした。全体会議の時、私はいつも緊張していたので、実際に会ってちゃんと話し合うことができるかが一番の心配だった。その心配はお茶大の学生と会って2日目からだんだん崩れていった。日本語で無理なら英語で、英語でも無理ならボディランゲージで。この障壁一つ一つが全部楽しみだった。私も、他のメンバーも、コミュニケーションに大きい困難はなかった。

合宿の時間は本当に短かった。最後の日はみんな時間の早さに驚いた。私は、チンダルレチーム12人を本当の「チーム」に結びつけてくれたのは、この合宿の時間だと思っている。特に、送別会の夜が忘れられない。チンダルレの韓国側は、送別会ですごく忙しかった。思ったより用意することが多く、日本側といっしょにいられない時間が長かった。その中で、日本側から色々送別会の準備を手伝ってもらった。クイズの時も、商品はいらないけど、楽しい送別会を作りたいと話しながら、一緒に頑張ってくれた彼女たちの心に感動してしまった。

「ナムムの家」への訪問は、チンダルレチームが成長するのに役に立ったもう一つの事だった。真実の衝撃はかなり強かった。そして今まで目を逸らしてきた自分が恥ずかしくなる瞬間だった。この真実に共感しやすいのはやっぱり同じ女性だ。もし、私とその状況だったら、どんな気持ちで、どんな行動をしたかを想像する時、きっと同じ女性だからこそ感じられることがあると思うからだ。しかし、この話は、「慰安婦」問題が女性だけに限った問題であるという意味ではない。誰もが関心を持って、学び、支持すべき問題だ。私たちがすることは、偉大なものでも、本当の解決でもない。持続的に関心を持つこと、私たちの手が必要とすることから目を逸らさないことだ。私はこの「慰安婦」問題についてセミナーで扱うずっと前から関心を持っていたが、今回勉強したことほど詳しくは知らなかった。真の意味での「関心」というのは、私たちが考えていたより難しいことだったのだ。

今回セミナーで得たものは2つある。それは、貴重な友達がたくさんできたことと、私の「関心」がただの傍観から行動に変わったことだ。

セミナーを通してみた韓日の表現の違い

イ・ソヒ

セミナーの準備は思ったより長く、やらないといけないことが沢山あった。直接会って話をすることができない上に、互いに意思疎通の問題もあって、時間をかけた割には結果が良くなかったと思う。長い会議をしたにもかかわらず、あまり進展しないという感じを受けることがたまにあった。そしてそれはただ意思疎通の問題や、距離上の問題ではないという気がした。

私たちのチームのテーマは「女性の社会進出」だったが、テーマに合わせて概要をつかんで内容を満たす過程で韓国側では日本語をスムーズに話せる人がリーダーしかなくて、明確に自分の意見を伝えることが出来なかった。しかし、日本側で書いた感想文を読んだら、韓国側が意見を直接的で明確に伝えてくれたと思った友人もいたので、実は私たちの側でコンセプトや方向を主導し、日本側ではよく受け入れてくれていたことが分かった。もし韓国側で日本語をよりうまく活用し、ビデオ会議ではなく、実際に会って準備する機会があったならば、もっと意見をきちんと表現できたと思う。そして、まだあまり親しくないからなのか、共同シャワー室でシャワーを浴びる時も日本の友達ももっと慎重に行動するようで、全体的に日本の友達は直接的な表現や行動はしないと感じた。

ホームステイと共同合宿の一週間をずっと日本の友達と過ごして感じたもう一つは、日本の友達は話をよく聞いてくれるということである。なかなか思い出せない単語や、話をする時も日本の友達はずっと待って、きちんと聞いてくれる感じを受けた。韓国の友達と話をする時、言いたいことがあると相手の言葉を切って会話に入る感じをよく受けるが、日本の友達にはそんな感じを全く受けなかった。

日本と韓国の視点から見た女性の社会進出については、歴史的な内容ではないからなのか、互いに大きく異なるところはなかった。結局、先生から韓日の違いをきちんと出せなかったという指摘も受けたが、私たちが調査した時、アジア圏での女性の社会進出には、日本も韓国もまだ大変なところが多く、それに対する互いの考えもあまり変わらないということもある。

セミナーの間、本当にたくさんのことを感じて、学んだ。韓国と日本の違いもたくさんあったが、同じ人間であり、近くに暮らしているので、似ている文化もたくさん持っている国であるからなのか、馴染みやすく、気楽に過ごせたと思う。セミナーに参加して本当によかったと改めて感じる。

韓国と日本の文化的差異

イ・イエジュ

セミナーの参加を決めてテレビ会議やフェイスブックなどでチーム別の活動が始まると、ますます彼女達が韓国に来て一緒に過ごす時間が気になってきた。先生が日本人の特徴などについて説明を重ねてくださったが、やはり聞くとときと直接経験したときの感じは大きな差があった。最初グループでビデオ会議をした時、他のチームの友達からも話を聞いたが、日本側の低い参加率にとっても驚いた。私が思った日本人のイメージとは大きく異なっていたため、より驚いたかも知れない。先生は、日本人は最初は多少控えめに応じるけど、時間が経てば積極的に取り組むと説明してくださったが、それもよく理解出来なかった。そしてお茶の水大学では、このセミナーが成績に入ると聞いたが、私たちには成績とは関係なく、単に参加したい学生のサポートを介して行われたものなので、その当時はもっと理解することが出来なかった。後になって積極的に取り組むことなら、最初から頑張った方が良いのではないかと思いながら、少しずつセミナーへの興味を無くしていた。文化の違いという壁に早くもぶつかったのである。しかし、これを克服しなければ、次の段階に進むこともできないと思い、全て受け入れ、理解しようと決めた。

日本の学生達が韓国に来て一緒に過ごした8日間、彼女達に感じたことの中で最も印象深かったのは、本当に小さなことにも一日何十回も感謝や謝罪の言葉を言うということである。前から知っていたこともより強く感じる事ができた。例えば、満員の電車で日本の友達は何の人もとほんの少しでも触れたら、すぐに「すみません」とか「失礼しました」などを言う（たとえ韓国人が日本語を理解できなくても）。そして、私たちからみると大したことでもないことに感謝の言葉を言うのである。最初はそれにどう対応すれば良いかよく分からなくて戸惑ったり、ただ何も言わず作り笑顔を見せたりもした。韓国では、友達の間でありがとうとか、ごめんなさいという言葉は省略することが多いが、日本人はそんな挨拶が少しでも必要と思われる場合には、絶対省略しない感じを受けた。それに対して日本人が礼儀正しいと思われる反面、逆に距離感も感じた。韓国では親しい友人の間であれば、いちいちお礼をしながら過ごさないからである。場合によって違うだろうが、「この人は私に距離感を感じているのか？まだ親しいと思わないのか？」という印象を受けたこともある。

初めて参加した国際交流セミナーは、韓国でだけ過ごした私にとって新しい経験の機会を与えてくれた。学校で理論だけで学んだ日本の文化を直接体験し、またお互いの文化を生活の中で共有できたことは、想像以上楽しいことだった。気づかない間に、互いの文化を知ることになったことが楽しかったし、自分も彼女達のような話し方をしていることに気付いて自分でも驚き、そして楽しかった。もう一つ、新たに気付いたのは、韓国と日本は国と国の間の距離は近いが、お互いにあまりにも違う点が多いということである。これは単に韓国と日本だけではなく、他の国を例に取っても同じだと思う。したがって、国際交流できちんとコミュニケーションをするためには、一番先に相手を理解しようとする努力をしなければならぬということが分かった。

このすべてを体験することができた今回のセミナーに参加できたことに感謝し、かけがえない8日間の時間をこれからも大切に思い出していくと思う。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

イム・イスル

セミナーのためのテレビ会議が始まり、テーマを決める時、日本側から先に「慰安婦」という意見が出た。先生からの推薦で出た話ではあるが、常に問題となっている「慰安婦」について日本の20代の女子大生はどのように認識しているのか気になり、よい解決策はあるのかについて話を交わしたいと思った。敏感なテーマであったが、テレビ会議の最初は、自己紹介やチーム活動報告などの単純な内容だったので、ぶつかったりすることはなかった。しかし、グループ別のビデオ会議が始まった時は、お互いのことへの理解不足や言葉の問題、明確な答えを求める韓国側と、はっきりした答えを殆どしない日本側の意思表現の違いなど大変なことも多かった。それで、今後どのように進めれば良いのか、会議の時私たちの意見だけ押し通したのではないのかなど心配していた。

しかし、実際に会ったお茶大の友達みんな明るく、陽気だった。彼女達は、「韓国がこんなに近いとは知らなかった。」と驚いていた。遠くに感じていた韓国を少し近く感じたようだった。セミナーが本格的に進み、グループごとの実習の日、事前調査地である<ナヌムの家>を訪問した。まだお互い「慰安婦」について話をしていなかったため、<ナヌムの家>に行くことをどう思っているか知りたかった。そこで私たちは、二人のおばあさんに会うことが出来た。一人は日本語ができる方で、お茶大の友達と日本の歌を歌ったり、会話を交わしたりした。しかし私たちは、誰もおばあさんの過去について尋ねることはできなかった。それは失礼なことだと思われたし、今あれだけ明るく、笑いながら快適に過ごしているのに、過去の傷をわざと触ることに思えたからである。そのときの私達の心はみんな同じだったと思う。帰り道で私たちは互いの感想を共有することはしなかったが、みんなの心の中におばあさん達のことが重く残っていることは分かった。セミナー発表の前日に、「慰安婦」の原因に関してはそれぞれ方向が違っていたが（日本は慰安婦に対する認識不足、韓国は慰安婦が女性の人権問題に関連するという意識自体が不足）解決策としての方向は一致した。発表の準備をしながら、「やはり名門のお茶大の学生だな。」と感じた。前から日本側の資料調査と整理はきちんとしていて、ある程度発表の方向性も決まっていた。日本人は自分の意見をよく言わないと学んだが、実は話す前にいろいろ考えて頭の中で整理して答えを出すのではないかと、この日のお茶大の学生を見て感じた。

セミナー期間中、見て学んで感じたことが多い。まず、韓国人でありながら正確に知らなかった、発表テーマの「慰安婦」に関してたくさん知ることができた。このような問題を解決していく方向、同じ女性として、女子大生としての考えを集めて解いていこうと努力した点で、今回のセミナーの発表は、成功したと思う。また、最初はただ日本人だった彼女達が少しずつ「友達」になったこと、お茶大の学生も私達と同じで、国は違っても人はみな似ているということ、日本人の行動特性は、彼らの慎重さからのものだということを、今回のセミナーを通して直接体験し、理解するようになったと思う。

2012年の韓日大学生国際交流セミナー感想文

チョン・ミンジョン

夏休みが終わり、後期が始まった今になってようやく日韓セミナーの感想文を書いているが、不思議なことに、みんなと過ごした時間への記憶は鮮明なもので残っている。

日本の友達との最初の出会いの場所は、仁寺洞の韓国料理屋だった。日本語が上手な私たちのグループのメンバーとは違って私の日本語はひどいものだったので、一緒に夕飯を食べる時も私は辞書を引きながらやっと会話を続けていたことを覚えている。これからのセミナーのことを心配していた最初の日も過ぎ、二日目になった。二日目は一緒に冷麺を食べて、お互い韓服と浴衣を着せてあげたりもした。冷麺を食べる時、冷麺の麺がよく切れないことを考慮して、お店の人が食べる前に麺を4等分に切ってくれたことに日本の友達はとても驚いた。面をはさみで切る文化は韓国だけのものようだ。また、水冷麺とビビン冷麺を一緒に注文して分けて食べたが、日本の友達がそれを気にしなかったので、親近感を持つようになった。

浴衣はまさみちゃんのを着た。まさみちゃんの浴衣は青い布に大きなピンクの花がたくさん描かれているきれいなものだった。私に少し小さい気がしたが、まさみちゃんがきれいに着られるようにずっと気を使ってくれた。着る過程が少し複雑な浴衣とは違って、韓服を着ることはとても簡単だった。私が持ってきた韓服は色が明るくなくてまさみちゃんが気に入らなかったらどうしようと心配したが、むしろ色がきれいだと喜んでくれたので嬉しかった。

3日目は、グループごとの実習の日だった。私たちのグループのテーマは「韓国の中の日本文化、日本の中の韓国文化」だった。しかし、このテーマでどこを訪問すれば良いのか前からみんな悩んでいた。考えを重ねた結果、学問的なウサギと遊戯的なウサギを両方掴むことが出来た。新村にある「国際交流基金」を訪問して、韓国と日本の間の文化的な関係に対する本当に詳しい講義を受けることができた。日本語での講義だったので、聞き取れたのは半分くらいだったが、本当に有益な講義だったと思う。実習が終わった後は明洞や免税店などに行った。この時も私は辞書を引きながら自分なりに化粧品の説明をしたが、悲しいことに、あまり役に立たなかったように感じた。

次の日はみんなで合宿所へ向かった。合宿所ではグループ発表の準備や発表のことなど色々なことがあったが、その中でも出し物を一緒に準備したり、料理を作ったりしたことはとてもはっきり覚えている。合宿中のスケジュールは発表準備のための時間がかなり割り当てられていたが、私たちのグループは、時間が足りなくて、発表の準備を終えたときは、みんなとても疲れていた。しかし、それがあったからより親しくなることができたと思う。また、発表で“Top down&Bottom up”という結論を得ることができたが、それは私が普段考えていなかった発想なので、素敵な結論が出たと思った。発表が成功に終わって、トッポッキとお好み焼きを作って食べた。料理を作る時、キッチンに人が多くて私はあまり手伝えなかったが、料理はおいしかった。

合宿が終わってから日本の友達が泊まるホテルに一緒に行って、一回別かれてから夜また会って、韓国にきた初日必ず食べてみようとしていたブルコギバーガーとカキ氷を食べた。短い一週間を一緒に過ごした私たちは、別れる時はあまりにも親しくなっていたので、誰もが涙を浮かべて別れを悲しんでいた。その友達とは今も連絡を取り合っている。

今回のセミナーは、本当に私たちに貴重な経験と大切な絆を持たせてくれた。「日本の友達」とひっくり返って表現したが、まさみちゃん、成ちゃん、麻衣ちゃん、二人の咲ちゃんとかナちゃんとか私たち韓国人の友だち、イエジン先輩、ヨンジ、チウォン、ソルア、イエジン、そしてヘジン先輩まで親しくなることができて、とてもうれしく思う。今回は私の日本語の実力が足りなくて大変でもあったが、今度は必ず流暢な日本語で皆と一緒に楽しく話すつもりである。その日に向かってファイト！！

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

チョン・イエジン

今回の第8回国際交流セミナーにより、私は長い間日本語を勉強してきた中で初めて日本人と会った。よく人々が、ある人達に対して印象を持つように、私にも日本人達に対しての普通の印象を受けていた。世の中はそれを「ステレオタイプ」と呼ぶようだ。私はそれを三つの点で感じていた。

まずはホームステイと合宿の期間中、生活の面で感じた。韓国では日本の漫画やドラマがマニアたちの中に結構広まっていますが、（詳しいことまでは分かっていないかもしれないが）日本の生活様式についてある程度知っている人がいるのはおかしくない。しかし、韓国のドラマや映画はここ最近マスコミによって注目されはじめたばかりである。それで、韓国の日常生活の姿に触れる機会はあまりないと思い、西洋文化以外は不慣れかもしれないと思っていた。しかし、予想とは違って、事前にいろいろと調べて学んでからここに来た彼女たちは、どんな違いもその国のものとして受け入れる準備が出来ていたし、すぐそこでの方式の通りに行動してくれた。この予想は私自身だけのものであったが、実際に会ってみてこういう予想は変化していった。

次に意見を集める流れについてである。私達は実際に会う前から Facebook や LINE で何回か会議を行い、意見を集めていた。そういう話し合いの中で、韓国のやり方とは少し違いを感じた。個人の差もあるかもしれないが、韓国では一応全員の話聞いても多数が良い方と思う方向へ一気に意見が集まってしまうが、日本ではそれぞれの意見を聞いて、他の道を探すように見えた。そういう方法に慣れていなかった私は「ちゃんと進んでいるのか」、「日本人は自分の意見を表に出さないと聞いたのだけど、本当なのか」と心配にもなった。だが、最初によそよそしい雰囲気が減っていくにつれて、彼女たちが自分の意見を柔軟に、しかし明確に出すことを見ることができた。自分の意見を出さないわけではなく、相手のことを配慮していたのだ。「配慮する気持ちが強い」という考えはより強くなったが、以前の疑問は既に消えていた。

最後に、歴史的な認識にも違いを感じていた。今も摩擦が生じている様々な歴史的問題は、多分それぞれ生きてきた背景が違うからだと思う。家族のこと、先代の問題も自分達につながると考え自身の問題だと認識する韓国人とは違って、韓国より早く独立する日本人々はそうは思わないようであった。だから、私たちから見ると「日本人達は自らの歴史の問題に関心がないんだ」と思ってしまい、誤解が多くなるのである。この深い誤解は社会システムや教育の内容の違いによる結果だと思う。それをまず理解して交流しないと、お互い非難だけで納得はできないであろう。

長い間日本語を学んでいるが日本の同世代の人になかなか会えなかった私にとっては、今回のセミナーは専攻する言語の国の人達に出会えて文化の違いを直接感じる事ができた貴重な経験だった。誤解が相当消えたところがあれば、まだ残っている問題もあるが、こういう機会がどんどん増えれば、いずれは問題を一緒に解決できるのではないかと思う。

友達になる経験

チェ・ソラ

今回のセミナーを通じて教科書で出てくる日本人の特徴を直接体に触れることができた。教科書に出てくる日本人の特徴とは、はっきり自己主張しない、個人主義だが必要なときは確実に団結して仕事を達成するということなどである。今回のセミナーを通じて、日本側の友達の「何でもかまいません。」という答えにどのように対応すべきか分からなくて戸惑ったことが多かった。教科書や周りの人から聞いた日本人の特徴について覚えていたが、実際に日本人と会話をして、何かをしてあげようとする時、そのような反応はどう受け止めればよいか分からなかった。今こうやるのが本当に好きなのか、もしくは好きだけど、遠慮していることなのか等、判断出来ない場合もたくさんあった。しかし、時間が経つにつれて、自分の中で気にし過ぎていたことも徐々に適切なレベルに減り、日本の友達の行動にも慣れてきて、遠くから眺めることができた。それで徐々に余裕を持って彼女達を接することができた。そうする中で感じたのは、日本人と一緒に何かをするというのではなく、同年代の友達と一緒にいるという気持ちになったことである。ただ言語が異なるだけであって、特に、互いに好きなことを言ったりする時は、親しい友人と一緒にいる独特の気分を味わうこともできた。そして互いの言語と異なる文化を教えたり学んだりすることが面白くて、むしろそれが強く印象に残るものになっている。一人一人それぞれ異なった性格を感じて学びながら自分の考えも少しずつ変わっていった。最初は多少硬く、「日本人」と交流するという感じでしたが、徐々にそれがお客さんをもてなすという気持ちへ、そしてそれが今度は友達を作っていくという感じへと変わって行くという、とても有益な経験が出来たと思う。日本の友達みんなが持っている日本人の特徴ということを感じながら、これからの日本人の友達との交流には心配などせず楽しくやっていけそうな気がする。

セミナーを通して得たもの

チェ・イェジ

セミナーの参加を申し込むときは、日本人の友達とうまくやっていけるのか心配していた。しかし、セミナーが終わった今は、これを経験しないで卒業していたら、本当に後悔したと思う。短い時間だったが、あまりにも親しくなった韓国と日本の友達、自分と違う意見も受け入れられる心、前はよく知らなかった慰安婦のこと、ホームステイ、歓迎会、料理対決や発表など、全て忘れられない思い出になっているからである。もちろん、最初に心配していた通り、言いたいことを日本語で説明するのは難しい場合も多かったが、辞書を引きながらでも話そうとしていたし、また日本の友達も私たちのことを理解しようとしてくれたり、できるだけ簡単に話してくれたりしたので、大きな問題はなかった。このように互いに努力をしたからもっと親しくなったのかも知れない。

私たちのチームのテーマは「慰安婦」だった。セミナーが始まって3ヶ月の間慰安婦に関する本や論文、新聞などを見て勉強をした後、実習として「ナヌムの家」を訪問した。「ナヌムの家」に入るとすぐに、壁にかかっている額縁が目にとまった。おばあさん達の写真と、彼女達が生きてきた人生についての説明だった。一人一人の説明を読んでいると涙が出た。そして、慰安婦についての説明、おばあさん達の証言、当時の状況や今行っている活動などを紹介するビデオを見せてもらったが、おばあさん達が証言をするたびに、ずっと涙を流していた。「慰安婦」について勉強をするときまでは想像もできなかった大きな苦しみと悲しみが伝わってきたから、そして今やっと興味を持つことになったことに申し訳なさを感じたからである。ビデオを見た後、慰安婦歴史博物館で詳細な説明を聞いたが、最も衝撃を受けたのは慰安所を再現したところだった。一目で見ても体と心に悪そうな環境だったが、そこが慰安所の中では最も良い慰安所だったという。多くの軍人たちから見られるところで性暴行を受け、毎朝壁を叩いて友達の安否を確認する少女の姿が想像されてとても胸が痛かった。同じ女性で、同じくらいの年齢だったので、自分に同一視されて、より悲しかった。博物館を出てからはナヌムの家に住んでいるおばあさん達に会うことができたが、その時聞いた、おばあさんの言葉が強く記憶に残っている。「日本人を憎んではいけません。すべての人は同じだから。誰かを見下ろし始めると、また同じことが起こって解決されないから。」私がおばあさんなら絶対言えないことだと思った。しかし、おばあさんの言葉を胸に深く刻んで、再びこのような悲惨なことが起こらないようにするために、この問題を解決するために努力しなければと思った。

セミナーは終わったが、私にはそれが動機となって日本語をもっと熱心に勉強している。充分ではないが、「ナヌムの家」でボランティアを始めて、セミナーで会った友達とも連絡を続けている。今後、このセミナーでやった事がどれだけ自分の人生に影響するかはわからないが、どこでも得ることができない大事な財産だと考えている。出来ることなら、次のセミナーにも参加したいと思う。友達や後輩たちにもぜひ勧めたい経験になっている。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

ハ・イエジン

7泊8日の韓日交流セミナーを通して、韓日間のコミュニケーションスタイルの違いを感じた。私が思っている韓国のスタイルは自分が話したいことは直接的に話すということだが、日本のスタイルは相手の話を聞いてあいまいな態度を取るということだ。韓国の人はまず自分が話したいことを話す。後に他の人の話を聞いて何をするかを決めるスタイルだ。逆に日本の人は他の人の話を聞いて、どっちでも構わないと話すことが多い。

そしてそのせいで準備のはじめの段階ではちょっと誤解が生まれたかも知れない。顔を直接見ながら話をするのではなく、映像だけで事前調査をすることは難しかった。母語でない日本語で映像会議が行われたし、コミュニケーションスタイルも違いがあるため、よく理解できない部分に対し、相手の意図とはちょっと違う意味で受けとってしまったこともあった。だが、準備を進めながら、コミュニケーションを深め理解が不十分だった部分を直していった。そして話したいことや聞きたいことをLINEで話しながらセミナーが始まる前まで、準備をした。日本語も不十分なのに日本の学生たちは本当によく理解してくれたと思う。合宿の雪嶽山研修院でもみんな意見を出し合って、発表の準備をした時は国に関係なくみんな協力して手伝い、終えることができた。国が違う学生たちが集まって発表の準備をしたことも、出し物の準備をしたことも初めての経験だった。発表準備をするのは国に関係なし、大学生なら同じだと思った。

そして記憶に残ったのはホームステイをしたことだ。ホームステイをすることは初めてで私の家族みんなが何を準備すればいいのか、韓国の食べ物は口に合うかどうか、話はどうすればいいのかについて心配した。でも、私のホームステイで担当した成美さんがよく適応してくれてよかった。

最後に「日本は近いけど、遠い国」とよく言われる。同じ東アジアの地域でも違った文化を持っているからだと思う。でも、このセミナーで日韓は違いもあり、似ていることもたくさんあることを感じる事ができた。そして浴衣も着ることができ、8日間一緒に生活しながら、日本の文化のことも少しでも経験し、理解のできる時間だった。短い期間のセミナーだったが、みんな一緒に一生懸命セミナーの準備をして、本当にお疲れ様だったし、ありがとうございました。私のグループの発表の内容のようなボトムアップの交流を続けたいと思う。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

イ・ソンヒ

当時の私は少し浮かれていたのかもしれない。個人的な事情で一日遅れて会った日本の友達はビデオ会議を介して見ていたためか、不慣れではなかった。しかしその反面、簡単に近付くことができない異質感もあった。インターネットで親しくなった人と実際に会った時のぎこちなさのようなものである。あまり社交的でなく、人見知りな私には新しい友達、しかも海の向こうの日本から来た友達はとても難しい相手だった。でも私は浮かれていた。まるで大学生になったばかりの時のように、あれこれ聞いて、韓国のすべてを紹介してあげたくてならない状態だった。こんな私に比べて、私より2歳若い、ペアになったリサちゃんはとても落ち着いていた。私のせいで炎天下のソウルの町を3時間も登ったり下ったりしたが、ずっと「大丈夫、大丈夫」と言ってくれた。大学路壁画村がいいと聞いたので、自分も行きたことないのにリサちゃんを連れて行ったわけだが、その壁画村はとても高いところにあったので、私たちはずっと丘を上がらなければならなかった。リサちゃんは韓国に来る前に足を怪我していたので、既にパンパンに腫れていた。後で、日本に帰ったリサちゃんから「足底腱膜炎」という病気で治療を受けているという話を聞いた。漢字が難しく意味はよく分からないが、私のせいでさらに悪くなったことだけは間違いない。病名の漢字を見るだけで、何か恐ろしい病気かのように思われる。リサちゃんには本当に申し訳ないことをした。

合宿が始まってからはもっと楽しくなった。私たちのチームは、出し物としてダンスをすることにした。コンセプトは「レトロ&少女時代」。日本の友達は前もって服を購入していたし、私たちは多様な色のズボンを履くことにした。よし！服装は完璧だった！しかし、ダンスは…。その中でも私とユンジ、しおりはブラックホール。ダンスの指導をしてくれたソヒ先輩に別途の講習まで受けながら熱心に練習した。それでも舞台ではたくさん違った。しかし、そういった練習も、海で遊ぶのも本当に楽しかった。日本の友達の中には焼けることを嫌がる子もいて、いつも遊ぶのはかわいい1年生のリサちゃんともりちゃん。海に入ったり、ビーチバレーをしたり、バナナボートにも乗った！宿舎で遊ぶのも楽しかった。私たちのチームは、未成年の友達が多くて、お酒を飲む代わりにゲームをした。ゾンビゲーム、マフィアゲーム等々。ゾンビゲームをする時は、本当にみんな子どもになって鬼に枕を投げ、ボール投げ、くすぐり乗せて、憎たらしいユンジを押したりした。鬼になったもりちゃんを困らせたのが一番おもしろかった。もりちゃんが「いやー」と悲鳴を上げた時のことを思い浮かべると未だに笑ってしまう。マフィアゲームは各自のルールが違って始めるのに苦労したが、いざ始まったら面白くて夜更かしをしてしまった。魔性のゲームである。合宿から帰ってきた日も私たちのチームはすぐに南山タワーに遊びに行った。本当にタイトなスケジュールだった。みんな口には出さなかったけど、一緒に過ごせる時間はただ一週間であることをずっと意識していたと思う。だから、熱心に遊んで、笑った。一日中くっついていたら、これはもう10年の友人のように親しくなってしまった。別れたくなくて、あの古い江原道の合宿所で一生を過ごすようにと言われても出来そうな気さえした。しかし、私たちは別れて、友達は日本に帰った。しばらくの間、私たちはセミナーの思い出に眠ることも出来なく、フェイスブックを出たり入ったりしていた。みんな同じで、私たちのFacebookは写真の更新に忙しかった。

今リサちゃん、森、しおり、メイちゃん、まるまるちゃん、まどか、みんな何をしているかな。もう2ヶ月も過ぎてしまったあの暑かった夏の思い出は決して忘れられない。みんな元気に過ごしていて。約束どおり、私に会いたいと泣いたら、その姿を撮りに日本まで走って行くから！

交流を通して感じたこと

イ・スヒョン

今回の韓日国際交流セミナーで日本人と一緒に過ごしながら、本や講義を通してだけ知っていたことを直接体験して感じることができました。どんなことについて感想文を書こうか思っていたところ、自分が7日間一緒に過ごしながら感じた日本人のことに対して書こうと思いました。そうしたら、ふと1年生の時に受けた「日本語学習方法の理解」という講義が思い浮かびました。その講義は、日本文化を土台にした日本人の全体的な特徴に関するものでした。たとえば、日本人は形式をととても大切にして、常に感謝の表現や挨拶をする。そして、人と親しくなる時に韓国人とどのような違いがあるのかなどを学びました。そしてそのような日本人の特徴を理解して、私たちがどのように行動すべきかについて学びましたが、セミナーを振り返ってみると、直接会った日本人たちは先生がおっしゃった通りでした。

セミナー期間中に一番印象深かったのは、日本人の挨拶の習慣と相手への思いやりでした。ご飯を食べる前や、食べ終わった後、ドラマで見たように「いただきます、ごちそうさまでした」と必ず挨拶をし、韓国側の小さな行動にも常に「ありがとう」と挨拶していたことを覚えています。そして、話をするとき、話の途中私が日本語の単語を忘れたり、言葉が詰まったりすると、再び話を引き出してくれました。ずっとうなずいて聞いてくれたし、「そうだね、そうなんだ」と、相槌を打ちました。これらの配慮はセミナー発表前日の最終打ち合わせの時も感じました。韓国側が歴史教育の現状や独島に関する根拠を説明するときに、日本側はみんなちゃんと聞いてくれて、気になる点について質問していました。日本側の教育の現状や独島に関する主張を説明してくれる時には私たちがもっと簡単に理解できるように難しい単語は詳しく解いて説明したり、具体的な状況の例を挙げて説明してくれたりしました。実際、歴史教育というデリケートなテーマのためにセミナーの準備期間中に摩擦や困難が少しありましたが、発表前日会議するときは、お互いへの配慮のおかげで意見交換をスムーズに行うことができました。

実は私は以前から日本人はすぐ親しくなにくく、長く付き合わないで親しくならないと知っていましたが、いざ一緒に過ごしてみるとそうでもないと思いました。会話を交わしながら、我々は共通の興味もたくさん見つけることができたし、プライベートな話も交わすなど、親密な時間もたくさん過ごしたので、日本人という距離感はあまり感じることはありませんでした。

本当に今回のセミナーに参加してよかったと思います。日本の友達に会う良い機会になり、多くのことを学ぶことができました。セミナー期間中、最後まで優しく接してくれた日本の友達にも、このような良い機会を作ってくださった金榮敏、森山新先生にも感謝したいと思います。

2012年 韓日国際交流セミナーを終えるにあたり

キム・グッチン

去年の夏は、私たちの学校と日本のお茶の水大学が共同で行ったセミナーで、私には多くの変化がありました。最初、私は共通のテーマである「平和」というタイトルの下で私たちと日本のお茶大の学生が最も共感できるものは何だろう、という悩みをしていました。そうして決めた主題が「女性の社会進出」で、同じテーマを選んだ友達とチームになり、セミナーを準備することになりました。私はこのテーマであれば、他の何より私たち皆が社会的、文化的な違いを越えて一緒に議論できると思いました。

セミナーを準備する過程で、その予想は外れませんでした。ビデオを通したチーム会議を進めながら、私たちのテーマは韓国と日本という異なる環境に置かれているが、「女性の社会進出」というテーマの下で、皆「女性」であるため、共通の考えをすることができました。私たちのチームはテーマについての意見の衝突はありませんでした。特に私達のテーマが韓日各国の女性の社会的立場に重点を置いて準備していて、韓国と日本両国が似ている点が非常に多かったのも、互いのことを理解し、共感する時間がたくさんありました。

セミナーの準備をある程度終え、お茶大の学生が韓国に来たときは、他のチームに比べて、テレビ会議や交流がもっとあったからなのか、同じ学校の友達に会ったかのように、あまり距離感を感じないで楽しい時間を過ごすことができました。ソウルで生まれて今まで住んでいても、ソウルを観光する機会はなかった私が日本の友人の観光を計画して案内しながら、私自身も楽しむことができました。10日余りの時間の間、友達と沢山の話をし、自然に彼女達の文化を理解するようになりました。振り返って考えてみるとお茶大の友達とこれが違うとか理解できないといったところはあまりなかったと思います。

同じチームだったまるちゃんが合宿最終日に韓国側みんなに小さな鏡をプレゼントしてくれたことが記憶に残っています。おそらくこのようなところが私たちと少し異なると感じました。私達はギフト文化があまり進んでいなくて、そのため、相手に自分の心を伝えるのは容易な事ではないと思います。まるちゃんのプレゼントだけでなく、他の日本の友達の細心の配慮と関心のおかげで、私たち韓国人が見落としがちな部分に対して感じる事ができたと思います。まるちゃんだけでなく、同じチームのメンバーだった、同徳女子大のお姉さんや妹たちとお茶大の妹たち(^ ^) 皆がそんな些細な配慮と関心をお互いに表現できるような時間を持つことができて良かったです。

最近やや複雑な韓日関係になっているため、日本の友達と会った時ぎこちないところがあるのではないかと、セミナーを準備しながら心配していたのは事実です。しかし、この部分は前述したよう、我々のセミナーのテーマを介して同じ考えと方向性を持つことができるようになったと思います。私たち各チームがそうだったように、韓国と日本との関係も同じ考えをするように努力すれば、お互いを理解して配慮することができる関係になると思います。この韓日国際交流セミナーだけでなく、様々な韓日国際交流プログラムを通じて、私が感じた感情や思いを多くの人々にも経験してもらえれば幸いです。

韓日国際交流セミナーに参加して

ト・スジン

今回の韓日国際交流セミナーに参加したきっかけは、日本語を専攻しているのに、日本人との交流が全くなかったのもので、この機会を通して日本人、さらに私と同年代の友達に会ってみたい、彼女達と同じ問題について議論しながら、韓国と日本の違いを実際に感じてみたいという気持ちからだった。

セミナー中に感じた韓日の違いは、コミュニケーションにおけるものだった。学校で日本の精神文化についての講義を聞いていたので、自分の意見を直接言わないで間接的に伝えるという日本人の特徴は知っていたが、実際経験してみると、本当に彼らの意図が掴みにくかったのもので、セミナーの前半は少し大変だった。しかも、私たちのチームのテーマは「慰安婦問題」という、多少デリケートなテーマだったので、日本側の意見に神経を尖らせていたが、日本側が何を言いたいのか、ポイントが明確でなくて彼女達の考えを把握して意見を統合することが大変だった。また、どこかに行ったり、食事のメニューを決めたりする時も日本の友達はずっと「大丈夫」と言っていたので、私たちは「本当に大丈夫なのか？実は迷惑だと思っているのではないかの？」と、ずっと意識しながら行動していた。しかし、一緒に合宿を始めてからはそのような考えは変わってきた。セミナー前半では「日本人」という認識が強かったため、彼女達が同じ年代の「友人」という気持ちは感じなかったが、合宿中にチームの出し物としてアカペラの練習をしたり、料理を作ったり、発表の準備のために夜を明かしているうちに、彼女達も私たちと同じ悩みを抱えて生きている、国籍が違うだけの「友達」であることに気付いた。また、最初は意見の違いが埋まらなくて大変な時もあったが、段々互いのことを理解するようになり、熱を帯びた討論や激励を介して、最終的にすばらしい発表が出来た。その過程はアカペラの練習と似ている。最初は私たちが和音を入れることができるかにとっても心配していたが、美しいハーモニーと一緒に幻想的な呼吸を作り上げたからである。あの時感じたのは「すばらしい経験」と言うしか他にない。国境を越えて、一緒に何かをやり遂げることができるという自信を持つようになった。この大切な経験は決して忘れない。そして偏見を持って相手と接してはいけないことが分かった。

今回のセミナーは時には大変な思いもあったが、それ以上に楽しくて、幸せな時間だった。またの機会があればぜひ参加したいと思う。

日韓のコミュニケーションスタイルの違いと学び

イム・ヨンジョン

今回の日韓国際交流セミナーは私にとっても大切な経験となりました。特に、同じ女子大生として「働く女性を取り巻く環境・問題」について一緒に悩み、話し合えたことは女性としてジェンダー面でこれから先自分が歩いていく人生を考えてみる良い機会になったと思います。

このセミナーを通して、前と比べて変わったことは今まで自分が持っていた「日本人」に対する印象が少し変わったことだと思います。セミナーに参加するまで、私は日本人との交流で日本人を少し遠く感じていて、それは日韓のコミュニケーションスタイルの違いに原因があると思っていました。日本人は和を守ろうとすることからの建て前が存在し、話法的にも謙譲語や受身系をよく用いる習慣を持っていて、自分の意見を間接的に表現することが多いと言われています。そのため、物事をはっきり言う直接的な言語習慣を持っている韓国人与のコミュニケーションの場で誤解が生じかねないと考えていたのです。この考えがこのセミナーを通して少し変わりました。

今回のセミナーで私達グループは週一回テレビ会議を行いました。上に挙げたコミュニケーションスタイルの違いは、そこでもはっきり現れていました。日本の大学生との合同セミナーにおいて日本語で会議をするということで、私は日本語が上手ではない韓国側に代わって、日本側が仕切りを持ってくれるだろうと思っていました。しかし、日本側の皆はあえて、私たちに発言の機会をたくさん与えてくれて、上手く纏っていない私たちの意見を真剣に受け止めようとしてくれました。

最初のうちはこれが日本人の消極的なコミュニケーションスタイルだろうとばかり思っていたのですが、会議を重ねていくうちに、先に相手の意見を聞き、それから補充したり、アイデアを加えたりすることで、私たちが配慮してくれているのだと言うことに気が付きました。ただの消極的—積極的なコミュニケーションという外側を除いて、相手を配慮する思いやりを感じ取ることができたことで、私は今まで遠く感じていた日本人とのコミュニケーションをもっと近くに感じることができました。

それに韓国側も日本側もお互いの文化も慣習も表現の仕方も違うことに気がつけて接しました。例えば、韓国側は自分たちのストレートな意思表示が誤解されないよう気を使い、日本側は、郷に行ったら郷に従えという考えからなのか、慣れていないスキンシップや好意に戸惑わずちゃんと向き合ってくれました。こうすることで私達の間をよりスムーズにすることができたと思います。

4ヶ月、それから8日。あっという間だと感じるほど濃い時間でした。これからも互いの違いを認め、配慮するコミュニケーションで交流を続けていきたいと思っています。

国境を越えて友達になれたセミナー

キム・ユジョン

今回のセミナーに参加したことになったのは、日本人とコミュニケーションを取りたいというとても単純な理由からでした。でも、セミナーは思ったより学問的な面が多く、少し負担に感じたのも事実です。うちのチームは「歴史教育」についてやることになりましたが、多少デリケートな問題でした。準備する途中で「歴史教育」の中で歴史にポイントを置くか教育にポイントを置くかでちょっと議論が分かれましたが、最終的に、二つとも研究することができて良かったです。日本側と会う前にはFACEBOOKで資料を共有したりしましたが、日本側の反応が遅くて研究がうまく進められなかったのはちょっと残念でした。

直接会ってからは研究がちゃんと進んで、日本側も色んな資料をもってきたり、自分の考えをはっきり言ってくれたりして日本側の考えを沢山聞くことが出来ました。

そして、ユリさんの高校に行って歴史科目の先生をインタビューしたこともとても良かったです。その先生は歴史について中立の立場でおっしゃってくださって韓国の歴史教育の問題を考えるようになりました。歴史問題というのは両国の協力がなければ、解決しにくい問題だと思いました。

そして、私は日本の友達は初めてで、短い時間でしたがセミナーを通して日本人と韓国人は違う点が多いと思いました。日本人の本音が予測できなくて、本当に美味しいのか楽しいのか分からなくてちょっと困ったこともありました。

そして、日本語を一週間も使ったためなのか、自分が今言っているのが日本語なのか韓国語なのか分からなくなって、最初の3日間はパニックでしたが、その後はなんとなく日本語で言えるようになって日本語でたくさん話しました。私が今まで習ってきた日本語で会話ができるのはすごく嬉しかったです。セミナーの前は日本語を話す気がなくてガッカリしていましたが、セミナーをやってもっと日本語を学びたいくなりました。だから今回の同徳の国際交流プログラムに志願し、来年は明治大学で勉強することになりました。直接に日本人とコミュニケーションして見たら私がどれくらい足りないのかをハッキリ分かるようになったと思います。

討論が終わったあと、ダンスを練習しましたが、その時、何だか国境を越えて友達になったような気がしました。外国人は考え方が違うから友達になりにくいと思った私には新しい経験でした。後は一緒に料理も作って日本の塩そばも初めて食べることができたのも新しい経験でしたし、すごく美味しかったです。お互いに力を合わせて何かをした、ダンスと料理を通じて、日本は韓国とは違うこともたくさんありますが、それでも心は通じていることを感じました。

今回のセミナーを通じて自分がもっと成長できたような気がします。これからも歴史教育チームは私にとってはずっと連絡と取りたい、来年勉強しに日本に行ったらまた会いたい、友達です。こんなに素敵な経験をさせてくださった森山教授とキム・ヨンミン教授に心から感謝します。ありがとうございました。

韓日のコミュニケーションスタイルの違いと学び

チョン・オンヒョン

今回のセミナーを準備しながら韓国と日本との違いについて沢山のことを感じる事ができた。特にセミナーが始まる前、事前調査をしながら、日本の友達とビデオチャットやFacebookを介してお互い意見を交わしたが、一番互いの違いを感じたのはその時だと思う。

「いいよ」という言葉を、私たちは「良い」あるいは「意見に同意する」という意味で理解したが、日本では単に「どんな内容か分かった」という意味で使っており、誤解を起こすこともあった。こういうところで韓国と日本のコミュニケーションの差が大きく表れているのだと思った。

そして、日本側は話を結構遠回しに言っていたので、何が言いたいのか理解ができないことも多かった。逆に、私たちの方ではそれなり遠回しに言ったつもりなのに、ストレートに言っていると言われ、戸惑ったこともあった。

韓日のコミュニケーションの違いについては、以前から学んでいたが、それでも直接体験してみると違うところがかなりあった。他の国の人と意思疎通をする時も会話というのはそんなに変わらないものだと思っていたが、微妙なところの違いでも全く別の意味になるということをはっきり知ることができた。今回のような、外国の友達との出会いは初めてなので、いろいろと考えることができる機会になった。

私たちのチームのテーマは互いにデリケートになり得る、歴史に関するものだったので、議論など話し合いをする時、たとえ意図しなかったとしても互いに傷つけることがあるのではないかと心配していたが、そうならないよう日本側でうまく導いてくれたと思う。私たちは割とストレートな口調で話をしているので、攻撃的に思えるような態度で議論を続けていたところもあったようだが、日本側はいつもにこにこしながら丁寧に話をしていたことが印象深かった。

コミュニケーションのことだけではなく、セミナー期間中に食べ物に関することや些細なところで韓国と日本の違いを見つけることが出来て面白かった。そして、このような個々の出会いを通して、日本の友達をより詳しく知ることができて良かったと思う。

第 8 回日韓大学生国際交流セミナーを終えて

金智英（お茶の水女子大学大学院生）

今年で 8 回目を迎える日韓大学生国際交流セミナーにアシスタントとして参加しました。お茶の水女子大学の学生 25 人、同徳女子大学校の学生 26 人の計 51 人が参加した今回のセミナーは韓国のソウルと江原道の襄陽にある合宿所を移動しながら行われました。

7 月 24 日に韓国に到着し、韓国側で準備してくれた歓迎会であいさつを交わしました。セミナーの前から授業中のテレビ会議を通して自己紹介やグループ分け、テーマを決めるなどグループごとの活動が行われていたためなのか、実際に会った時は前から親しい友達だったかのようにみんなすぐ溶け込む様子でした。その日の夜は 3 日間お世話になるホームステイ先にそれぞれのパートナーと一緒に帰宅しました。ホームステイを通して日本の学生は韓国の一般家庭を体験することが出来て大変良かった、韓国の学生やその家族もとても楽しい時間を過ごせたという話を聞きました。

次の日は同徳女子大学校で開会式がありました。その後学校を見物し、韓服と浴衣を互いに着せてあげるなどの文化体験をしました。この時のみんなはとても楽しそうで、より親しくなったようです。韓国側の学生と一緒に歩きながら電子辞書などを利用して日本の学生に説明をしていました。次の日はグループ別にそれぞれの実習先へ出かけました。自分達の興味のある問題に実際に触れ、見て、聞いて、感じることで今までの話をより深めたようでした。今年は大きく歴史教育、日韓の女性意識、従軍慰安婦問題、韓国の中の日本・日本の中の韓国という 4 つのグループに分け、みんな意欲的に取り組みました。

7 月 27 日からは江原道襄陽の合宿所に移動してセミナーの発表の時間を確保しました。各グループみんなメンバーの意見をうまくまとめて、発表の順序などしっかり決め、流れの良い発表が出来ました。多少重いテーマであった従軍慰安婦問題グループや歴史教育グループも最初はメンバーの間に意見のずれもありましたが、それを自分達で克服し、協力して、きちんと仕上げていました。中には前日徹夜をしながら準備したグループもあって、その情熱に先生方も感心しました。続いて行われた料理体験では、不慣れなキッチンでの様子とは別にみんな生き生きしてとても楽しそうでした。日本と韓国の料理の作り方を教え合ったり、食べさせてあげたりなど楽しんでいました。

合宿所での最後の日は雪岳山の綺麗な景色を堪能し、統一展望台を訪ねました。分断されている韓国の悲劇を完全に理解することは難しいことだと思いますが、こんなに近くにあっけり行き来出来ない韓国のことが少しは伝わったようでした。先生方に色々な質問をしたり、望遠鏡で北の方を覗いたり、興味を見せていました。夜は送別会がありました。みんな遅くまで話をしたり、日の出を見に行ったりしたようです。次の日ソウルに戻り、日本に帰国することでセミナーの全ての日程は終了しました。

今回のセミナーで個人的に感じたことを少し書かせて頂きます。まず、セミナーの発表に関してのことです。全グループが自分達で決めたテーマにおいての問題点を認識し、分析し、さらにその解決策を探ろうとしたのは大変良かったと思います。ただ、解決策が多少一般的で、皮相的な感じを受けました。今、大学生として、このような現実の中で自分が実際に出来ることを具体的に考えたら一層意味のあるものになったのではないかと思います。そして、これだけ良い趣旨のセミナーが個人の思い出で留まるのではなく、より多くの人が日韓を理解出来るように、そして両国の社会のために何か小さい行動でも起こすことが出来たらと思いました。

セミナーの最初は相手の文化や習慣が理解出来ないでいる感じも何人かから受けました。しかし、後半になるに連れ、一生懸命相手のことを理解しようとし、また心から好きになっていることを見て、嬉しさで胸がいっぱいになりました。このようにポジティブで明るいエ

エネルギーに満ちている若者が作っていく世の中は国や人種を区別して考える世界ではない、互いのことを理解しようとする姿勢で物事を進める世界になると思います。セミナーの参加者のみんなが個人の貴重な体験を次は外に向かって広げ、より進歩した日韓関係を築くのに貢献出来る人材になることを願います。

今こそ、交流の力を

金榮敏（同徳女子大学校）

毎回のことであるが、この「韓日大学生国際交流セミナー」を終えたときの達成感は参加した学生のみではなく、引率教員である私にとっても大きなものである。そして、この達成感は、次回のセミナーへの熱意につながることになる。今回のセミナーはいつにもまして充実したもので、有意義な交流の場であった。参加した両大学の皆さんの努力があつてこそ、このような成果が得られたものと思う。この場を借りて両大学の参加者全員に感謝の気持ちを伝えたいと思う。

セミナーが終わって3ヶ月ほど経つが、我々を取り巻く国際情勢、特に韓国、日本、中国の関係は、歴史問題や領土問題などによって冷え込んでいる。各国がそれぞれの主張と言いつ分を掲げる中、解決への糸口が見えてこないのが現状である。貿易や観光、文化公演などにおいて、多大な支障をきたしている。長年築きあげてきた経済的協力関係、外交的友好関係、文化交流関係が、あたかも偽りのものであったかのように崩れかけている。こんなにも脆く崩れてしまう信頼関係だったのかと嘆かざるを得ない。このような厳しい時期だからこそ、草の根交流が切実に求められる。民間交流を通じて得られた人と人との付き合いは、政治的・外交的摩擦が起こった際の緊張感を和らげる役割を果たしてくれると思う。民間レベルでの交流が続くかぎり、お互いの信頼関係が一夜にして崩れ去ることはないだろうと信じている。

今回のセミナーの送別会の際に、私は、いつかまた両国に緊張した関係が生じることがあるかもしれないが、そのときにはみなさん一人一人が今回のセミナーで覚えた交流の力を思い出してほしいとの旨を伝えた。双方の距離を縮めていくために行った様々な取り組みと真心は、文化の違いを乗り越えて我々を一つにさせてくれた原動力だったに違いない。このセミナーで皆さんが感じた交流の手ごたえを忘れないでほしいと思う。

セミナー以降、フェイスブックなどを通して交流が続いているのを見ると、今回のセミナーが皆さんにとって交流の第一歩になったのだと思われてうれしいかぎりである。これからも今回のセミナーで築いた関係を大事にしていきたいと思う。

4月の参加者募集から、3ヶ月間のテレビ会議を通しての事前準備、暑い中での7泊8日間の本セミナー、そして最終日の別れに至るまでの一つ一つがいまだに鮮明に頭の中に残っている。参加した皆さんの笑顔と熱意、そして真摯な姿勢を見て、私ももっと頑張れたと思う。これからもこのセミナーを通して多くの交流の場を作っていきたい。

最後に、毎年このセミナーを成功に導くために全力で支えてくださっている森山新先生をはじめ、両大学の関係者の方々に心から感謝の気持ちを申し上げます。

グローバルな人材育成のための実践の場として

森山新（お茶の水女子大学）

経済協力開発機構（OECD）は「グローバル時代に求められる能力」として、①相互交流のために言語やテクノロジーを駆使できる能力、②文化などを異にするグループと相互交流できる能力、③自主的に行動できる能力の3つの能力を挙げている。この日韓大学生国際交流セミナーもグローバル人材育成を目指し開催されているが、第8回を迎える今回のセミナーは、過去のどの回にも増してこれらの目標を十分に達成できたと考えている。

第一に言語運用能力だが、両国学生はこれまでにまして言語の壁を越え、対話、発表が行われた。韓国側の学生たちの多くは日本語学科の学生であったが、1、2年生の学生や他学科の学生も多く含まれ、各自が決めたテーマについて討論、発表するのは容易なことではなかったが、それを乗り越え、日本語を用いていた。また日本側の学生は韓国語を専攻としていないため、韓国語での討論、発表は難しかったものの、今までになく事前の韓国語学習に積極的に参加し、歓迎会での自己紹介は全員が韓国語で行うなど、韓国語の使用と習得に熱心であった。

第二にテクノロジーの使用については、同徳女子大側でTV会議システムが導入されたことで、事前準備の授業にTV会議システムが用いられた。また授業外ではスカイプ、フェイスブックなどを用いて討論、準備を進めたことで、サイバー空間において国の壁を越え積極的に交流を進める環境を造成することができた。

第三に各グループはこれまで対話がきわめて困難で、タブーとされがちであった両国間の歴史的問題、すなわち従軍慰安婦問題、領土問題をはじめとした歴史教育問題、対日・対韓感情と報道・交流の役割、女性の社会進出といった問題を敢えてテーマとして取り上げ、これらについて自国中心の立場を越えグローバルな視点に立って対話が進められた。

第四にセミナーの準備、運営が学生の自主性に任せられ、学生主導により進められた。歓迎会、韓日文化体験、合宿、発表会、送別会などの運営は韓国の学生が担当した。また発表に際しては両国の学生が自ら率先し、夜を徹して準備を行っていた。発表内容は実習での成果と両国学生間の討論が踏まえられ、深い内容にまとめられていた。

最終日、日本へと旅立つ我々に対し、韓国側の学生全員が見送りに訪れ、別れを惜しみ涙を流しながら抱き合う両国の学生の姿に交流の成功を見ることができた。お互いにプレゼントを交換し、再会を誓った。韓国の学生に比べれば日頃引っ込み思案がちで感情を表に表すことの少ない日本の学生も、この時はあふれる感情を抑えることができないようだった。帰国後には、すぐさまフェイスブックやスカイプなどで思い出を語り合っていた。これらの姿には、今回のセミナーが今までのいつにもまして交流が深まったことを物語っていた。

セミナーは前半のホームステイやグループ実習、後半の3泊4日の合宿を通じて交流を深めていった。両国の学生たちは言語と文化、受けてきた教育の壁などを乗り越えながら夜を徹して話し合い、共通のゴールを模索していた。

韓国の学生たちが思いの限りを尽くして自らを迎えるその姿に、日本の学生たちは大きく感動し、自らも変わっていった。とかく距離を置いてしまう日本の学生だが、このセミナーではそんな姿は見られず、一日でも一時間でもいっしょにいたい、いっしょにしようとする日本の学生の姿があった。スキンシップに慣れていない日本の学生も後半には平気で韓国の学生と手をつなぎ、抱き合っていた。

また38度線近くの統一展望台や朝鮮戦争展示館を訪れ、南北分断の現実を目の当たりにした。日韓の学生が一緒になっての訪問は、異なった視点から南北分断の悲劇を見つめさせることにもなった。何故韓国が分断の悲劇を被らなければならなかったかを考える時、ドイツ同様、日本が分断されてしかるべきところを、韓国が一時日本の植民地であったがために、

またしても悲劇は日本でなく韓国に訪れたということを両国の学生は感じる事となった。日本の学生たちは南北分断に対する認識を新たにしていた。

日韓両国の間には未解決な問題が未だ多く残されている。こういった問題はお互いが自国優先の心を持っていくら話し合いを重ねても解決できるはずはない。今回、両国の学生たちが相手を理解し合おうというグローバルな心を持とうと努めながら、真摯に話し合う姿勢を持つことで、これまで解決が困難であったこれら問題に一定の解決策が見いだされ、提言がなされた。今後さらに彼らがグローバルな心を抱いた人材へと成長することで、両国のこれら問題が解決に向かうことを期待してやまない。

最後に、今回のセミナーを成功に導くため同徳の学生の陰で日夜苦勞してくださった金榮敏先生をはじめとした同徳の先生方、日本の学生を暖かく迎えて下さった学生のみなさん、ホームステイを受け入れて下さったご家族の皆様に心から感謝いたします。また安全面などでご協力いただいた本学国際本部、国際交流チーム、グローバル教育センター、グローバル文化学環の皆様にも心から感謝いたします。

グローバル時代の第二言語教育・異文化理解教育

森山新（お茶の水女子大学）

本稿は、このセミナーの理論的背景について紹介している。2012年11月3日に韓国、日本文学会創立20周年記念周期学術大会での招請講演を論文にまとめたものを、日本文学会の許可を得て一部加筆修正し、ここに掲載したものである。講演の内容は、2013年2月発行の『日本語文学』60号に掲載される予定である。

1. はじめに

日本語教育をはじめとする第二言語教育は、時代のニーズと共に大きく変化してきた。例えば書物を通じて以外に海外と接触することが難しかった20世紀前半までは、文法と語彙を教え文章を読み解いていく「文法訳読法」が、電話、ラジオ、テープレコーダーなどの音声を通じ海外の情報がやりとりされる20世紀中盤には耳と口を使う「オーディオリンガル法」が支配的であった。さらに国際化の時代を迎え、人が国境を越えて行き来するようになった20世紀後半には、コミュニケーションを重視したコミュニカティブ・アプローチが用いられた。では多言語、多文化が日常的に共存するグローバル時代において、ふさわしい第二言語教育、日本語教育はどのようなものであろうか。

グローバル時代の日本言語教育などの第二言語教育を考えるにあたって、本稿では日本語教育などの第二言語教育が根源的に持っている大きな2つの枠組みについて再考する必要があると考えている。なお、本稿では以下、日本語教育を例に話を進めることとする。

その第一は、日本「語」教育、すなわち日本の「言語（だけ）」を教えるという枠組みに対する再考である。これについては「言語」を越えた「文化」という視点を導入する必要がある点を述べたい。

第二には、「日本」語教育、すなわち日本という「国」の枠組みを超える必要はないかということである。グローバル時代は文字通り「国」の枠を越えた「地域」「世界」という枠組みの中で人や物が行き来する時代であり、そのような時代にあっては、もはや日本、韓国といった「国」の視点を打破し、より広い「地域／東アジア」さらには「世界」という視点を取り込んだ第二言語教育が必要であると考えている。

2. グローバル時代の日本語教育のための基本的考え方

グローバル時代の日本語教育を考えるにあたり、参考にした考え方は以下の3つである。

- ①文化を取り入れた総合的日本語教育
 - ②複言語・複文化主義
 - ③オーストラリアをはじめとした多文化主義
- それぞれについて以下で述べていきたい。

2.1. 文化を取り入れた総合的日本語教育

文化を取り入れた「総合的日本語教育」が最初に提唱されたのは、2000年にソウル、同徳女子大学校で開催された第2回日本語教育国際シンポジウムで、主催者の李徳奉氏がこのシンポジウムのテーマとして掲げたものであった（李 2002）。

当時、韓国にて日本語教育を研究、実践していた私はお茶の水女子大学に赴任後、それを継承、自分なりに応用、発展させていった。それが今日、グローバル時代の第二言語教育のあり方を考える第一歩となっている。まず2003年に、お茶の水女子大学が主催で第5回国際日本学シンポジウムが開催された際、李徳奉氏のほか、桜美林大学の佐々木倫子氏、北京大学の彭広陸氏を招き、「国際日本学との連携による総合日本語教育の可能性」と題するパ

ネルディスカッションを開催した（森山 2004）。

さらに李（2006、2009）では、総合的第二言語教授法としての交流の重要性に着眼、それを「交流法」と名付けた。グローバル時代は共生の時代であることは言うまでもないが、人々が言語を越え、文化を越えて多言語、多文化状態で共生するには、母語以外の他の「言語」に対する理解だけでは十分ではなく、他の「文化」に対する理解が求められる時代となっており、それを教える教授法として、何よりも「交流」が重視されるべきだということである（森山 2010a, 2010b）。

このようにグローバル時代に求められる日本語教育とは、「日本語」教育から「日本の言語と文化」の教育へと向かう必要がある。

さらに第5回国際日本学シンポジウムで佐々木倫子氏は、日本語教育で扱われる文化として「所産・知識としての文化」「他者との相互作用に介在する文化」「個としての文化」の3つを挙げた（佐々木 2002）。かつては海外との交流は主に書物などに頼りがちで、その時代における文化は「所産・知識としての文化」を学ぶことであった。しかし国際化時代を迎え人的交流がさかんになると、「他者との相互作用に介在する文化」の重要性が増していく。さらにグローバル時代になり多様な文化が日常的に触れ合い、共存し合うようになると、そこに住む個々人が持つ文化も、もはや母文化のみで考えることは不可能であり、「個としての文化」すなわち「個」のレベルで文化を考えるべきであるというのである。

また異なる「文化」に対する理解は、かつての「所産・知識としての文化」を中心とした時代は「知識」に偏りがちであったが、グローバル時代になると、様々な文化に触れ合いながら各自が「個としての文化」を形成するようになるため、個々人に接する際に、相手の国の文化に対するステレオタイプにとらわれず、個々人が所持する文化を柔軟に読み解いていく能力、すなわち「文化リテラシー」が必要になる。

このように考えると、グローバル時代に扱われるべき文化とは、第一に国から個へと還元されるべきであり、第二に知識から能力（リテラシー）へとその重点を移行すべきであると考えるだろう。」

2.2. ヨーロッパの複言語・複文化主義

国を越えた言語教育、文化教育の枠組みとしては、ヨーロッパの「複言語・複文化主義（*plurilingualism, pluriculturalism*）」とそれに基づく「複言語・複文化教育」が参考になる。

ヨーロッパは二度にわたる世界大戦の経験から、戦後、二度とこのような悲劇を繰り返すまいと固い誓いを行った。そして 1949 年に「欧州協議会（Council of Europe）」を発足させ、民主主義と法の支配の保護、人権保護、ヨーロッパの文化的アイデンティティと多様性の促進をめざし、言語教育政策を進めてきたが、その集大成が「複言語・複文化主義」なのである。いわばヨーロッパが国の枠を超え、地域共同体とそこに住む市民、すなわちヨーロッパ人を作るためにたどりついた言語と文化に対する理念であるといえよう。

では複言語・複文化主義とは何なのか。多言語・多文化主義と何がどう異なっているのか。歴史的に見るとヨーロッパが複言語・複文化主義という用語を多言語・多文化主義（*multilingualism, multiculturalism*）と区別して用い始めたのは最近のことである。しかし今日においては以下のようにかなり明確、かつ対比的に使い分けがなされている。

まず「多言語・多文化主義」とは、「一地域」に多言語・多文化が存在することを、「社会レベル」で尊重・促進していく考え方で、複数の言語と文化の存在を「マクロ的姿勢」でとらえた考え方である。これに対し、複言語・複文化主義は、複数の言語、文化が「個」の中に「能力」として存在すると考え、あくまで言語、文化を「個人レベル」で尊重・促進していく「ミクロ的姿勢」でとらえる。

これを図示してみたのが図 1 である。A が母語、母文化であり、B、C、D が異言語、異文化である。これまではそれぞれの個々人はある特定の言語、文化を母語、母文化としてとらえ学習すると同時に、他のものを異なる言語、文化としてとらえ学習してきた。しかし、

そうではなく、個の中にいかにして第二、第三の母語、母文化を形成、統合していくかという試みである。

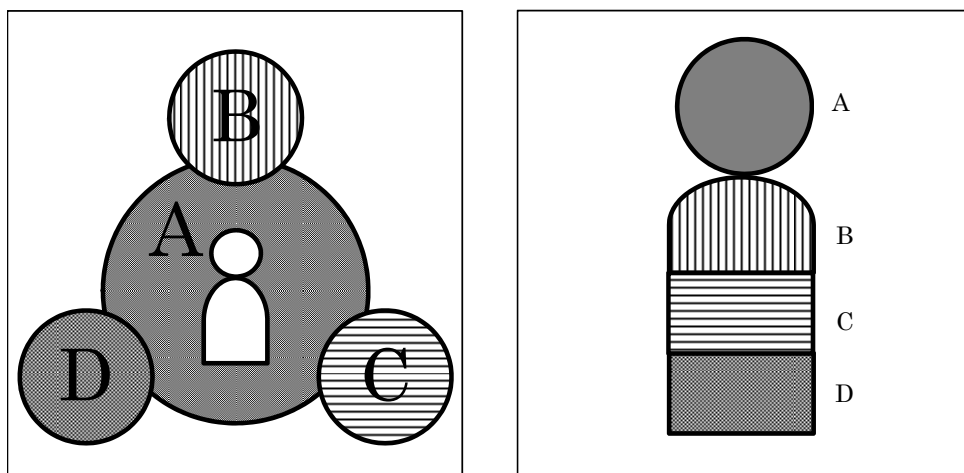
ここにも、上の 2.1 で見てきたのと同様に、言語・文化をから国や地域から「個」へと還元する姿勢（スタンス）が見受けられる。

複言語・複文化主義は複数の言語、文化を「(個が有する) 単一のコミュニケーション能力」としてとらえている。多様な言語と文化の知識と経験を育み、個体内で 1 つの能力として関係づけることで、個の中に国を越えた視点とアイデンティティ形成（ヨーロッパ人）を育む。個の中に「複言語・複文化状態」を作り上げることは母語と母文化の拡大へとつながり、ヨーロッパ人としてのアイデンティティ形成を促し、「複言語・複文化」の地域共同体市民を育成、地域共同体を建設することになると考えたのである。

しかしこのように国から地域へアイデンティティを拡大することは、実際には決して容易ではなく、それを行うには強力な力が必要である。その力は何かと言えば、「教育」の力であろう。教育こそが人を育て、人が世界（政治、国際関係）を変える力となりうるのである。

この考え方に従うならば、第二言語を母語以外の異言語として学ぶこれまでの日本語教育や韓国語教育は、「複言語」教育へとその様相を変えていく必要があるだろう。異文化教育も同様であり、母文化とは異なる文化としての日本／韓国の文化理解教育ではなく、「複文化教育」が志向されるべきであろう。

図 1 従来の言語・文化教育と複言語・複文化教育のパラダイムの差異



そのためにそれぞれの国の言語、文化の中に個を位置づける（図 1 左）のではなく、個の中に複言語、複文化、国を越えたアイデンティティを育成する（図 1 右）といったパラダイムの転換が必要となる。

その意味では、韓国における日本語教育者、日本における韓国語教育者などは、少なからず自体内に日韓の複言語、複文化が存在し、国を越えたアイデンティティが形成されているはずであり、学生をして国を越えたアイデンティティ形成を先導、育成できる立場にあると考えている。我々がその先頭に立つべきである。

2.3. オーストラリアの多文化主義

「多文化主義（multilingualism）」及びそれに基づく「多文化教育（multicultural education）」は何もオーストラリアだけのものではない。しかし本稿ではこれまで研究を進

めてきたオーストラリアの場合を事例として紹介しつつ考察を進めることにする。

「多文化主義／教育」は通常、一国内の多文化状態について述べるのが普通であるが、白豪主義を放棄し多文化主義へと方向転換したオーストラリアの試みは、異文化を「国」の外から中へ取り込む努力であり、異文化を母文化に取り込む努力であったと言える。このような努力は、日本や韓国にとっても、「国」を越え、近隣の異文化を迎え入れ、多文化が共生する東アジア共同体を形成する際の参考になると考える。

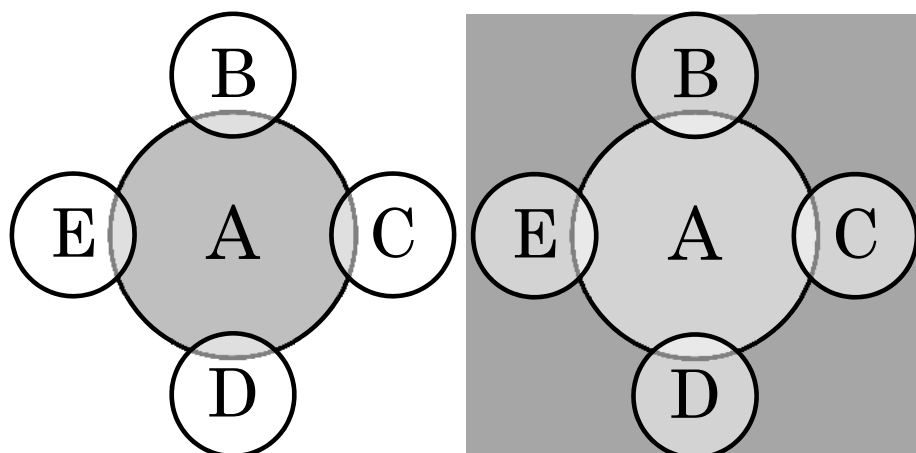
オーストラリアは前世紀の中盤、単文化主義から多文化主義への大転換を図った。1901年以降堅持してきた単文化主義の「白豪主義」は 20 世紀中盤の「同化政策」、「統合政策」を経て徐々に変化し、1970 年代には「多文化主義政策」へと大きく方向転換を遂げたのである。

そのきっかけとなったのが 1973 年の「多文化社会」の表明と人種差別の撤廃を謳った「ガルバリーレポート (Galbally Report)」である。

その後、オーストラリアの何度か政権交替が起こるが、多文化主義は継承されていった。1996 年の自由党政権は「文化の多様性がオーストラリアを結束する力となる」ことをめざし、向こう 10 年間の多文化主義政策と実行計画の検討を開始した。また 1999 年には「新たな世紀のためのオーストラリア多文化主義」を提唱し、オーストラリアの伝統、歴史、民主主義、文化及びアイデンティティの多様性を前提とし、「市民的義務」を履行することを求めた。

このようなオーストラリアの大きな方向転換を図示してみたのが以下の図 2 である。網掛けされた部分が、「自文化」としての範囲となる。左がかつての白豪主義の時代であり、自文化は A のみであるが、多文化主義の時代には異文化 B～E を取り込んで多様性ある自文化を形成している。

図 2 オーストラリアの白豪主義から多文化主義への転換



かつての白豪主義の時代には均一性の調和を求めるあまり、移民たちに同化、統合を求めていた（同化政策、統合政策）。その結果、白人中心の「自文化中心」の発想とアイデンティティを生み出し、そこに包含できない存在は異なるものとして排除していた。これに対し多文化主義では多様性を、結束力をもたらしものにとらえ、「多様性の調和」を求めるようになる。内部に多様性を包含することで、対立の構図をなくし、共生の道を開いたのである。

このようにオーストラリアは「均一性による調和（と異質性との対立）」から「多様性の調和」へ、均一性に基づくアイデンティティの形成から、白豪主義時代の「国」や「民族」の枠を越えた、多様性に基づいたアイデンティティの形成へと大きなパラダイム変化を遂げ

たのである。

但しオーストラリアの多文化主義に問題がないわけではない。何よりも白人の優位性が色濃く残っており、それを越えられずにいることが、塩原（2012）でも指摘されている。この点は東アジアが今後、共同体をめざす際に、日韓中三か国が互いに自身の優位性を保とうと対立することが予想され、そういった事態を考えると、この限界を打開する方策を模索しておく必要があろう。

塩原はこうした問題を解決する方策として、自身の著書（塩原 2010、2012）で「居場所を共有し差異を認め、差異を越えた日常的な対話と協働の実践」を提案している。

塩原では「多文化主義」を、「異なる他者とどのように関わるべきなのか」に対する答えと考えている。したがってこの塩原の「異なる他者とどのように関わるべきなのか」の答えとしての「多文化主義」は、その「居場所」をオーストラリア国内でなく、「東アジア／世界」に拡大することで、「異なる他者と対話と協働の実践」を通じ、「日韓関係の変革と東アジアの共生」「グローバルな世界の共生」を考える際の参考になると考える。

3. 実践事例

以上、日本語教育のグローバル時代におけるあり方を模索するにあたり参考にすべき3つの理論的枠組みを紹介した。本章では2つの実践事例を紹介するが、これらはまさに上記3つの理論的枠組みとも合致するものであり、グローバル時代の日本語教育のあるべき姿を示していると考えられる。紹介する以下の2つは、前者は「多文化交流実習」、後者は「言語と文化」「グローバル化と言語教育」の授業として、日本人学生と海外日本語学習者がいっしょに学ぶ授業である。このような交流型授業自体が、海外の学生にとっては、日本の言語と文化を学ぶ場であるとともに、日本の学生には他の言語と文化を学ぶ場となっている。すなわち、もはや日本語教育と韓国語など、その他の第二言語教育が合体する複言語教育となると共に、言語教育と文化教育とが合体した総合的教育ともなっている。

①日韓大学生国際交流セミナー：これは2004年から協定校の同徳女子大学校と本学とが毎年、日本、韓国のいずれかに集い行っているものである。

②多言語・多文化サイバーコンソーシアムと国際学生フォーラム：これは2007年から釜山外国語大学校との間で開始したTV会議システムを用いた合同授業の経験を土台に、2009年からは8か国8大学に交流の範囲を広げ、多言語・多文化サイバーコンソーシアム（Multilingual Multicultural Cyber Consortium: MMCC）を結成し、展開する実践である。昨年度からは毎年3月に本学に8大学の学生が会し、国際学生フォーラムを実施している。

これらの実践でめざされているのは、以下の3つである。

①グローバルな共生のための協働

これらの実践では日常的にはTV会議システムを用いた合同授業と、フェイスブックやスカイプ、カカオトーク、Google+などを用いたグループ間の交流といった2種類の間接的な交流が行われている。これにセミナー、フォーラムといった直接の交流を補い、半年間に及ぶ直接、間接の「多言語・多文化の共環境」を造成し、居場所を共有し、対話と協働の実践を重ね、グローバル時代にふさわしい人材を育成することがめざされている。さらに「自己・自文化優位」を乗り越えるための課題が提示され、それを対話と協働により解決することがめざされている点で、塩原（2010、2012）の考えとも合致している。

②複言語・複文化教育

本実践は「個人の能力としての複言語・複文化状況」の育成を重視しており、「国」を越え理解し合う枠組みであり、その意味でヨーロッパの複言語・複文化主義の理念とも合致するものとなっている。

③総合的教育

「言語」だけでなく「文化」をも取り入れ、さらに「知識」から「能力」を重視しており、総合的日本語教育の試みともなっている。

3.1. 日韓大学生国際交流セミナー

3.1.1. 概要

本稿では 2012 年度に行われた第 8 回セミナーを紹介する。

まず 4 月～7 月には TV 会議システムを用いて合同の事前授業が行われる。そこでは複言語・複文化環境を実現するために、日本側では韓国語教育や文化理解教育、韓国側では日本語教育や日本文化理解教育が実施される。またフェイスブック、スカイプ、カカオトーク等を用いグループ別交流も行われている。それぞれは日韓両国が抱える難題をテーマとし、しかも対立することなく和合を求めた協働が行われる。

そして 7 月 24 日～31 日に訪韓し、合同のセミナーに入る。期間中、前半の 3 泊は学生の家ホームステイ、後半の 3 泊は江原道で合宿が組まれた（最後の 1 泊はホテル泊）。

4 か月間にわたる事前の授業、交流を通じて、学生は親密度を増すとともに、それぞれの考え方や、受けてきた教育、コミュニケーションスタイルなどに「差異」があることを具体的に直面する。実際に集まって行われるセミナーでは、こうした差異を認めることから出発し、それを埋め合わせ、共通のゴールをめざすことが求められる。4 か月の事前交流で少しずつ培った親密な信頼関係を基盤に、差異を克服し共通の問題の解決をめざして協働が実践されるのである。

3.1.2. 複言語・複文化主義の実践

次にこの実践と「複言語・複文化主義」との関係について述べる。

第一に言語面では、何より日韓両言語（時にはそれを補う形で英語）の使用が求められる。韓国側の学生は日本語専攻の学生など、日本語で議論、発表ができる学生が選抜された。日本側の学生は残念ながら韓国語能力が十分ではないため、最低限日常生活やホームステイなどで使われる最低限の韓国語の習得をめざし、韓国語学習を義務付けている（この非対等性は今後の課題である）。

このように互いが相手の言語を取り込む努力をすることで、両国学生の個の中に複言語状態が形成される。これが複言語教育の側面である。

文化面ではまず自文化中心の視点をグローバルな視点へと高める教育が行われる。今回（第 8 回）のセミナーのテーマは「東アジアの平和のために日韓の若者は何ができるか」で、日韓の問題を「国」のレベルで考えるのではなく、「東アジア」の平和のために共同で取り組む課題としてとらえ直させる。さらにセミナー初日の講演「今こそ過去を越え、グローバル人とならん！」を通じ、日韓の問題を解決するには「国」を越えたグローバルな視点に立つ必要があること、具体的には「自文化中心主義」ではだめであること、「文化相対主義」でも他国の異文化を母文化同様に大切に思い、尊重する思いを抱くには限界があり、最終的にはグローバルな視点が必要なことを強調し、「心のグローバル化」をめざそうと訴える。

セミナーで扱う文化に関するコンテンツは以下のようなもので、佐々木（2002）の考えとも一致している。

第一は、互いの伝統文化を紹介し、教え合うもので佐々木の「所産・知識としての文化」に該当する。具体的には、日本は浴衣、韓国は韓服を相手に着付けさせたり、韓国の伝統音楽を鑑賞、体験したり、韓国料理と日本料理を教え合い、食べ合ったりする。またホームステイでの体験も韓国の住や家族を体験するよい機会となる。

第二は、事前の遠隔教育やセミナーでの様々な討論の中で互いのコミュニケーションスタイルが異なっていることに気づき、それに対する理解を深める。この点については、報告書の個人感想文で多くの参加者が語っている（森山（2013）参照）。これは佐々木の「他者との相互作用に介在する文化」に該当する。

第三は、セミナー期間中の様々な個人間の出会いを通して、それまで抱いていたステレオタイプに修正を加えていく。この点についても、報告書の個人感想文で多くの参加者が語っている（森山（2013）参照）。これが佐々木の「個としての文化」に該当するであろう。

そして、近年このセミナーで最も重視しているのは国の壁を越え、グローバルな視点に立

つことなしには決して解決することのできない、両国間に横たわる未解決の諸問題を、「居場所を共有し、対話と協働の実践を通じて解決していくこと」である。これら問題の解決を通して、各国の個々人の中に居座る「自文化中心の視点」を打破し、「グローバル人材の育成」をめざす。今回のセミナーで扱われた内容は以下の4つである。

①グループ A：日本の中の韓国・韓国の中の日本

日韓両国の報道において相手国がどう扱われているか、両国間に相違はあるか、あるとすればどのようなものか、などについて明らかにする。さらにトップダウンの「報道」の影響を克服していく方策として、本セミナーのような草の根的、ボトムアップ的な「交流」が重要であることを身をもって語っている。

②グループ B：歴史教育

両国の教育において領土問題はどのように扱われ、教えられたかについて、教科書分析や歴史教育を担当する教員にインタビューを行うなどの実践を通して分析した。独島／竹島問題は、韓国では歴史の教科書、日本では地理の教科書に掲載されており、韓国は日本とは異なり、植民地化に伴う歴史的な時系列でこの問題をとらえていることを明らかにするなど、それぞれの受けてきた教育に様々な差があることを明らかにしている。

③グループ C：従軍慰安婦問題

従軍慰安婦の問題が両国でどのように捉えられているかについて、事前調査を行うとともに、セミナー中には日本軍慰安婦の被害者が生活する「ナナムの家」を訪問、その実態について歴史資料と証言から理解を深める。従軍慰安婦の問題を日韓の歴史的問題としてだけでなく、共通の女性としての人権問題としてとらえるといった変化が見られた。

④グループ D：女性の社会進出

この問題は日韓両国が対立する問題ではなく、日韓両国が共に抱える問題である。両国の学生が相互に情報を交換、共有しながら、問題解決のためのマニフェストを提示した。

テーマ別に日韓合同のグループが作られ、事前学習から事後の報告書用の論文作成に至るまで綿密な話し合いの中、和合をめざした。どのグループも、相手国の学生がなぜそのように考えるのかについて理解を深めたことはもちろん、両国の学生の友情の深まりの中で、これらの問題を対立的にとらえる視点から、より親しくなるための「我々（東アジア）の問題」として解決をめざすようになった。十分とは言えないものの、この変化は視点やアイデンティティが国の枠を越えようとしていることを示している。

3.1.3. 自主的な協働による共環境の実現

オーストラリアの課題であり、東アジアが今後越えて行かなければならない真の多文化主義を実現するためには共通の居場所、すなわち共環境が必要であり、そこで親密な信頼関係とグローバルな視点を持ちながらたゆまぬ討論と協働を重ねることが必要である。

本セミナーではこれを実現するために、8日間のセミナーに4か月の事前授業を加える、さらに合宿前半はホームステイで韓国の学生と日本の学生が生活を共にし、後半は全学生が寝食を共にすることで、日韓の学生が同じ空間で共に生き、対話し、共に問題を解決する（塩原 2012）、言いかえれば「共生のための協働の環境」が実現され、「自文化外の異文化」であったお互いの文化を自己内に取り込み自文化化する。両国の視点の対立があることを前提として4月に出発したこの実践は、生活を共にし、共通のゴールを設定し、両国の対立の構図を解消することで、多文化的コミュニティ（塩原 2010）を形成、「国」の枠を超え、地域共同体市民意識とアイデンティティを育てていったのである。

3.2. 多言語・多文化サイバーコンソーシアムと国際学生フォーラム

3.2.1. 概要

本稿で紹介するもう1つの実践は、多言語・多文化サイバーコンソーシアムと国際学生フォーラムの開催である。参加大学は以下の8か国8大学である。

- ・釜山外国語大学校（韓国）
- ・大連理工大学（中国）
- ・ヴァッサー大学（米国）
- ・ボン大学（ドイツ）
- ・カレル大学（チェコ）
- ・ワルシャワ大学（ポーランド）
- ・チェンマイ大学（タイ）
- ・お茶の水女子大学（日本）

3.2.2. 多言語・多文化サイバーコンソーシアム

これも TV 会議システムやフェイスブックなどを通じた事前学習と、世界の学生が本学に集まり行われる直接的な交流を通じて、グローバルな課題に立ち向かい、解決をめざす。先の日韓セミナーが「東アジア人」としてのアイデンティティの形成をめざすとすれば、こちららは「グローバル人」としてのアイデンティティ形成をめざす実践であると言える。

TV 会議システムを使った遠隔合同授業は、交流の「間接性」という点では直接的な交流に比べると限界がある。しかしセミナーやフォーラムは 1 週間程度の非常に短いものであり、その短い期間にグローバルなアイデンティティを形成させるような共環境を作り上げることは不可能である。4 か月間の遠隔交流は、現実的に短期間のフォーラムを長期間のものとしてくれることに寄与している。また、TV 会議システムは互いが自国にいながらにして交流と討論を行うことができ、「ホーム&ホーム」という対等性を実現できる。これは塩原が言う「ホスト&ゲスト」という「対話の非対等性」の解消と同じものである。

第 2 回の 2012 年度は、2011 年度の東日本大震災と復興を考えるものからさらに一步前進させ、福島第一原発被害と世界のエネルギー問題をテーマに TV 会議システムを用いた合同授業が行われた。11 月 1 日と 8 日には大連理工大学と本学、11 月 15 日と 22 日には釜山外国語大学と本学、12 月 6 日にはボン大学と釜山外国語大学と本学の三大学合同、12 月 13 日にはチェンマイ大学と本学とで研究発表や討論、ディベートなどが行われている。

3.2.2. 国際学生フォーラム

上記の日常的活動の集大成として、毎年 3 月に 8 大学の学生が本学に集い、「東日本大震災を考える国際学生フォーラム」が開催される。ここでは国の枠を超えたグローバルな問題をグローバルな視点から取り扱うことで、グローバルな人材を育成しようとする試みで、日本学生支援機構が行うショートステイプログラムに 2 年連続で採択されたプログラムである。2012 年 3 月には、3.11 東日本大震災から 1 年を経過した 3 月 11 日に世界 8 大学の学生が集い、様々な追悼イベントに参加したり、津波や原発の被害にあった被災者やそれを記録し続けたカメラマンの話を聞いたり、被災地でボランティア活動を行った学生の発表などに耳を傾けた。そしてこのようなグローバルな問題について世界の若者は何をすべきか、何ができるかについて討論、考察を加えた。2013 年 3 月には第 2 回が開催予定で、ここでは福島原発と世界のエネルギー問題を考えることにしている。

第 1 回のフォーラムに参加した各国の学生は、参加各国で 3.11 がどのように報じられたか、またどのような復興支援がなされたかについて報告し合った。また、津波や原発の被害にあった被災者や、それを記録し続けたカメラマンの話を聞いたり、被災地でボランティア活動を行った学生の発表を聞いた後、被災者も交えてのディスカッションが行われた。そこでは特に過去に被害を受けた韓国や中国の学生の変化が見受けられた。釜山外大のある参加者は、今まで自分は、東日本大震災を日本の過去史を抜きに見つめることができず、支援を行う気持ちにはなれなかったが、今回のフォーラムを通じ、それを越えることができた。国に帰ったら自分なりに復興支援の行動を起こしていきたい。といった感想を述べていた。

また、欧米からの参加者は、日本という遠く離れた国で起きた今回の問題を自身の問題としてとらえきれずにいたが、フォーラムを通じ、自身の問題としてとらえるべきであること

を語っていた。

また、日本の学生たち、参加した被災者の方たちも、世界の人々がいろいろな形で日本の復興に立ち上がってくれたことを改めて感じ、勇気づけられると共に、世界が1つであること、世界が1つになるべきことを実感していた。

4. おわりに

グローバル時代に求められる日本語教育、異文化理解教育のあり方を述べ、その実践事例を紹介してきた。グローバル時代には、日本語教育、韓国語教育に関わらず「国」の言語、文化という大前提を越える必要がある。また、国民教育制度として構築されてきた東アジア各国の近代公教育も、再考する必要があるであろう（教育史学会 2012）。

ヨーロッパ、オーストラリアをはじめとして、複文化・多文化主義を選択した国々は、教育が政策をリードしてきた。その意味で、私自身を含め、日本語教育（者）、韓国語教育（者）が、日本や韓国がこれまで克服しえなかった国の壁、異文化の壁を乗り越える先駆的な立場に立つ必要があると考える。

<参考文献>

- 李徳奉（2002）「総合的日本語教育の時代に向けて」『総合的日本語教育を求めて』、国書刊行会
- 李徳奉（2006）「日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究』、国立国語研究所
- 李徳奉（2009）「「交流法」による多文化理解教育の効果と限界」『平成 20 年度大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書（学内教育事業編）』、お茶の水女子大学
- 教育史学会（2012）「多文化教育の歴史と現在～多文化から公教育を再考する」、教育史学会第 56 回大会シンポジウム配布資料、教育史学会
- 佐々木倫子（2002）「日本語教員と「文化」概念」『21 世紀の『日本事情』』第 4 号、くろしお出版
- 塩原良和（2010）『変革する多文化主義へーオーストラリアからの展望』、法政大学出版局
- 塩原良和（2012）『共に生きるー多民族・多文化社会における対話』、弘文堂
- 自治体国際化協会（2011）『オーストラリアの多文化主義政策（Clair Report No.358）』
http://www.clair.or.jp/j/forum/c_report/pdf/358.pdf
- 細川英雄・西川教行（編）（2010）『複言語・複文化主義とは何かーヨーロッパの理念状況から日本における受容・文脈化へ』、くろしお出版
- 森山新（2004）「国際日本学との連携による総合的日本語教育の可能性」『第 5 回国際日本学シンポジウム報告書』、第 5 号
- 森山新（2010a）「グローバル時代に求められる総合的日本語教育」『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』、第 6 号、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター
- 森山新（2010b）「第 10 章 グローバル時代に求められる外国語教育とは」『グローバル文化ー文化を越えた協働ー』法律文化社
- 森山新（2011）「グローバル時代に求められる多文化・多言語教育」『2011 年国際シンポジウム多言語多文化同時学習支援<予稿集・論文集>』、宮崎大学国際連携センター
- 森山新（編）（2012）『世界 8 大学合同国際学生フォーラム 2011』、お茶の水女子大学グローバル教育センター
- 森山新（編）（2013）『第 8 回日韓大学生国際交流セミナー報告書』、お茶の水女子大学グローバル教育センター
- 森山新・奥村三菜子・森田衛（2012）「TV 会議システムを用いた総合的日本語教育：多文化・多言語サイバーコンソーシアムの成果と可能性」『ヨーロッパ日本語教育』16、

ヨーロッパ日本語教師会

Hill, B. and Allan R. (2003) Multicultural Education in Australia: Historical Development and Current Status. *Handbook of Research on Multicultural Education*, Jossey-Bass.

* 森山新 (2010a)、森山新 (編) (2012、2013) は以下からダウンロードが可能である。
<<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>>

編集後記

昨年は東日本大震災で中止に追い込まれ、2年ぶりの開催となった今回は、同徳女子大学側でもTV会議システムを導入、事前学習がより充実したものとなった。また今回のグループのテーマにはついに領土問題も加わり、扱うテーマにタブーが消えた。報告書では昨年日本側の個人レポートを加えたのに続き、今年は韓国側の個人レポートも追加された。学生たちが何を考え、どのように成長したのかをつぶさに見ることができてうれしい。このセミナーが日韓、東アジアの平和の起点として、今後ますます発展していくことを切に祈りたい（森山）。

東アジアの平和のために日韓の若者は何ができるか

～第8回 日韓大学生国際交流セミナー報告書～

発行年月日 2013年1月31日

発 行 お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環

住所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

電話&FAX 03-5978-5965

<http://jsl.li.ocha.ac.jp/index.html>

発行協力 同徳女子大学外国語学部日本語科

住所 〒134-714 ソウル特別市城北区月谷洞 23-1

電話 02-940-4370 FAX 02-940-4191

編 集 森山新（お茶の水女子大学）

印 刷 よしみ工産



第8回日韓大学生国際交流セミナー